口に上すまいと思つたものであるが……

が、今更そんな事を言つたからとて、何の甲斐もあるまいから、自分は唯此處に自分の今話さうとして居る話を成たけ他人の事を觀察したやうな心で詳しく話して見ようと思ふ。それにしても何處から話したら一番筋が通つて一番よく解るであらうか。さうだ彼處から話さう。彼處から話せば一直線で、單純で、其上運命が嵐の樣に來て、まだ咲かぬ蕾や、咲き懸けた花を散して行く酷い樣が好く顯れて見えようから――それは前にも言つた通り自分の廿三歳の夏で、もう今一日で文科の一學年の定期試驗が濟んで了ふといふ日の午後であつた。此日は多い學科の中でも平生得意な國史の試驗であつたから、何の苦もなく答案を作つて、まだ他の生徒が一生懸命に遣つて居る中を鷹揚に通り越して、それを試驗委員に渡すとそのまゝ急いで講堂を出て了つた。天氣が此上なく好い日で、夏の暑い日影がきら〳〵と澄んだ空氣の中に漂つてゐて、深く生茂つた樫や櫟などの若葉の薫が、かをるといふ程でもなく、靜かな穩かな空氣の中に交つてゐた。ふつと薄紫の小さい雲が、向うの洋館の上に顯れたかと思ふと、瞬く間に小さくなつて、まだ幾歩も歩かない中に、もう消えて影も形もなくなつて仕舞ふ。自分はこの夏の美しい空の色を見ながら、アンブレッショニスト派の油畫の事などを考へた。そして本當にあの紫の色でなくては、此の夏の空や光線や空氣などを畫く事は出來まいと思つた。それから又二三歩も歩くと、もう考が變つて、あゝ明日限りだと思ふ、明日が濟めば、もうこんなに暑い東京に居ないでも好いのだ、故郷

のあの利根川の畔を、詩でも吟じながら、悠々と散歩する事が出來るのである。それにしても今年こそ、この夏こそと、一歩突込んで自分はある事を自分の胸に私語いて見た。すると、自分の心は丸で電氣にでも觸れたやうに止度もなく亂れ出して、今直ぐにも飛んで故郷に歸りたいやうな心地がする。そして無闇に人が戀しくなつて、誰やらの美しい姿が、あり〳〵と自分の眼の前に顯れて來る。今更斷らないでも解らう、自分は戀を爲て居るのだ。自分は二十三歳だ、二十三でまだ戀を爲てゐないものは恐らく無からうから。

『この夏こそ屹度話さう……何も彼も打撒けて仕舞はう。』

と、思はず知らず口に出して言つて、『本當にこんなに苦しくつては、とても押へて居る事は出來や爲ない。』

又むら〳〵と思出される。前に淋しい沼があつて、後に利根川の帆が堤越しに夕日の影を帶びて居る。それに自分はある美しい少女と話をして居る。自分は何か二言三言輕い調子で口を開くと少女は莞爾とやさしく笑つた。その美しさは！　自分は堪らなくなつたから、其儘寄宿舍に歸るのをやめて、右の新綠の深く生茂つてゐる築山の立木の中へと入つた。今は其池は埋められ、築山は平たくされて、もう見る影も無くなつたが、其頃はまだ却々山林の趣があつて、小徑を四五歩も入ると、丸で別世界で、木立の間からちら〳〵見える池の水の色や、熊笹の順序もなく生茂つてゐるさまや、芝草の上に撫子が

二つ三つ滴れたやうに咲いてゐるさまなど、隨分人の心を惹く處であつた。自分は池に向いた、少しだら〳〵と下りかけた松や樫の蔭を作つてゐる處の榻に倒れるやうに腰を息めた。

もう何も彼も忘れて、ぢつと耳を欹てゝ居ると、いろ〳〵な物音があたりに聞える。魚の跳る音、街の方で氷、氷と賣行く聲、車の遠く輾り行く音、松の梢の微かな響、何處かで蜂のぶんと唸る聲、……何うしても夏だ。

あまり靜かなので、唯々恍惚と林の間を洩れて來る美しい日の光を眺めて居た。後で何かがさがさしたが、犬でも叢を分けて來たのかと振返りも爲ないで居ると、突如自分の肩を撲いたものがある。

『おい、何を爲て居るんだい、待つて居るのかい。』

驚いて振返つて、自分は日頃最も親しく交際つて居る友のやさしい笑顏を認めた。これは青年詩人で、潔癖のある理想がゝつた新體詩を世に出して、少しく人々に注目された二十七八歳の男で、自分は十六歳の時から心も隔けない程に親しく交つて居る仲で、一週間に一度逢はなければ、互に氣が濟まないといふ程であつた。エルテルの書、ハイネの詩などは、この友も自分も非常に好きであつた。

『吃驚した……君か。』

『何處に居るかと思つて何んなに探したか知れないぜ、先づ、初めに寄宿に行つて聞いて見たさ。すると講堂に行つたといふから、引返して共處に行つて、あの櫻井が居たから聞いて見ると、宮崎は今出

て行つたつて言ふぢやないか。何うしたんだらう、まさかに門外に行きも爲まい。屹度例の……と思附いたから、此處に來て見たが、こんな處に居るから、却々解りやしない。』

『それや氣の毒だつた。』

『それでもう試驗は濟んだのかい。』

『まだもう一日……明日で濟むんだ。けれど此間約束した君の家に行く事はもう出來ないよ。』

『何故。』

『何故つて、明日午前試驗が濟むとすぐ國に歸らうと思ふから。』

『國から何とか言つて來たのかい。』

『何にさうぢや無いけれど。』

『でなけれやそんなに急いで歸らなくても好いぢやないか。些とは僕とも話を爲て行き給へな。歸れば、また二月と逢はれないんぢやないか。』

『それや左樣だけど……何だか僕は變で、一刻も愚圖々々しちや居られないのだよ。』

友は怪しげに自分の顏を見た。『變て、何が變なのだい。』

『それや言へないがね。』と言つて自分は默つた。自分は今迄從兄と國のをば樣とに話した外、親友にも誰にも一言も此自分の戀を話した事は無いので、全く自分の秘密であつたので。けれど今ふとこれを

友に話して見たいやうな心持が起つた。恐らくこの四邊の夏の午後の靜かな空氣と明かな日影とが、自分のやさしい思出を誘つたのであらう。

『それや一刻も早く故郷に歸りたいのは僕も知つて居るさ。』

と、友は暫く經つてから口を開いて、『だけど君は待つてる兩親も無いんだから、割愛して僕と二三日……』

『それぢやもし君』と、自分は思切つて、打明けようとしたが、意氣地なく胸が少し戰へた。

『もし君』と又言出して、『君は今待つてゐる兩親が居ないからと言つたが、もし僕に、故郷に戀人でもあつて、それを久しい前から戀してゐて、しかも打明ける機會が無くつて、二年三年と徒らに月日が經つたと思ひ給へ。そしてこの戀人（ラバー）も今は人に嫁ぐやうになつて居ると思ひ給へ。そして自分は今、今年こそ、この夏の休暇にこそ、殘らず苦しい思ひを打明けて語らうと思つて居ると思ひ給へ。それでも君は留めようと思ふのかえ。』

笑ひながら言ふと、

『そんな事は無いから大丈夫だ……』と友も笑つて。

『無いとは酷い。』

又暫く二人は默した。日影は前の樫の木の間を洩れて、自分の顏を眩ゆい程まともに照す……友は自

分をぢつと見て居たが、急に『そんな戯談はやめて本當に明日試驗が濟んだら僕の家に來給へ。僕は待つてゐるよ。』

『本當に戯談ぢや無いんだよ。僕は君に今迄少しも言はなかつたけれど、今は苦しくつて仕方がなくなつて了つたから言ふんだが、僕が本當に今言つた通りなのだよ。』

自分の聲は眞面目であつた。いかさま戯談とは思へぬ程眞面目であつた。で友も少し驚いて、怪しい素振をして、何か言はうとして、しかも言はずに、ぢつとして立つて居たが、やがて自分の心の中までも讀まうといふやうな眼色で自分を見て、

『それぢや本當なのかい。』

『本當なんだよ。』

自分の聲は非常に低かつた。友はあゝ言つたら屹度笑ひ出すだらうと思つて居たのに、何處までも自分が眞面目でゐるので、いよ〳〵驚いて、少なからず心を動した樣子であつたが、その儘今迄立つて居た身を榻に寄せかけて、低い優しい聲で、何故そんな事があるのに、今迄一言も話して呉れなかつたと言つた。そして今それを話せと迫つた。この友は優しい、清い、戀の事は殊に美しく思つてゐる青年であつた。

自分は三年前から思つてゐた戀の話を、何んな言葉で、何んな嬉しい激しい心で、このやさしい友に

話したか。日の影のきら〳〵と線のやうに樹下に落ちてゐる林の中に、二人の友がいかに久しくやさしい戀の心を語り合うて居たか。

『詩にしたらどんなに美しいだらう』と、その話の中、幾度となく友は言つた。自分は嬉しくつて、そく〳〵して、何だか自分の戀しい少女が、天女か何ぞにでもなつて、遙かに自分より上へ行つて了つたやうな心地がした。

林の角で二人の別れたのは、もう夕日が池の一面を花やかに染め出した頃で、庭の四面の大樹には、涼しい風が吹渡つて居た。それでは別れようと立留ると、

『それぢや彼方から手紙をよこして呉れ給へ。僕はこの美しい君の戀の幸福を神に祈るから……』と、友はさも〳〵自分の話に感じたやうに優しく言つて、其儘此處に別を告げた。自分はいよ〳〵嬉しくつて戀の願も何も彼も成就して了つたやうな心地がして、あまたゝびこの友のやさしい事を心の中に感謝した。それにしても自分は明日故郷に歸る事が出來るのだ。故郷に歸つて、この心を悉くかの女に語る事が出來る身であるのだと、思ひ寐にその夜は過ぎた。

自分は友に三年以來の自分の戀を何ういふ風に話したか今は分明と覺えて居らぬ。けれど、今此處に其事を少しなりと話さなければ、物語の連絡が取れぬから、自分は今の考で、少し此處に言はうと思ふ。……自分の故郷は、下總國茨城縣船越といふ町合の驛であるが、小さい町の割には隨分富家も多く、

家竝も整つて、人間も新知識に富んだ者が比較的に多い所である。ことに、風景の好いのは、東京附近には先珍らしい程で、洋々とした利根の大河を隔てゝ、茨城縣船山の町と相對してゐるさまは、まことに一幅の畫のやうである。同じ自分の友人で、時の批評家なにがしが、曾て自分を此船越に尋ねて『昔はヘレスホンドの海峽を隔てゝ、亞細亞と歐羅巴とにヒロオとレアンダアといへる戀人ありき。男なるヒロオは、海を泳ぎてレアンダアが許に至るを例とせしに、さる寒き冬の日に、彼は終に凍え溺れて死しきと。こは名高き物語なるが、この二つの町の趣、これにも增して面白き話の出づべくぞ見ゆる』と、其訪問記に記した事があつたが、まことに一つや二つは何か面白い物語でもありさうな處で、先づ西の丘の高い處から、帆前船の幾箇となく晩風に孕んで歸るのを見下し、又は下流の下汐の町の白堊に夕日の影の照り渡るのを眺め、又は右の廣い田圃を隔てゝ鏡のやうに光つて見える大沼の雁鴨の列を爲して下りて行くのを見送つて、絶壁の危い路を恐る〳〵下つて行くと、茅葺屋根の農家が二三軒顯れ出でて鷄が四五羽いつも頻りに餌を拾つて遊んでゐる。それからはちすの垣のある敎師の家、それから海陸諸鳥と大きく障子に記した鳥屋の店、それから幾百年を閲した銀杏の大樹、それからは殆ど軒を連ね甍を竝べて、一直線に其船越の町は成立つてゐるのである。自分の兄は醫師で、家は丁度銚子東京通ひの汽船問屋の横町を右に入つて、突當つて姉樣道と云ふ細い道を、猶左に一町程行つた處の一寸した二階造の家である。自分は十五歳までは、小學校に行つた事と、近所の田や川で鰌を取つた事と、よく前

の兒を泣かせた事と、猶そのやうな事二つ三つとの外に、何も記念を持つて居らなかつた。さて十五の春、小學校を卒業して、それから東京へ出て、十八の夏に高等學校に入つて、それからは春と夏との休暇には、いつも國に歸つて、父母の安否を問ふのが例になつて居た。まだ其の頃は父も母も達者で、裏の離座敷に世を離れて、至極呑氣にして生活してお出なされたので、自分が歸ると、『あゝ定雄か、よく歸つて來た』と、非常にお喜びなされて、何も彼も忘れて、餘念なく自分を慰めようとして下された。難有いのは親の愛だ。あゝ本當に世の中にあの愛ほど高く厚く難有いものは又とあらうか。であるのに、自分は二十一の晩春から中夏にかけて、纔か六十日の間に、母と父とに殆ど一緒に別れるといふやうな悲しい目に邂逅したので。此時の悲みは、今でも思出すと自分は涙を零さぬ譯には行かぬ程であるから、其時は果して何んなであつたらうか。殆想像にも堪へぬ程であつた。ことに、自分は何方かと言へば寧ろ氣の弱い性質で、兎角鬱ぎ勝であつたのに、折惡しく其頃又少し肺の工合が惡くつて、殊によると結核にでもなりはせぬかと、人々に案じられた時であつたから、兄弟等は非常に心配して、もしやつゞいて逝くやうなことはありはせぬかと思つたと、後での話であつた。この時、悲哀に沈んでゐた時であつた、自分がその少女をしみ〴〵戀しいと思つたのは。否一年も二年も前から自分はよく裁縫のをばあ樣、これは母の常に往かよふ四十ばかりのやさしい寡婦で、町の娘等に裁縫を敎へてゐるのであるが、そのをばあ樣の家で優しい美しい少女の黑い眼に眼を付けて居らぬではなかつた。否をばあ樣から少女の性

質の優しいといふ事を聞いて、一夜寢ずに考へた事もあつた。けれど今自分と同じやうに、その少女も慈愛ある母を失つて、萎れ果てゝ墓詣に行くといふ事を聞いた時程自分は心を撲たれた事は無かつたので、自分は堪へ兼ねて、もしその少女が、墓詣するのに逢つたなら互に儚ない身であるといふ事を語合つて、慰めて遣らうと思つて、わざ〳〵墓の近傍を逍遙つてゐた事さへあつた。誰だか戀といふものは谷川が石に當つては激し、岸に當つては溢れて、遂に大河となるやうなものであると言つた。まことにその通りで、戀といふものは多くは歷史的の記念から、段々に生長し、段々に激昂して行くものであらうと自分は思ふ。少くとも自分の戀はさうであつた。始めは只美しいなと思ふ、眼と眼とが行き逢ふ。あゝ先で何とか思つては居はしないかと思ふ。何の馬鹿な、そんな事があるものかと打消す。さてそれば かりで濟めば好いが、始終互に近くにゐると、先の種々な素振が自然眼に附く。あゝも爲た、かうも爲たと種々な解釋を施して、然して見たり、消して見たりする。すると又その事が非常な勢力になつて次第に姿が眼に附て忘れられなくなる、自分の戀もそれであつた。その父母の死んだ時からと言ふものは可愛相だと思つたその心が次第に嵩じて、東京に行つてゐても、絶えず其事を思ふ樣になる。春夏に歸る時にも、其人に逢ふのを樂しみにするやうになる。猶嵩じて、詩や文を作るにも、やさしい姿を思出すやうになる。猶又その少女を歌つた詩や文が友人間に賞讃されると、自分の戀人が天女か何ぞのやうに美しく高いものになつて、いよ〳〵其戀は募つて行つたが、廿二の夏、遂に堪へ兼ねて、ある晴れ

た靜かな夜、緣側に坐つて、をば樣に殘りなく打明けて了つた。をば樣といふ人は、極くやさしい性質で、自分の母の死ぬ時、この人に子供等を賴むと遺言した位であるから、自分等の事は絕えず念頭にかけて居て呉れる人なのであるが、この突飛な自分の願を聞いて、それは出來ぬ事では無いけれど、まだ若くつて心が決らぬからと言つた、すると不思議なもので、この言葉が、自分が多少疑はれたといふ事が、又一つの有力の刺戟劑となつて、是程思つて居るのに……と戀は愈募つて行つた。をば樣は其後多少自分の眞面目な心を見拔いたと見えて、度々手紙をよこして、貴郎さへその心なら、妾は幾重にも世話は爲るから……と、かへすがへすも言うて呉れた。けれど自分のやうな烈しい感情では、廖うしてそんな消極的の戀に安んじて居られようぞ。

それで自分は假令をば樣が何と言はうと、いかに兄が反對を唱へようと、兎に角この夏期休暇の中に、自分の心を彼方に通じて、遂ぐるものならば遂げよ、破るゝものならば破れよと思ひ立つたのである。

あゝこの青年の狂熱といふもの……

二

翌日の夕暮、自分は小高い松原の芝草の上に腰を息めて、眼前にひろゆられた美しい天然の大景を眺

一眼に見渡してゐた。自分は故郷に歸る度に、いつも其利根川の三角渡を渡らぬ事は無いのだが、今迄一度もこんなに美しいと思つた事はなかつた。まゝそれにしても何といふ美しい景色であつたらう。わが故郷の船越の西丘と、對岸の船山の明神の森とは、丸で浮彫か何ぞのやうに、夏の夕暮の靜かな碧の空の中に浮出でゝゐて、もう餘程低くなつた夕日の影は、それから半里も手前のとある一かたまりの村の茅葺屋根を油畫のやうに照してゐる。幅四五町もあらうと思はれる利根の大河は、自分の後から洋々として流れて來たが、自分の休んでゐる丁度前あたりで大曲に曲つて、また少し左に曲らうとして、不意に森の蔭から流れ出た春秋川を合せて、更に素直な方向を取つて、船越と船山との丘と森との間に、たう〳〵として流れて行く。兩岸にはいろ〳〵な景色や、いろ〳〵な風物が亂れ合つてゐて、長い洲を爲した蘆原があるかと思ふと、蛇ののたくつたやうな低い長い堤防が見え、その右にはどんなに樂しい人生が籠つてゐるかと思はるゝ一村落があつて、又その向うには一望千里とも言はるべき畠田がはるばると地平線の末まで連つてゐる。ことに面白いのは帆で、その日は恰も風が東南の方向であつたから、いづれも皆遠くから上流へ上流へと上つて來る。そら今春秋川の灣を爲した森の蔭から、一つふは〳〵と出て來たと思ふと、それがいつの間にか蘆原や渡場あたりを通り越して、大曲の曲り角で、ぎーと舵を取る音がして、今迄向ふを向いて來た帆が、すうと少し横向になると夕日が潑とその全面に照りわたる……。

『やァあの帆を見ろ……それ日が當つた』といふ聲がすぐ下に聞えたので、自分は驚いて見下すと、その畑の下の日蔭に、二三人の子供がゐて、自分と同じやうにその面白い帆前船のさまを眺めてゐた。自分は、愈々面白くなつて早く歸らうといふ事も忘れて、また帆前船の黑い森の蔭から顯れて來るのを、今か〳〵と待つてゐた。ぎーと舵の鳴る音がしたと思ふと、纔當だらけの古い大きな帆が、ぬつとして顯れ出た。

『そら出た……』と、下で子供等が手を拍つた。帆は悠々と宛で蟲の這ふやうに、其流を上へ上へと上つて來る。蘆原も過ぎた。渡場も越えた、そらもう大曲……ぎーといふ音……そら帆が横に曲り出した。

『やァ……日が……』子供等は又囃し立てた。

けれどこれも暫時で、一つ二つ三つ程數へる中に、夕日もいつか後の丘に落ちて了つて、丘と丘との間に、夏の夕暮の霧が被衣でもかけたやうに棚引わたつた。なつかしい故郷の西丘もすつかり薇ひ隱されて、丁度夢に見たやうになつて了つた。さうだと自分は思懸けて、よく自分はあの西丘を夢に見た事があつたが、その時の景色は今のあの樣に少しも違つた所は無いやうであつた。かう思ふと、其事が盛に思出されて、その西丘の下になつかしい人が住んで居る事やら、自分は今度こそ是非苦しい心を打明けて語らうと決心した事やら、作日友人と大櫻の庭で、激昂してその物語をした事やら、今日は試驗が濟

むとすぐ、行かなければならない親類にも行かずに、その儘田端から汽車に乘り、大崎から徒歩で、今少し前こゝに來たのであるといふ事やら、何やら彼やらを思ひ出して、其儘急に立上つて、そして今一度あたりを見た。

暮色は愈深くなつて、向岸の森や人家や堤防が一つ一つ暗黑の中に見えなくなつて仕舞つた。船越の森は瞳を凝してももう見えない。自分ははつと心付いて、其儘急いで駈けるやうにして坂を下つた。坂を下り切つた處は桑畑で、その間を少し行くと、右に淡竹の藪があつて、左に蘆や萱がざわ〳〵として夕暮の風に吹かれてゐる。それを越すともうすぐ三角の渡場であるが、自分は藪を出ようとして、ふと右の方を顧みて、不思不知立留つて聲を擧げた。

『あゝ月が……』

自分は今でもその時の感興を忘れる事が出來ない。すぐ向ふの森蔭から、十四日の月は皓々と顯れ出でゝ、その赤い光は、まだ薄暮の光の薇つてゐる川の上に、閃々として、金を碎いた。

渡場には老船頭が舟を艤して自分を待つてゐる。自分が飛乘るや否、船はゆる〳〵と廣い大きな流に浮び出る……。船頭は棹を留めて、さも〳〵眩しさうに月を見て、『好い月夜だなァ』といつて、其儘艫を小腰に推しながら、老いてもまだ皺枯れない聲で、さも心地好さゝうに欸乃(ふなうた)をうたひ始めた。その澄んだ聲が廣い川に響き渡つて、遠く〳〵消えて行くのを、自分は聞くといふよりは寧ろぢつと見てゐた

が、堪らなくなつて、自分も低音に詩をうたつた。

けれど自分の今宵のうかれ心は、決してこれに止らなかつたので、渡を向うにわたつて了つて後も、自分はその詩吟の聲を絶たなかつた。否その西丘に至る間の蘆原に添つたさびしき長い路を自分は殆うかれ切つて、丸で酒に醉つたやうな心地になつて、何も彼も忘つて唯うか〳〵と歩いて行つた。

であるのに、何ういふ譯であつたか、西丘を船越の町へ下りようとする松原の角に來た時、自分はふと立留つて、何となく心細くなつて、もしこれも遂げられなかつたら……と思つた。是程思つて居りながら、この心がもし先方に通じなかつたら……

「けれども自分はすぐ思返して、そんな事を思ふのは、この烈しい戀の恥辱とも言ふべき事だ。そんな事は思ふまい。そんな取越苦勞はすまい。この烈しい狂熱さへあれば、どんな少女だとて、心を動かさずには居られまいから、と、瞬間にその些少な雲翳をも殘る處なく追拂つて了つた。あゝまだ自分は青年の夢に醉つてゐて、あまりに多く天分を信じて、世の中に望んで得られぬものは無いとまで堅く自から信じてゐたのである。」

月がきら〳〵と利根の大河に碎けるのを見ながら、涼しい心地よい風に吹かれて、汽船問屋の二階造の家の角を右に曲ると、もうそこからは自分の家の門前に靡いてゐる柳の影が薄くぼんやりと地上に印せられてゐるのがよく見える。雄の聲が何處からともなく聞えて來て、處々に燈と窓障子の明くなつた

家も二三軒見える。かと思ふと、曲り角の破れ家から、さも〳〵面白さうな笑聲が洩れて聞える。死の霧はそこら一面に棚引わたつてはゐるが、しかし空はよく晴れて、星の處々に輝いて居るのもよく見える。

養春堂醫院と一六風に書いた大きな札の掛つた門を入ると、玄關の傍の藥局に、洋燈が明く點されてあつて、何か頻りに子供等の騒いでゐる聲が聞える。又姪や甥が騒いでゐるのだなと思ひながら、自分は戸をがら〳〵と開けた。けれどその騒ぎに氣を取られてか、誰一人出て來るものはない。

『絹ちやん絹ちやん』と自分は今年十一になる姪の名を二聲ほど呼んだ。

『あれ誰か呼んで居てよ……お放しよ、あれ伯父様だ……』

と、さも嬉しさうなやさしい聲が聞えて、やがて丸顔の、にこ〳〵とした、愛らしい、お煙草盆に結つた姪の白い顔が、すつとそこに顯れた。かと思ふと、

『ほら御覽、伯父様だ！』

と、又やさしい聲をする。

『伯父様〳〵』

と、其跡からぞろ〳〵と、姪やら甥やらが出て來た。きよろつとした眼をして、さも〳〵驚いたやうに自分の顔を見て居るのは、今年七歳の春雄といふ男の子で、傍に寄つて一生懸命に自分の袖を取らう

としてゐるのは、今年九つのお貞といふ女の子である。否そればかりではない、去年生れたお雪といふ女の子まで、玄關の四疊半に這ひ出して來て、自分の顏を見て、頻りに仇氣ないお辭儀をしてゐる。

自分はこのやさしい姪や甥に取卷かれて、それを振切る譯にも行かず、其儘其處に立往生の姿で居ると、後の唐紙がすゐりと開いて、そこに三十ばかりの癖のない細顏の嫂の顏が顯れた。

『おや〳〵まあ！』と、先呆れたといふ聲で、『そんなに取卷いちや、伯父樣は動けもしないわね……』と先づ這寄つた稚い女の子を抱き上げて、それから笑ひながら自分に向つて、『大層早かつたぢやありませんか。今日試驗が濟むといふお手紙だつたから、早くつても明日だらうと思つて居りましたに……』

『え、』と自分は小い包を抱き上げながら、『明日に仕ようと思ひましたけれど……東京に居ても暑くつて仕方がありませんから』

『それもさうですね……』と言ひながら、嫂は六疊の火鉢のある一室へと導いて、團扇など取つて呉れた。自分の家は代々の醫師ではなかつたので、祖父の代までは武士ともつかず、農商ともつかぬ、所謂處の鄕士といふものであつたので、隨分この船越の町では幅が利けた方であつたさうだ。處が父の代から、何ういふ積か醫師になつて、折よく所にも信用され、この近鄕にも病家が多く出來た處がら、兄がその學を修める事になつて、二十四の歳大學の研究科を卒業して、首尾よく父の箕裘をついで、今にこの近鄕の醫師では宮崎と言はれる程の株になつてゐるのである。ことに、自分等兄弟の（自分にはまだ

弟が二人ある。一人は法律に、一人は美術に、いづれも相當の教育を受けてゐる。）この兄に感謝しなくつてはならないのは、この兄が我々弟の爲めに功名心も、虚榮心も、何も彼も殆悉く犧牲に供して呉れた事で、もしこの兄が功名心に趁はれて家の事などをかまはなかつたならば自分等は決してかうのんきに、かう完全に階梯を踏んで教育されて行く事は出來なかつたのである。いま頃は浮世の波に捲かれて、如何に苦しんでゐたか知れぬ。それであるのに、世間では兎角といふと兄といふ者を惡く言つて、世話になつた御當人の弟すらも、兄も俗物で駄目だなどと、人の前で廣言して憚からぬものもある。ちと暴言を謹んで貰ひたいものだ。

いつも次の間で書を讀むか酒を飲むかしてゐる兄が見えないから、『兄樣は？』つて聞くと、『今丁度お隣に碁を打ちに行つて……』と、嫂は答へた。

『お隣でも變る事は無いんでせう』と、自分は尋ねるともなく尋ねた。隣といふは、矢張處にも聞えた豪家で、自分の家とは父の代から親類のやうに懇意にしてゐる間柄で、自分はその肥つた俠氣のある人の好い主人に、どれ程世話になつたか知れない。幼稚い時分から、鳥銃打に連れて行つて貰つたり、東京に連れて行つて貰つたり、それは〳〵遠い伯父などよりは何程好いと思つたか知れぬ。であるから、自分の高等學校に入つた時も、大學に入つた時も、非常に喜んで呉れてやれお祝だとか、やれ送別だとか、何とか名を付けて、御馳走をしたり、金を呉れたりして、いつも厚い世話になつてゐる。それば

かりではない、妻君といふ人も、老母といふ人も、至極好い優しい人であつたし、その總領娘も（自分と三つ違ひで今年二十である）小學校以來自分と仲が好かつたから、自分はよく一寸〳〵と出懸けて行つて、小説の話や詩の話などを、得意になつて話して聞かせて、老母や妻君を殆感服させるのがいつもの例になつてゐた。

『別に變つた事は……あの子供が生れたのは知つてゐるのですね』と、嫂は輕く受けたが、暫く經つて吸ひかけた烟管をとんと叩いて、『それから本當に……』と、何か急に思出した風で、

『ほんに、あのお秀さんの事がありましたつけ。あれはこの六月の末頃でしたか、あの佐倉の叔母様が來て、何處か何でも好い所に、お嫁の世話を爲るとか言つて、頻りに乘氣になつてお出なすつたさうでした。父様は餘り乘らないやうでしたけれど、母様と老母様とは、非常に乘つて、そんな好い所は無いからつて、いろ〳〵にさう言つたんですと。けれどお秀様が何うしても厭だつて……此間までまだ纏らずにゐた樣子でしたが、何でも七八日前到頭斷つて了つたといふ話でした』

『何故そんなに嫁に行くのを嫌がるのでせう、もう二十だのに……』自分は何の氣も無しに唯うかとかう言つた。

『本當に……』と嫂も少し考へて、『本當にあの美しさでは何處へだつて、好きな所に嫁けない事は無いのに……』と言つた。自分は此時變な心地が爲た。

下婢が運んで出した夕飯を濟ましても、兄が歸つて來るやうな樣子が無いから、嫂はお絹を迎ひにやらうと言つたけれど、どうせ隣にも顔を出さなければならないの故、自分は其儘庭下駄を突懸けて、父母の元住んでゐた、今は自分の室になつてゐる離座敷の傍を通つて、月草、撫子、蝦夷菊、薔薇などの爛漫と咲亂れてゐる花園の中を、裏の柴折戸の方へと行つた。〳〵は隣の奥庭と接してゐて、青桐や、樫や、櫻や、矢篦竹がこんもりと一面に生茂つて、その絶間から、隣の座敷の燈の光が、青く洩れてゐる森など、丸で田舍源氏の畫を見るやうである。自分は此閉ぢられた柴折戸の前に來て、不思不知足を佇めた。これは自分の癖で、自分はある時ある場合に、物に感ずると、人が見ては何のつまらぬと思ふものに、非常な美を發見して、瞠若として後に倒れようとする事が幾度もあるので、今も柴折戸の前に來て我知らず足を佇めると、何だか知らぬが美しい〳〵者が自分に迫つて來るやうで、何とも彼とも言ひやうのない心地がする……何處か遠くで蛙の夢のやうに啼く聲、夜の空氣の濃い靜かなしめやかなかをり……。自分は堪らなくなつて、柴折戸の鍵を外すと共儘、戸を突放すやうにして、急いで隣家の奥庭に入つた。

總領娘がよく機を織つてゐる小屋の右手から、白堊造の土藏の傍を通つて、今しも自分は向うの花園に出ようとした。するとふと自分の傍に、すうと、立つた黑いものがある。（このあたりは木立が深くつて、月の影が全く到らぬ故、少し暗い。）

『誰？』

其聲はやさしい聲であつた。

『私です』

『おや定雄さん！』

いかにも、嬉しさうな聲であつたので、自分は何となく胸が少し戰いた。さてその儘に行かうとしたがそれは餘に無情だといふやうな心持がしたので、我にもあらず足を停めた。薔薇の香が何處からか微かに微かに匂つて來る。

自分等は暫く默つて立つてゐた。

『妾はまだ……』と、暫くしてから娘は低い聲で、『まだこんなに早く歸つてお出なさらうとは些とも存じませんでしたから……御兄さんが何うしてもまだ二三日經つてからだらうと仰しやつたもんですから』と、少し氣に乘つて、『そして妾が此處に居たので、さぞ吃驚なすつたでせうね』と笑ひながら、自分の顏を見る樣子であつた。

『私よりか……貴孃の方が吃驚なさつたでせう。人の家の裏門から、案内もなしに遣つて來たんですから』

『否え』と言つて、『だけど、妾、本當言やあ吃驚したのよ。本當に誰かと思ひましたものを……妾は

餘り暑いから、風にでも吹かれようと思つて、今しがた此處に來て、ぢつとして居ると向うの方で、がさ〳〵と笹の音がして誰か來るやうなんですもの、誰だらうと思つて見てゐると、脊の高い人が、ずん〳〵此方へ來るやうですから……誰かしらんと、聲を懸けると、定雄さんなんでせう、妾はどんなに……』

語尾を言はずに言葉を留めて、少女はその儘低頭いて仕舞つた。此時丁度月が白堊の土藏の陰から、畫に描いたやうに顯れ出て、低頭いてゐる少女の顏を、さも〳〵眩しさうにまともに照した。自分は今迄曾てこの時ほど、この月のぱつと匂つた一刹那ほど、この少女を美しいと思つた事はない。元來この娘は船越の町でも美しいと評判される程であるから、顏立といひ、目付といひ、何一つ好ましからぬ處は無いのであるが、自分は始終往來してよく見馴れてゐる故か、今迄さして際立つて美しいと思つた事は無かつた。であるのに、今宵に限つて、何故自分の心をかう動かしたか、何故その白粉の匂つてゐる、眞白な顏や、低頭き勝にしてゐる仇氣ない眼や、すらりとした立姿などが、烈しく自分の心を轟かしたか。自分は曾て『戀する少女は常よりも美し』といふ句を見た事がある。

もしや……と思つた。

『お宅に兄が參つて居るでせう』

自分は漸く自分のみだれた心を押へて、かう言つた。

『え……奥に』

さう思つて聞く故か、その聲にも何處となくやさしいしめやかな美しい調が籠つてゐるやうに思はれた。それから自分は奥に行つて、酒に少し醉つてゐる兄に、今歸つて來た事を告げ、隣の主人にも、春期來た時の禮など言ひ、それから茶の間に行つて、妻君にも老母にも逢ひ、猶稍暫く其處でいろ〳〵な事を話してゐたが、船山の德壽寺の十時の鐘が、靜かに水を渡つて聞えて來るのに驚いて、自分は匆々にして歸つて來た。と見ると、自分の離座敷はもうすつかり掃除されてあつて小さい燈火が、机の上に明るく點いてゐるばかりではなく、一室には寢床が敷いて、蚊帳までちやんと吊つてある。自分は母屋に行つて、其禮を言つて、それでは今日は勞れたからもう寢ますと斷つて其儘自分の室に歸つて來た。けれど何うしてか、妙に氣が冴えて、この樂しい月夜を寢るのは惜いといふやうな心持ばかりして、何うしても蚊帳の中に入らうといふ氣が仕ない。仕方が無いから、猶其處等ぐる〳〵と庭の木立の中を兩三遍も廻つていろんな事を考へて、詩を二つ三つ歌つて、それからもう何うしても寢ようと決心して、嫌應なしに、蚊帳の中に入る事は入つたが、まだ何うしても眠られないから、洋燈を蚊帳の中に入れて、讀みかけたツルゲネーフの『煙』を讀み續けた。けれど自分ながら呆れるのは、自分のうかれ心で、それをさへぢつとして讀んでゐる事が出來ない。まゝよ、洋燈も消して仕舞へ、さうしたら據なしに蟲も靜まつて眠られるだらうと一呼吸に枕許の小洋燈を吹消した。

雨戸を閉てぬ窓から月がさし入つて、何處からともなく、蛙の聲が微かに聞える……。自分はふと父

母の死んだ後に、汽船で上京しようとした時、あの川の埠頭に、隣の娘が立つてゐて、ぢつと自分を見送つて呉れた事を思出した。續いて、あの前の小屋で、終日長く機を織つて居ながら、時々美しい顏を窓から出して、自分の方を見るやうにして居た事を思出した。すると今日言つた嫂の言葉や、月の光を帶びた美しい姿などが、簇々と自分の小さい胸に集つて來て、もしや……と再び思つて、何うしてと急に打消して、何うしてそんな事があつてなるものか。自分にはもう既にあの……があるのではないか。それを遂ぐるなり、破るなり、どちらにしても好いから、打明けて話さうとまで決心して來たのではないか。それにこんな事を思ふとは……。

そんな事を思つてはならぬ身だ。

不意になつかしい初戀の人の姿が眼の前にちらついたと思ふと、自分の情は愈燃え出して、狂ひ出して、果は蚊帳の中に躊躇つて居るのに堪へられなくなつて、其儘庭下駄を突懸けて、戸外へ出た。

月……夜霧……蛙……

『あゝ詩だ、詩だ！』

と自分は絶叫する。

それから一時間程經つてから自分は眠つた。

三

翌朝黎明に眼を覺して、いつもの如く散歩に出た。自分はこの散歩がことに好きで、歸省中雨さへ降らなければ、いかな朝でも、屹度出懸けない事は無いので、竹の根の杖をついて裏門を出て、柳の樹の靡いてゐる下を通つて、素直な一本路をたどつて、遠く向うに見える一本松の下まで行つて、其處で二十分程松の根元に腰をかけて、いろ〳〵な事を思つて、戀しい人の家の方などを見て、そしてゆる〳〵と歸つて來るのが殆いつもの例になつてゐたので、今朝もいつもの如く、その一本松の方向を目的に、靜かに自分は歩いて行つた。昨宵とは反對に、今朝は自分の心は非常に落着いてゐて、何も彼も常より分明と心に印せられるやうに感じられた。

朝とは言へ、まだほんの夜の明けたといふばかりで、昨夜の霧、丘、澤、森などに蔽ひかゝつて、いつもよく見える富士の高嶺のあたりは、茫としてよくは見えない。少し人家を離れて素直な田圃道にかゝると、兩側には綠色の稻葉が曉の風にさも〳〵心地好ささうに戰いて、路の傍の草には、白銀のやうな美しい露が、觸れば滴る程置きあまつてゐた。

一町程行つて振返つて見ると、すぐ前に柳に圍まれた大な造酒店があつて、それから右と左に一直線に爲つて、船越の町は遠つてゐる。左は多くは茅葺屋根ばかりで、白壁の並んでゐる數も少いが、右は

遠く軒西、下汐のあたりまで、幾百軒ともなき人家が並んで、白壁の土藏の絕間〳〵には、高い半鐘臺が赤く、色附いた東の空に浮き出たやうになつて突立つてゐる。その向うに森のやうなものが、頭ばかりを一寸出してゐるが、それは對岸の船山の明神の森で、その人家と森との間を、かの洋洋たる坂東太郎が流れて居るのだ。

自分は猶行つた。

そして路の十字形を爲してゐる所に來て、又も後を振返つた。この二度の回顧はいつもの例で。

こゝで見ると船越の町に對する眺望は前よりも餘程廣くなつてゐて、明神の森も餘程大きく西丘も麓近くまで顯れ、右は軒西境の水門のあたりまでよく見える。曉ももう朝になつて向うの道傍の小さい茅葺屋根から出た朝炊の煙が、絲のやうに細く低く青い蓆田の上に靡いてゐる。西丘の下の寺でも頻りに經よむ聲やら、鐘の音やらが聞え出した。

一日の生活が今から始まるのである。

遠くから目ざした野中の一本松の下に來ると、自分はいつものやうに横にうねつてゐる根下に杖を立かけて腰を息めた。前には古い庚申塚があつて、見まい聞くまい語るまいが、さもさも千古の祕密を知つて居るやうに、しよんぼりとして立つてゐる。あゝ自分は今迄朝に夕に、幾度此處に來て、いろ〳〵な事を考へたか、幾度自分の戀人の事を思つて、うれしい樂しい夢を繰返したか。時には、思のまゝに

ならないのを密に泣いた事もあつた。

かう思つてゐた中に、東の赤い空は、いよ〳〵赤くなつて、遂に火の玉のやうな、それを見た丈でも、今日の一日の暑さが思ひ遣られるといふやうな朝日が、誰かその蔭に人でもゐて、ひよつと投り出したといふやうに、半鐘臺と白壁の土藏との間から、てら〳〵と上り始めた。其日影を先第一に受けるのは、直下にある小さな沼であるが、其沼の向うに、一寸こんもりとした森があつて、其間から鑵かに屋根を顯してゐる一軒の家――あゝそれが自分の戀人の住んでゐる處だ。

日は愈々登つた。人聲が野原の處々にきこえて來た。自分は立つて、四顧して、そして大沼の方へ猶四五町も行つて見ようと爲た。けれど、松の下で空想に耽つた時間があまり長かつたので、思ひの外に時が遲れて居るやうに思はれたから、今一度戀人のなつかしい家の屋根を見るとそのまゝ、元來た路を素直に自分の家に歸つて來た。

■

『何うしても賢母樣に話さう、そして賢母樣からこの苦しい心を、それとなく……に話して貰はう』かう堅く決心して、自分が裏門を姉樣道の方へ出て行つたのは、それから三時間ほど經つた後の事であつた。日は暑くなつて、路傍の草の露は、すつかり乾いて、蒸暑い風の通る處には、些の埃が立始めてゐた。役場の立札の前を通つて氣象臺と混名された俄分限者の大きな三階の構の傍を向うへ出ると、もう賢母樣の家はすぐ其處で、自分がその前に行つた時には、賢母樣はもう窓からやさしい顏を出して、莞爾として自分の姿を認めて居た。

『歸つてお出なすつたつてね……』

やさしい聲で、言葉を掛けられた時には、自分は嬉しくつて、母か何ぞのやうな心地が爲た。自分は今でも好く覺えてゐるが、あの賢母樣ほど人の好い莞爾した溫順な女らしい人はあまり多くはあるまい。何んぞといふと、直き首を傾ける癖があつて、裁縫の弟子が少し難い所を聞くと『さうね……』と言つて首を傾けて、仔細さうに彼方此方に裁縫を動して見て、それからこれはかうそれはかうと、やさしく丁寧に敎へてやる、幾度同じ事を聞いても、決して怒つたり罵つたりする事は無かつた。本當に賢母樣のやうには出來ないと、よく癇癪持の母がつく〴〵感心して言つて居たが、まことにその通りで、自分なども、あれでなければ人の娘の世話をする事は出來まいと思つた事は幾度もある。であるから、自分のやうな愛憎の念の深い、どちらかと言へば人の弱點を見出す事の早い性質でも、この賢母樣ばかりは、昔から非常に好きで、兄弟には隱して置く事でも、この賢母樣にはずん〳〵と話して了ふ。すると、賢母樣も親のやうな厚い心でいろ〳〵に心配して、種々に慰めて呉れるので、自分はいよ〳〵力に爲た。

『え、昨夜歸つて來て……』と言つた儘、自分は足を停めた。奥の座敷では、頻りに若い女の笑聲が聞

えゐ、あゝあの中に染ちやんが居ゐのだと自分はすぐ思つた。

『さうですつてね、今朝絹ちやんから聞きましたよ……でも大層早かつたのですね。妾はまた四五日經つてからと思つてゐましたのに……まあお上んなさい』

言はるゝ儘に、自分は奥座敷に連つてゐる四疊半の一室へと上つた。この室は殆自分の室と言つても好い位で、賢母様も自分の爲に揃へて呉れた一閑張の机や、座蒲團や、火鉢や、本箱や、何や彼やがこの春來た時の儘に手も附けられずに整然としてゐる。あゝ自分は幾度この靜かな室に坐つて、前の小さな庭のゐぞ菊の花などを見ながら、かの人の事を思つたか。女の笑聲の中にをり〳〵交るかの子の優しい聲を聞いて幾度胸を轟したか。ある時は、かの子の親しい友達と餘念なく物語るのを、此方から見て居た事もあつた。妹の紅い衣に霧を吹くのを見て非常に美しいと思つた事もあつた。それからある夏の日ドオデエの『ジャック』の話を爲て聞かせて、滿座の人をして、悲感に打たれしめた事もあつた。この机に凭りかゝつて、かの女のことを思つて、新詩を三つ程作つて、それを東京の文學のある雜誌に出して思はぬ喝采を博した事もあつた。

あゝこの一室！

奥からは話聲や笑聲がをり〳〵中庭の深綠の間を洩れて、さも樂しさうに聞えて來る。この朝以來落着いてゐた自分の心は、また座ゐに亂れ始める……賢母様は茶を點られて來て、貴物だがと斷つて、風

月堂のカステラを出して呉れた。自分は團扇を使ひながら、庭前の柱に凭懸つて、東京から思決めて來た事をどういふ風に言はうかと工夫して居た。

『東京はもう酷いでせうね』

と賢母様は又話し始めた。

『え』と自分は受けて、『もう戸外などは歩かれない程で……。昨日學校から田端まで來るにも、隨分堪らないほどでした』

『さうでせうね……此地でも、昨日は八十六度位まで寒暖計が上つたつて、染ちやんが言つて居ましたから』

この染ちやんがといふ言葉が、自分には何んなに嬉しかつたか知れぬ。

此時自分は何の氣なしにふと思付いた。この賢母様は、飽迄自分の事を思つて居て呉れるので自分が大學を卒業する迄は、あの染子を出來る丈よくその手の下に護つて居て呉れて、さて自分が一人前の身になつた曉に、公然と仲に立つて奔走して、首尾よく成就させてやらうと思つて居て呉れるので、從つて、今は、自分の身の定らない今は、可成堅くその間を堰いて、若い者の陷り易い不都合な行爲を爲せまいとしてゐるのであるといふ事に思付いた。すると、自分の胸は迷ひ始めて、賢母様の決心の道理であるといふ事やら、それ以上を望むのは、自分の我儘で、あまり人の恩を無にしたものであるといふ事

やら、けれど此儘ではあまりにつらい、せめて口位はきける間柄にして置いて貰はなくつては、外から何んな魔がさして來て、この美しい初戀を奪つて、めちや〳〵にされるやうな事もないとは限らないからといふ事やら、何やら彼やらが旋風のやうに廻轉して來て、果ては何だか更に確乎とした考か無くなつて了つた。

『それから生憎な事には、折角定雄さんが歸つて御出なすつたけれど』と、をば樣は更に新しい事を話し初めた。『生憎……私は明日から、半月程外に行つて來なくつてはならないので』

『外へつて、何處へ』と自分は少し驚いた。

『何に、遊び事ですけどね、あの杉原の伯母が鹽原へ湯治に行くから、一緒に行つて呉れろつて言ふんですが……妾は子供衆を預つては居るし、隨分忙しくない身體でもありませんから、始めは誰か外の人へつて斷つたのですけれど、誰も妾の外に行つて呉れる人も無いものですから……據なく』

『それは結構です……』と、自分は挨拶したが、しかも此時心の底に、言ふならば今である。今言はなければ、もう十五日間は言はれないのだと思つた。

『否え結構でもないんですけれど……世話になつた伯母なもんですから、嫌と言ひ切る譯にも行きませんでね……』

『さうですとも』

自分の心は亂れ切つてゐる。

ふと又思付いた。これはをば樣に賴む事ぢや無い。これらの深い心は、自分で指揮して、自分で處分しなけりやならない事だ。人手を借りないで、自分で機會を作つて、自分の口から先の口に直接に傳へなければならない事だ。

さうだ。

と自分は非常に好い考を得たやうに思つた。人は何と言はうが、何んなに惡く言はうが、もうそんな事に頓着して居る場合ではない。もう此處まで進んだ以上は破れるとも遂げるとも、自から突進して、この決着を見なければならない。さうだ、これは自分でやらう。この十五日の間に、をば樣が鹽原から歸つて來る迄に、自分で機會を作つて、この押へ切れぬ心を殘る處なく……に言つて了はう。

これで心がいくらか靜まつたと見えて、自分はをば樣と猶一時間程何彼と靜かに物語りする事が出來た。それでもう歸らうといふ時に、自分は一寸緣側に出て見た。

裁縫の弟子の中に、知つてゐる少女がいくらもあるので、自分の姿が其處に顯はれると、丁寧に辭儀をしたものが二三人あつた。けれど何うしたのか、……姿は見えない。

失望して、今日は何うして來ないのかと、餘程をば樣に聞いて見ようとした。けれど何だかあまり卒爾で恥しいやうな氣がしたから、思切つて其儘をば樣の家を出た。日は雲もない空に輝きわたつて、隱

もない田舍道の暑さは非常である。埃が立つても好いからせめて風でも少しあれば好いのにと思ひながら、稻葉の上にきら〳〵とする太陽の光線の眩しいのを避けて、自分はてく〳〵と歩いて來た。

蜻蛉のお廻りをしてゐる桑畑を通り越すと、不意に隣りの裏門から、あの總領娘が出て來たが、自分の姿を見て居ながら、しかも見ないやうな樣子を仕て、(自分は何故今日に限つてあんな風をするのか知らんと不思議に思つた。)低頭勝に自分の方へと近寄つて來た。

役場の柳の蔭で邂逅したから、

『何處へお出なさるの』

と自分は聲を掛けた。すると娘は慌てたやうな、心を見拔かれたといふやうな、恥しさうな赤い顏をして、『一寸』と言つた限りで、急いで向うに行つた。

何うしたんだらうと、自分は思つた。

逢はうと思つて、折角樂みにして行つたのに、生憎にも其人が來て居らなかつたので、自分は少なからず失望したが、時に由ると、午後から來る時などもあるから、今一度三時頃にをば樣の家に行つて見た。けれども見えないから、思切つて、

『染ちやんは?』

と聞くと、をば樣は振返つて『昨日一寸用事があつて、舟橋の伯母樣の處へ泊り懸けに行かなけりゃ

ならないからつて……それで今日は……』

をば樣は眞面目に答へた積りであつたかも知れぬ。けれど自分は何だかその聲の中に、笑つた處があつたやうに思はれたので、不思不知顏を赤くして、其儘ふいと出て了つた。今は暑い盛りで、野らにも街道にも、人の出てゐるものはない。只麵竿を持つてゐる子供等が、暑いのも知らないで、あちこちと、駈廻つて居るのが向うの畑に見えてゐるばかりである。自分は何となく不滿でいつそ家に歸つて、午睡でも仕ようかと思つた。けれどもそれも滿らないと思返して、それでは何處に行く……と續いて起つた疑問をも解かずに、只ふら〳〵と沼の方へ踵を進めた。日はぢり〳〵と頭の上から照つて、その暑さはまことに堪へられたものではなかつた。で、こんなに暑くつてはと、又立留つて、とても散歩は出來ないから、歸らう、思切つて歸らうと、二三歩後戻りしたが、急に、路の傍の蘆の繁つた、松林のある小高い丘を思出して、其處からは懷しい人の家も見えるといふ事を續いて思出して、自分は又其方へと此處は急いで歩いて行つた。

それは小さい沼の西側の一隅で、舟橋の方へ通ずる街道は、その松の丘の中央を横ぎつてゐて、其處から見ると、沼や、森や、人家を隔てゝ、利根の白帆の頭の尖が、ちら〳〵と面白く見える。こゝも自分のよく遊びに來る所で、秋の夕暮など、淋しい丘の上を縫ふやうに往たり來たりして、詩を吟じ試みた事もあつた。その時は秋風が野山に滿ちたつてゐて、夕日が淋しさうに沼の蘆の絕間に移つて、自分の

悲しい聲が遠く澄んだ大空に響き渡つたが……、それに引かへて今は天地の萬物この暑さに萎れ返つて、蘆の梢さへそよりとも仕ない程で、水に映る日影さへ何んとなく人に暑さを感じさせるやうに思はれる。少し行くと蘆の繁みが灣をなしてゐる處に、一本の曲りくねつた老松があつて、その下に笠を被つた一人の老翁が、默つて綸を垂れてゐる。少しは釣れると見えて、水中の魚籃にはぽちや〳〵と動く音が爲る。

『釣れますかね』

聲を懸けて見たが、この老翁餘程の頑固屋だと見えて、『うむ』と言つた切り、更に相手に仕ようとも仕ない。仕方が無いから、自分は丘の上にのぼつて、涼しさうな松陰を選んで、腰をかけたまゝ、ぢつとあたりを眺めて居た。あゝ自分は此時まで、夏の日中の面白味といふ事を知らなかつたのであつた。

あゝ萬物皆萎れ返つたこの日中の靜けさといつたら……。

それからいろ〳〵な、空想に耽つたり、あたりに咲いてゐる撫子や百合の花を採つたりしてゐたが、その間も隨分長かつたと見えて氣が附いて眼を擧げた時は、夕日がもう松の林にさし込んで自分の影や木の影が、もう餘程長くなつてゐた。風も少し出て、松の響が美妙な音樂でもあるかのやうに、自分の頭の上で微かに聞える。向うの村では、鷄のさも〳〵退屈さうに鳴く聲が聞える。あ、利根川の白帆の尖が、今一つちらりと見えた。

ふと後に人力車の音が聞える。けれど自分は前に見とれて、振返つて見ようとも爲なかつた。それと同時に、すぐ前の蘆の蔭で些かな物音がして、先刻の釣客が立上つたが、竿が弓のやうになつて、綸の末には四寸ばかりの魚が潑剌として躍つてゐるさまがよく見える。『釣れたな』と思つて延上らうとした後に、すぐ後に、もう人力車が輾つて來

深紫色の蝙蝠傘が日に光つて、誰だか知らぬが、美しい人が乘つてゐると思つたら、あゝそれは懷しい染子であつた。

『今歸つて來て？』と、我を忘れて聲を懸けようとして、心付いて、慌てゝ止した。少女は恥しさうに、自分の顏を見てやさしく辭儀を爲て行つた。

自分は非常に嬉しい。

見送つてゐると深紫の蝙蝠傘は、美しく日に光つて、右へ左へと曲りくねりして、蘆や松原や杉村の連つてゐる間を、てく〳〵と動いて行く。少し行つて、二三軒の家の垣根の蔭に隱れたが、やがて又一町程先の銀杏の大樹のある角の處に顯れて出て、それから長い低い坂を上つて、それから人家の蔭に見え隱れして、たうとう利根川の堤防の上に行つた時、蝙蝠傘は少し動いて、遠くだから好くは解らぬが、その白い顏が此方をぢつと見返つたやうであつた。

見えなくなつてから、十分程經つて、自分は沼の向ふの家——そこには夕日がまともに美しく照り渡

つてゐる――を見た。そしてもう今頃はあそこに歸つて、暑かつたらうなどゝ、家の人にちやほやされて居るであらうと思つた。

五

をば樣は翌朝早く發足つて行つて了つた。自分は留守を尋ねて見たが、留守番に頼まれた中年增と、親類の次男でをば樣の甥に當る十五ばかりの少年と只二人で、昨日迄賑はしかつた裁縫の弟子は、一人も來て居らなかつた。これは當り前で、師匠も居らぬのに、通つて來るものも無い譯だ。でも、自分はそれと知つて、何だか失望したやうな心地がした。

之で先づこの十五日間は、自分と染子との交通の便は、すつかり斷たれて了つたのである。であるのに、自分はこの十五日間に自分の心を人手を借りずに、直接に染子に傳へようと決心してゐるのである、それは無理な機會でも作つて、人の眼にかゝるのも厭はないといふのなら隨分思切つた事も出來ようけれど、自分は狂ふ事は狂つても、平生品格といふ事を人一倍重んじてゐる方の性質だから、そんな醜い不自然な事をして、この美しい初戀の空想を全然壞して了ふには忍びない處がある。從つてそれを打明ける事に就て、一方ならぬ困難を感じない譯には行かなかつた。けれど戀には天啓がある。これ程烈しく思つてる心が、彼方に通じてゐない譯は決して無いからと、自分は當にもならぬ事を當にして、

よくあちこちを散歩して、夜などはこそりと染子の門前に行つて、もしや出て來はしまいかなど、やくもない事を思つた事もあつた。もし出て來て、向ふでも自分の心をよく知つてゐて、泣いて互の心を打明けたら、その時の嬉しさは何んなであらう。其時は、自分は死んでも好いなどゝ烈しく思つた事もあつた。けれどそれは皆空想の空想で、自分はをば樣が行つてから、二日經つても、一度も、唯の一度も、その懷しい染子に逢ふ事が出來なかつた。

何故あの時打明けて、をば樣に話して了はなかつたらうと、自分は今更のやうに後悔した。あの時打明けて話しさへすれば、をば樣は屹度何とか言つて呉れたらうし、先方に傳へて呉れないまでも、自分の心を和めるやうにして呉れたであらうに……。

自分は隈なく後悔した。

で、仕方がないので、自分はこの長い十五日が經つて、をば樣が歸つて來るのを待つて、矢張その口から此の心を傳へて貰はうと決心した。

自分は幾度も經驗したが、人の心といふものは、料り難いもので、隨分豫想外の變化に富んでゐるものだ。つまりその場になつて見なけりや分らないので、豫言だとか想像だとかいふものは、いざとなると、多くは片側から外れて行つて了ふものである。否自分ながら、自分は何故こんなに薄情で、こんなに節操が無いだらうと疑ふやうな事は、一生の中に隨分幾度もある事だ。で、この無節操や、この無主

義が、遂に人間の眞相であるといふ事を悟らなけりやならないやうになるのは、如何にも情ないやうであるが、實際人間がさうであるから、どうも仕方が無いと言はなけりやならない。でも若い時には、まだ熱が燃えて居るから、頻りにこれに反抗して、多少不自然な事までも遣つて除けるが、年を取つて分別が出て來ると、それが當り前になつて、からもう意氣地がなくなつて仕舞ふ。

さて前の話に戻つて、自分は十五日待つ事に極めた。するとこれもその心の變化の一つであらうが、今まであれ程烈しく思つてゐた感情が、急に穩かに靜かになつて、十五日經つ迄は、いくら思つたつて仕方がないから、そんなに焦らずに、靜に讀書でも爲ようといふ心になつた。情ないのはあの心の起つた事だ。あの心の起つたばかりに、自分は惡魔につけ込まれたのである。前から隙があつたら〳〵とつけ覘つてゐた美しい惡魔に……。

前にも一寸言つた通り、自分は歸省中いつもよく隣の家に出入して、五目ならべから段々覺えた下手な碁を、三目四目も置いて貰つて、主人と打つのを殆毎日の例にしてゐた。主人は自分の負けるのを面白がつて、その罪のないやさしい顏に、滿面に笑をたゝへて、種々とその幽妙の手といふ事を敎へて呉れた。ほら好く見てお出なさい。此處をかうすると此處がかう明く、それを明けるやうにして、敵に油斷をさせて、いざといふ時に、これを閉ぐ……。何うです、却々旨い事を考へて居るでせうと言つて、あはゝとさも面白さうな笑ひ方を爲る。

本當に隣りの主人程無邪氣な好い人は多くはあるまい。

それは丁度をば樣が鹽原に行つた三日目の午後の事であつたらうか。自分はこの間から繙いてゐたツルゲネーフの『煙』を讀み了つて、今更のやうに感服して、イリナの性格や、リトエノフの運命などに、しみ〴〵と深い厚い同情を表した。ことに、リトエノフがバーデンバーデンを去らうとして、『煙、煙、萬事皆煙……』と絶叫するあたりの着想や、タチヤナが伯母と泣いて泊つてゐる同じ町を、リトエノフが其夜それと知らずに過ぎたといふあたりの文章などは最も深く心を動して、この國の大小說家が、それを書いた時の理想の高さを思ひやつた。

ふと見ると、表の靑い空には、鉋屑のやうな白い雲が、ふはふはとして飛んで行く。(自分は橫になつて讀書して居つたので)

人の運命といふものは、あの早く飛んで消えて行く雲のやうなものではあるまいかと、自分は考へた。あのリトエノフだとて、バーデンバーデンの樫の木に凭り掛つて、樂しい未來の望を繰返して居つた時には、決してあのやうな雲や、あのやうな嵐が眼の前に近づいて居ようとは思ひも懸けなかつたに相違ないのに……。

いろ〳〵な事を思つて居る間に、いつとなく眠氣がさして來た。午睡を爲るよりはと、自分は急に立ち上つて、それよりは隣へ行つて、下手な碁でも打つて來ようかと、その儘例の裏庭から案內も無しに

隣の主人の室に行つた。主人も今午睡から覺めたといふ處で、大きな欠伸をしながら、よく來て下すつた、退屈で仕方が無かつた處でしたと言ひ〳〵、直ぐに碁盤を自分の前に差向けた。

主人も碁には隨分眼が無い方である。

始めは自分が勝つて、それから負が四度ばかり續いて、最後の勝負といふ處で、又僥倖にも自分が勝つた。終と始とが負けでは、何だかあまり緣起が悪いから、今一度立合つて頂かうではありませんかと、主人は達つて勸めたけれど、今度私が負けると猶歸れなくなるからつて、自分は却々言ふ事を聽かなかつた。

處へ、妻君が大きな美しい桃を盆に載せて、茶を煎れて來たが、

『今日は定雄さんが勝つたんですか』

と笑ひながら言つた。

『いや私がすつかり勝つたんぢやありませんが、後と先を私が勝つたから、先今日は私の勝ですな』

『何に、定雄樣か六度の中で二度しか勝たないのさ』と言つて、主人はあはゝと心地好ささうに笑つた。

『まあ、どちらでも好う御座んすから、澤山勝つた方に、澤山褒美を上げませう』と、妻君は元氣よく桃を載せた盆を前に出して、そして色の好い茶を、自分の茶碗に注いで呉れた。自分は聰領娘が二三

日前から加減が悪いといふ事を聞いて居たから、

『お秀さんが加減が悪いつて、……何んな御樣子です』

かと聞いた。すると妻君はふと顏を上げて、『何に大した事は有りませんのですけれど、本當にあれにも困つて仕舞ひますよ。何ぞといふと、直に氣ばかり腐らせて了つて、くよ〳〵ばかりしてゐるのですもの……今の若さに、そんなでは仕方が無いと、いつも申すんですけれど』

『それでも、お寐つてゐるのではありますまい』

『え、今其處で弟と何かして遊んで居りました』

妻君は次に下りて行つて了つた。自分は主人と遊獵の話やら、鐵道の話やらを、いろ〳〵と語り合つたが、やがて夕日が窓からさし込んで、涼しい風がそよ〳〵と前の矢篦竹に立ち始めたのに驚いて、その儘に暇を告げた。が病氣だといふのに、娘に逢はないで行くのも、何だか酷いと思つたから、歸り際に一寸茶の間を覗いて見ると、緣側の處で、弟と遊んでゐた娘が、目敏く見付けて、

『おや』

と言つた。

『おやお入んなさい』と、續いて頭を上げた妻君も、喜ばしげに自分を迎へた。自分は兎も角その裁縫の前に坐つたが、極めて氣輕に、『病氣ですつてね』

『え、ちつと』

『何んな風なんです』

『どんな風つて』と、娘は低い聲で言つたが、少し乘氣になつて、

『さうね、何つて言つたら好いでせうね、お母さん』

と仇度氣ない聲をする。

『自分の病氣を人に聞くものがありますか』

『でも私にも解らないんだもの』

少し青白いやつれた顏に、島田の鬢の毛のもつれかゝつた樣は、いつもになく美しいと自分は思つた。

『そんなにして起きて居ては、惡いんぢやないんですか』

『何に……好いのよ』

と仇度氣ない眼色をして、ぢつと自分を見て、そして悲しさうに低頭いた。自分は今迄その娘がこんな美しい眼色を仕たのを見た事は無かつた。

『この間の小說は何うでした?』

『面白う御座いましたよ……だけど、何だか自分の事を書かれたやうな心持がして、總には悲しくな

つて』

『何うして?』

『何うしても……何だかあの娘が』

ふと思出したやうに言葉を替へて、

『貴郎は毎朝散步を爲さいますのね』

『え……』

『あの時分步くと、嘸心持が好いでせうね』

『え、隨分』

『私も……』と言つて、止して、又言出して、『私も行つて見たいものね、阿母さん』

『行つて御覽な、朝早く戶外を步くと、氣分も好くなるかも知れないから』

『ぢや妾も行かう。定雄さん、貴郎連れて行つて下すつて』

思の外眞面目な聲であつた。

『え……』

阿母樣さへ承知したものだから、自分も仕方が無しに、かう答へたのである。それから暫く話して、もう遲くなつたからとて、別を告げると、娘は緣側まで態々送つて來て、低い聲で、

『それぢや明朝行きますから、屹度連れて行つて下さいよ』

かう言はれた時は、その聲が笑聲であつたにも拘らず、自分は少し變な心地がした。けれどそれは全く戯談であると思つたから、別段深く心にも留めなかつた。で、其夜寢に就く頃にはもう自分はすつかりその約束を忘れて居た。

六

翌朝眼が覺めて散歩に出たのは、いつもの通り黎明の頃で。空氣が冷かで、空が澄み渡つて、庭の新綠が心地よい朝風に吹靡かされて、ざわ〳〵と面白さうな音を立てゝ居た。花園の前に來ると、ふと自分の足許に、今咲いたばかりの眞赤な美しい撫子の花が、朝露に濕つて生々としてゐる。何んなに心持が好いのであらうと思つて、自分は不思不知その花の前に立留つた。あたりは森として、靜り返つて、しかも天地が何物をか待つてゐるやうな氣味合があつて、丁度夢が覺め際に近づいてゐると言つたやうな工合だ。

自分は恍惚として、何も彼も忘れて了つて、唯々此天地と一つになつたやうな心地が仕た。で自分は庭樹の朝露の滴つてゐる間を、彼方此方へ歩いて、小さな柴折戸の前に來て、鍔を外してだら〳〵坂を少し下りかけようとした。そしてそれとなしに向うを見ると、朝霧が一面に低地に蔽ひかゝつて、いつも目的にして行く野中の一本松の姿も、よくは見えない程であつた。しかもその白い茫とした霧の中には、もう黎明の光がたえ〴〵ながら交つてゐた。

あゝ本當に夢のやうだと思つて、それから二三歩下つて、ふと又右の方を振返ると、其處には薄く白けた月が、絶々に殘つてゐて、その微かな光は、隣の柴折戸をさも〳〵淋し氣に照してゐる。自分は靜にだら〳〵と下りて、茶畑の傍を通つて、茅葺屋根の二三軒の間の細い小路を、急いで向うの姉樣道へと出た。そして、何氣なしに隣の裏門の方を振返つて見たが、自分ははつとして驚いた。——其處には、娘が自分を待つて立つて居る！

自分は何う仕ようかと思つた。餘程このまゝ散歩を止めて歸らうかと思つた。この黎明に、この人も居ない黎明に、娘と二人連立つて野原を散歩するといふのは！

けれど、自分は此處に正直に其時の感を言はなけりやならない。何ういふ心の働かは知らぬが、自分は少くとも、此時何處となく嬉しいといふやうな心持は爲ない事は無かつたので、自分はこの人と散歩をしてはならないと、十分心の中で知つて居りながら、それでも此儘散歩をやめて、家に歸るといふやうな無情な素振を爲るには忍びなかつたので。ことに、娘は自分と幼稚い頃からの仲好であつて、自分は東京から歸つて來る度に、いつも西洋の小説の話などを聞かせる程の心の隔てない間柄であつたから、自分は何うしてもそんな無情な行爲を敢てする事が出來なかつた。で、自分で心を押へて、何もそんな

事は有りは爲ない。第一自分からして其樣な事を思ふから不好ないのだ。氣分が惡いから、散步に連れて行つて吳れろといふのを、先の母も承知して、連れて行つてやるのに、何の不思議があるものか、假令人の眼に留つて何と評判されようと、自分さへ心に怪しい處が無ければ、少しも關つた事ではないのだと、それでも男らしく確乎と心を定めて其儘娘の方を一寸見て少し頭を下げて點頭いて見せた。

娘は嬉しさうに、自分の傍に寄つたが、猶二三步步いて、

『先つきから待つて居りましたのよ』と、やさしい聲で絕々に言つた。

自分は見るともなく、娘の姿を一寸見た。涼しさうな白地の單衣を着て、繻子の帶を一寸意氣な風に結んで、下駄は赤い鼻緒をすげた黑塗木履を穿いてゐた。島田の髮はもう壞れかゝつて、今朝梳つた跡があるにも拘らず、後れ毛が三四本白い美しい頰を撫でゝ居た。

朝露がしとゞに置いてある草を踏み分けながら、やがて自分等は路の二つに分れる處に來た。

『何方に行きませう?』

かう言ひ懸けた自分の聲は、存外に高い鋭い聲であつた。

『何方へでも……貴郎のお好きな方へ』

『では此方に行きませう』

と、同じ素氣ない聲で言つて、自分はぐん〳〵といつも行く野原の方へと行つた。霧は少し晴れて、

向うの一本松は、少しその梢を顯し始めた。

七

『今年は休暇中、何處へも御出なさらないのでせう』

『え』

と自分は何か考へて居て、うはの空の返事を仕た。

『何處にお出なさるの』

『否え、今年は何處へも行かない積りです』

『休暇は幾日まで』

『さう』と自分はまだ何か考へて居たが、ふと氣が附いて、

『さう……さうですね、九月の十日迄ですから、まだ一月餘もあります』

『學校はお忙しいでせう』

『え隨分……』

ねつから話が榮えない。自分はまだ何か考へて居るから、返答をするのも極受身であつた。で話が少し途切れて、二人は草の露の田圃道を、成丈足の濡れないやうに、彼方へ此方へと辿つて步いた。風が

少し立ち始めたので、霧がその向うの一本松に懸つては晴れ、かゝつては晴れする樣がまことに面白い。

『あれを御覽なさいよ……まるで畫のやうです事』

かう言つて、娘は自分の顏を見た。けれど自分は返事も爲なかつた。でも懲りずに、前よりも一層快活な、うれしさうな、自分をも會話の中に引入れずには置かないといふやうな氣輕な聲で、

『そら貴郎、覺えていらつしやるでせう。貴郎が昨年の夏來た時、私に話して聞かせて下すつた小說の話を、丁度あのやうですね、あの松の工合が』

と言つて、又自分の顏を見て、

『あの松の下のやうな處で、二人は別れたんですね。そして、朝も今朝のやうな霧のある夏の朝ですね』

『〇〇に出た小說の話ですか』

と自分は少し釣込まれた。

『え、あの……』

と嬉しさうに言つて、少しぢつと考へるやうな態度を仕て、

『何んなに悲しかつたでせうね』

自分は返答を爲なかつた。

折角繕はうとした話が途切れて、二人は默つて並んで歩いて行つた。前にも言つた通り、自分とこの娘とは、少しも心の置けない仲の善い幼稚朋友で、顏さへ見れば、何とか彼とか、いろ〳〵な事を話し出して、種が盡きるといふ事は決して是迄無かつたのに。今朝は何うしたのか、話し懸けては惡いやうな、嚴格に爲てゐなければならない樣な氣がして、自然と口を閉づる譯になつて了つた。で、自分はいつものやうに、振返つて船越の全景を見ようでもなく、立止つて新鮮な空氣を呼吸しようでもなく、只低頭き勝に、默つて並んで歩いて行つた。がその一本松まではさして遠くもないから、間もなく行着いて、自分は例の通りに、その松の根許に腰をかけた。今朝はいつもより早くて、船越の町はまだ半睡眠の中に沈んでゐる。霧はもう大方晴れて、今迄見えなかつた大沼對岸の長い丘が、うね〳〵と蛇の走るやうに顯れて見える。

『お〻好い心地ですこと』

と、娘は頰に散りかゝつた後毛を煩さゝうに搔上げて、

『いつでも此處までお出なさるの』

『え……』と言つたが、あまり返事ばかり仕てゐるのも惡いから、『早い時は今少し先きまで行きますけれど』

『何處あたりまで』

『沼の少し手前まで』

『さう、そんな遠く』

と、仇度氣ない口付で言つて、それとなく四邊の景色を見廻して、

『妾は散歩つて、こんな好い心持のものだとは些とも知りませんでしたよ、何だかもう今朝一度ばかりでも、氣分が大變に好くなつたやうな心持が仕ますわ』

自分は默つて居た。

『だから……』とそれでも少し躊躇つて、電光のやうに、ちらと自分を見て、『だから、定雄さん明朝も又伴れて來て下さいな』

『え』

『本當にですよ』

自分は又默つてゐた。

『定雄さん、今朝は氣分でも惡いの』と、暫くして娘は突如に尋ねた。

『何故』

『でも、先つきから妾が種々な事を言つても、碌に返事も爲さらないぢやありませんか』

自分ははつとした。

『何にさういふ譯では無いけれど』

『なら好う御座んすけれど、あまり默つてお出なさるから、妾は何うか爲すつたかと思つて』

『何に』

自分は種々な事を考へて、ぢつとして四邊を見てゐた。東の空が次第に紅くなつて、船越の町は段々その睡眠から覺めるやうな樣子であつた。娘も二三歩離れて向うむきになつて、同じくぢつとして立つて居たが、何事をか考へ始めたと見えて、今はもう自分に言葉を懸けようとも仕ない。此時自分の胸に、昨日讀んだリトエノフの事がふと浮んだ。そして運命といふ事がむら〳〵と思出された。あゝ運命！　運命程悲しい物が、さう爲りたくないと思ひながら、次第にさうなつて行く運命ほど、悲しい情ないものが又と二つ此世に有らうか。

高い半鐘臺の右の空の色が非常に紅くなつたと思ふと、やがて日がきら〳〵と顯れ出て、いつものやうに、直ぐ下の沼の半面が俄に金色の波を湧かした。するとその右の森の中に屋根を顯してゐる戀しい人の家が直ぐ眼に附く。あゝあそこに……と思つて、そして自分の傍に、娘が立つてゐるのを見て、何となく悲しいやうな心持になつた。しかもその心持が、只の悲しいのとは違つて、何となく深い意味に打たれたやうな處が有つて、それとはなしに涙ぐまれる。

自分は何故今迄この娘をあのやうに情なく取扱つたらう。何故あのやうに碌々返事も仕なかつたら

う。何事も皆運命であるのに。自分はぢつと其娘の後姿を見た。

すると其心が先の心に通じでも爲たかのやうに、娘はふと振返つた。で二人の眼は、思はず知らず宙に逢つた。はつと思つて自分は直ぐ低頭いて了つたが、しかも一目見た娘の眼は何だか涙が潜んでゐたやうに思はれた。

『最少し先へ行つて見ませうか』

この自分の聲は、前に引かへて、非常に優しかつたに相違ない。

『え』

娘の聲は却つて低い。

又連れ立つて、歩き初めた。けれど娘は何うしたのか、俄に元氣が無くなつて了つて、今迄絶えず、話を仕掛けたとは反對に、今度は默つて自分の後を後をと跟いて來るやうにしてゐる。自分は愈變な心地に爲つたから、何とか言つて、慰めて遣らうと思つたが、流石にそれを爲る程の勇氣も出なかつた。で、二人は默つて田圃道を船下の方へと一歩〳〵進んで行つた。朝日が登つてから、野の景色は丸で變つて、霧は晴れる、空氣は光る、水車の輾る音、寺の鐘の鳴る響、次第にあたりが騷しくなつた。

土とも板とも分らない橋を向うに渡ると、こんもりとした森が前に現はれて、鎭守の社の赤い華表が、深綠の中から絶々に朝日に光つてゐるのが見える。『あそこに上ると』と、自分は右の丘を指して、

『そこからは沼が見えるから登つて見ようぢやありませんか』といふと、娘は『え……』と唯微かに點頭いて見せた。で、自分は犬小屋のやうな農家の傍の細い小路を入つて、松や杉が暗い程生茂つてゐる切通のやうな處を通つて、少し息切のする坂を上ると、左の一面が芝草の美しく叢生してゐる高地で、その處々には櫻の古樹が疎に點綴されてゐて、花の時は瓢箪を提げて行く人もあらうといふ、東京で言へば、まあ飛鳥山と言つたやうな處だ。

朝日を受けた大沼の半面は宛で鏡のやうに光つてゐる。

『まあ美しい……』

と娘は不思不知聲を立てた。で、渡舟の旭に向つて金色の波上を漕いで來る樣や、富士が晴れやかに長い丘の上に顯れてゐる樣などを、餘念なく見てゐたが、やがて思出したやうに、自分の方を向いて、

『それにしても……私の此處に來たのは、本當に久し振で……そら貴郎も覺えてゐるでせう、學校に運動會が有つた時――あの時ッきり、妾ァ此處に來た事は無いのですよ』

『あの時ッきり?』

『え』

『それぢやもう餘程前ですね』

『さうもう七八年』

自分は好く思出す事が出來る。その時はこの娘は十三位で、紅い美しい振袖を着て、帶を矢の字とやらに結んで、女の群の中でも、あの位美しいのは無いと思つた。そして競走か何かに自分が勝つた時、自分はこの勇しい勝利を、あの隣の孃は、何處で何んな風をして見てゐるであらうと、あちこちを見廻した事があつた。それが今はこんなに大人くなつて自分と一緒に歩いてゐるかと思ふと何だか人生が不思議で、悠久といふ感がそれとなく自分の胸に上つて來る。

『まだあの頃は姿も少さくつて……』

『さうでしたね』

『あの頃の心持で始終居ると好いんですけれど』

と娘も感に撲たれたやうである。

本當に戀しいのは昔だと思ひながら、自分も其儘默つてぢつとして立つてゐた。鳩が一羽不意に直ぐ下の松林からばた〳〵と飛出したが、その烈しい羽音程には飛び得ずに、又直ぐその下の鎭守の森の蔭へと落ちた。

それから三十分程經つた後には、自分は朝日の光を正面に受けた、とある老松の下の二筋道の處へ來て、今しも娘と別れようとしてゐた。

『散歩したので氣分が大變好くなつた樣で』

娘は嬉々〳〵してゐる。

『それは好う御座んした』

『では明日も……』

『え』

これで別れた。娘は田圃道を酒店の蔭から、その家の裏門へと歸つて行く樣子であつた。自分は通りに出て、猶そこらを少し歩いて、それから十五分ばかり經つてから家に歸つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其日の空想は非常なもので、自分は色々と娘の心といふ事を考へて見た。何も、あれは別に意味があるのではなくつて、只本當に氣分の惡いのを治さう爲めであらうか。それとも又外に何かゞあるのであらうか。自分は自分でこの二つの問題を出して、幾度となくいろ〳〵に推試みて見た。けれど何方にも何方もの理由があるので、果ては自分も少からず迷つて仕舞ふ。で遂には癇癪を出して、何だ、つまらない、こんな事をくよ〳〵思ふのは、既に自分が間違つてゐるのだ。自分はもう前から染ちやんといふ戀人がある身だ。それであるのに、今更外から誰が愛しようと、誰に愛されようとそんな事は何も關つた事ではない。ことに、何もそんな心持が分明と見えて居る譯でもなく、只その母に賴れて、その娘を散歩に連れて行つたといふばかりではないか。それが……それが、何の不思議であるのだ、何の怪しい事

であるのだ。どうも一體自分がよくない。染子といふ戀人がある身で、今更そんな事を思ふ自分が好くない。已にそんな事を思ふ位なら、何故自分は承知して、散歩になど連れて行つたのだ。

母まで承諾して、何一つ疚しい事のない散歩をさへ、こんな心で判斷するのは、馬鹿な、自分はあの娘に戀してゐるんぢやないか。馬鹿な、そんな事が出來るか。

と自分で自分を罵る。

で、一時は心が靜まる。けれど十分も經つと、もうそれが氣になり始めて、何うも自分は惡魔の恐ろしい誘惑の前に立つてゐるやうな心地が爲て、一日もかうぢつとしては居られないやうに思はれる。別れる時、明日もと言つた。その明日の散歩に、もし打明けられたら、打伏になつて泣かれたら何うしよう。そんな事はと言つて謝絕る事が出來ようか。出來ない。自分はもう戀人があるからつて打明けて言へようか。猶出來ない。では言ふ儘になつて、其心を聞いて遣らうか。猶々々々出來ない。

あゝ何うしたら好いのだらう。をば樣！　をば樣さへ居りや、決してこんな事にはならなかつたのに。あの時にさへ一言打明けて話したら、こんな思を仕なかつたらうに。

そんな事が有るものか！

と强い方の半面の自分は又忽ちそれを打消して仕舞ふ。かういふ鹽梅に、兩面の自分が烈しく心の中で戰ひ合つてゐる中に、其一日は早くも過ぎた。

夕暮に、それでも隣に行つて見ると、娘は何處に行つたか、姿は見えなかつたが、妻君がいつもより莞爾と自分を迎へて、

『お蔭で、今日は大變に氣持が好いつて、さう申して喜んで居りました』

『それは結構でした』

『二三日連れて行つて頂いて好い空氣でも吸つたら、屹度すつかり治つて了ひませう。本當にあれのは氣から出るのですから』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『何か話して下さいな』

と言つて娘は莞爾として自分の方を見た。これは翌朝の散歩の時で、自分はその朝も娘を連れて、あまり同じ方に行くのも面白くないからといふ娘の言葉に從つて、さびしい寺の傍を通つて今少し前、西丘の松原の中に來たのであつた。今朝はよく晴れて、利根の川が遠くまで分明と見えて、對岸の堤防の上を歩いて行く人の影までも、殘る處なく數へる事が出來る程だ。頭上では松がさも〳〵心地よさゝうに、美妙の音樂を奏でゝ居る。

自分は氣が澄んで、何となく詩中の人物となつたやうな心地がして、娘の今言つた言葉が、耳に入つて居りながら、しかもそれに答へようとも爲ないで、ぢつとこの一場の取合せの好いのに見惚れてゐ

た。夏の曉、松原、利根川、少女、涼しさうな單衣、結ひ直した島田――そつくり畫だ。

『え、定雄さん、何故默つてお在なさるの。話を爲て下さいといふのに』

娘は浮立つてゐる。

『あんまり畫のやうだから、遂うつかりして……』

『さう』

と仇氣なく言つて、『本當にさうですね、本當に畫のやうですね。行雄樣(自分の弟)がお在なさると、畫いて頂くんですけれど……』と少し途切れて、『それであの行雄樣は何時歸つてお在なさるの』

『明後日あたりでせう』

『歸つてお在なさると、又賑かになりますね』

自分の弟は四邊に聞えた元氣者である。

『え』と自分は答へて、『それに、從兄が來るつて言つてましたから、又家が喧しくなるでせう。あれが一番閉口ですけれど、どうも仕方がない』

『では宅の離座敷に來てお在なさいな。彼處は靜かですから』

かう言つたが何だか餘り言ひ過ぎたといふ風で、娘はさつと顏を赧くした。

『否え、それ程でも無いんです』と、自分は何の氣なしに言ふと、

『否え、父も母も前から言つて居るんですよ。定雄樣は人が大勢來ると、煩くつてお困りなさるだらうから、家の離座敷にお出なされや好いつて』

『あそこは靜かで好いですね』

『お出なさいな』

『え……又』

『え……又なんて、あんな事を言つて、本當にお出なさいよ。人が大勢來て喧しくなつた時には』

『え』

暫く默つて居た。松はざわ〳〵と、冬の初の時雨のやうな音を立てゝ居る。

『あれ向うに……』と、娘は不意に對岸を指して、『早乙女塚が小さくなつて見えて居るのが見えますが』

『まさか、早乙女塚が』

『否え、本當に、あそこに小さく黑くなつて立つて居るぢやありませんか』

『何處に』

『そら……そこに、森があるでせう。その森から少し右の方に、一寸した百姓家が有るでせう』

『あの烟の出てゐる?』

『え、左樣……その烟の、そら消えて無くならうとする所に、小く、黑く』

『あ、あれが』

『あれが早乙女塚ですよ』

『さうなるか知ら』と自分は立上つて、『さう、彼處に押船の桃林があるから、さう……成程さうだ。成程あれが早乙女塚だ』

『左樣でせう』

と娘は得意さうに振返つた。

『大變に貴孃の眼は好い』

娘は笑つてゐる。暫く經つて、

『いつかそら貴郎に、あの早乙女塚の話を伺つた事が有りましたつけね。美しい娘の子があつて好い聲で田植唄を唄ひながら、せつせと苗を植ゑてると武士が通り懸つて、何とか彼とか言つたので、こつちも調戯ふ積りで、投げてやつた苗が、運惡く袴に當つて、すぐ其場で殺されたといふ話を』

『それはもう餘程前の事でせう』

『え、妾が丁度十二位で、あの裏の垣根に凭かゝつて日向ぼつこりを仕て居ると、丁度貴郎が通りかゝつて、私が編んで居た毛糸を奥れろつて、さうすると好い面白い話をして聞かせるからつて』

『よく覺えて居ますね』

『ほゝ』

と、娘は嬉しさうに笑つた。あゝ本當に美しいやさしい娘だと自分は此時つくゞゝと思つた。始終往來して、顏を毎日のやうに見て居るからこそ、遂戀しい懷しいなどとは思はなかつたが、これが平生離れて居るものであつたら……

『大きくなつてからも』と、娘は平氣で、『私ァ幾度もあの話を考へた事が有りましたよ。そして結約が有つたつていふから、それを色々と考へて、娘の心は何んなであつたかと、悲しくなる事がありますの』

『本當に昔の武士は酷い事を爲たもんだ』

『本當にね』

何とも知れぬ感にうたれて、二人は向うを見た儘、ぢつとしてだまつて居た。すると、不意に後の方でがさゞゝと小笹の動く音が仕たから、何かと思つて、それとなしに振返つて見ると、松原の向うの路を、自分の平生最も嫌つてゐる厭な奴が、のそゞゝと此方へ此方へと歩いて來た。それは氣象臺と綽名されて、町の人々から擯斥されてゐる、俄分限者の長男で、學問の出來ない放蕩する事ばかり上手な二十六位の青年である。

それを見ると、自分は非常に厭な心持がして、其儘ふいと立上つた。其男は一歩〳〵自分等の方に近寄つて來たが、見て居ながらしかも見ないと言ふやうな厭な風體をして、鷹揚に自分等の前を通り拔けた。

娘も氣が附いて、驚いて立上つた。

自分は言ふに言はれない不快な心地で、その儘男の行方を見て居た。男は笹や萱の茂つてゐる細い路を、ずん〳〵と歩いて行つたが、やがて松原の果ての廣い街道に出ると、ふと立留つて横目で、自分等をちらと見た。その横目が、……その見ないやうにして見てゐる横目が非常に自分の癪に觸つて、不快で、殘念で、腹立しくつて、何うにも彼うにも堪らない程であつた。で、思はず知らず、ぐつと其男の方を睨み付ける……すると、男は極り惡るさうに眼を外して二三歩歩き出して、そして又自分の方を見て、さて持つてゐる竹の杖で、烈しく大地を打つたかと思ふと、悠々とその街道を向うに去つた。

『馬鹿野郎』

と、自分は思はず口に出して言つた。

『本當に、あの人ほど好かない厭な人はありやしない』と、娘も口を合せた。

で、自分等は又歩き出したが、その厭な男に見られたといふ事が、絶えず互の心を曇らせて、もう以前のやうに氣の乘つた話を爲る事は出來なくなつた。それから茶畑の周圍や、寺の近傍などを暫少し歩

いたが、『もう歸らうぢやありませんか』と、自分は言出した。

『え』

娘は承知したが、しかも其聲は低かつた。坂を下りようとすると、朝日はもういつか一間程登つて、對岸の天地の渡から、此方の西の半鐘臺の下あたりまで、利根川は一面に美しい金色の波を湧して居た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

あゝ自分は何うしたら好いんだらう。何うしたらこの恐しい誘惑から免れる事が出來るのだらう。かう烈しく心中に叫んで、自分は讀みかけた小說を伏せて了つた。

外に手段が有るものか。思切つて散歩に行かないやうにするより外に、何の手段があるものか。

さうだ思切つて行くまい。翌日の朝は、つい寐過したやうにして、行かずにゐてやらう。否それでは餘りに心が咎めるから、夜遲く迄起きてゐて、翌朝目が覺めないやうに仕てやらう、さうだ、それが一番の上策だ。でなくつてさへ、今日は已にあんな厭な奴に見られて、何んな事を言つて吹聽されて居るか知れやしないのだから、今二三日も一緒に歩いたら、もう出たくても出られないやうな、深い深い陷阱の中に陷られて仕舞ふに極つてゐる。さうだ、さう仕よう、今夜遲く迄起きてゐて、寐過して散歩に行かないやうに仕よう、それが一番の上策だ。

それには一方に染子の事を盛に思出して、交通の便が有るにも無いにも拘らず、無理にでも好いから機會を作つて、この心を打明けるやうに爲なければならないと決心して、その午後の日影の暑いにも拘らずに、自分は染子の家の前を三度ばかり往復して見た。けれど不幸にもその繼しい人の衣の裾さへ見る事が出來なかつた。

で、其夜は遲くまで兄と碁を打つて、それから皆なが寐靜つて了つてからも、自分は自分の室で頻りに小說に讀み耽つて、十二時が鳴つて、眼が付きさうになつても、自分はまだ寐ようとも爲なかつた。そしてもうこの位まで爲れば、翌朝に爲つて、眼が覺めるやうな氣遣はないと信じ得るやうに成つてから、自分は枕を就けてぐつすり寐込んだ。

恐ろしい夢か何か見て、はつとして眼が覺めると、(自分は眼が覺めてから、床の中でもぢもぢして居る事が出來ない癖がある。)其儘自分は急いで跳起きて戸を明けた。もう日がかん〳〵と照つて居るだらうと思つたら、不運であつた。まだ夜が明けたばかりで、本屋では起きたやうな樣子も見えない。

行かうか、行くまいかと、直ぐその問題が胸を衝いて來る。けれど寐過しも仕ないのに、寐過したと僞るのは、何うしても忍びない心地が爲るので、それと共に、かう早く眼が覺めたのは、自分の不運だ。もうかう成つては、仕方が無いといふやうな心地も爲たので、その儘衣服を着改へて、男らしく戸外へ出て、深綠の露の滴る間をいつもの處まで行くと、

娘はもう待つて居る！

＊　＊　＊　＊　＊　＊

『妾の妹のお墓は彼處ですよ』

と言つて、松の樹の下の、少暗い、要垣で取圍んだ、一つの小さい墓を指した。此處は船越の共同墓地で、夢井野街道から四五步左に入つた處で、松や、杉や、樫などが一面に生茂つて、墓丈に何となく隱深の氣があたりに滿ちわたつて居る。

『妾の妹を貴郎御存じでせう』

『知つて居ますとも』

『あれが生きて居て呉れると、妾はどんなに嬉しいか知れなかつたんです』

『本當に左樣ですね、それにしても、もう餘程になりますね』

『今年居れば、十六ですつて……この間も母と話が出て、あれが生きて居て呉れゝばつて、さう申して泣きましたの……そして死んだ時が、十歲でしたが……妾は本當にあの時ほど悲しいと思つた事は有りませんでしたから』

やがて其墓の前に來て、自分等は立留つた。墓は三坪ばかりの地で、右の隅にはその死んだ妹が山から芽生を取つて來たのだといふ椿の樹が、無常などゝいふ事は知らぬ顏に、鬱蒼と勢よく生茂つてゐ

て、その少し手前には、樒の小さい樹が、朝露を帶びて、生々として光つてゐる、中央に先祖累代の墓小島家と記した大きな墓石があつて、其左に小島縫子の墓といふ小さい墓石がさも淋しさうに、憐れ氣に立つてゐる。久しく詣でぬと見えて、ぺん〳〵草などが、一面に蔓つてゐる。

このやさしい姉は、妹の墓の前で、久しい間手を合せて、ぢつと祈念を凝してゐた。思ふにその優しい胸の中には、今十歳ばかりの可愛らしい娘の子の姿が、あり〳〵と顯れて居るのであらう。そして一緒に戯れて遊んだ時の事や、母様に叱られて、泣いてその膝に抱かれた時の事などが簇々と思出されて、殆ど悲しさに堪へられぬのであらうと思ひながら、自分はぢつと蹲踞つたそのやさしい美しい姿を見詰めて居た。

立上つて、自分と眼を見合せた時は……その眼に一杯に涙が……

『私や思ふと悲しくつて』

と言つて、堪らなくなつたと言ふやうに、右の袖で其儘顏を掩つて仕舞つた。

自分は非常に撲れた。

こんな優しい姉があらうか。七年も前に死んだ小い妹の事を思出して、こんなに烈しく泣くやうなやさしい姉が、この利に走り慾に赴く今の世の中に又とあらうか。

自分は歩つて立つてゐた。

暫くして、娘は漸く涙を收めて、『本當にあの時のことを思ふと、妾は悲しくつて……姉様もう私や死ぬんだから、人形も何も皆な姉様に上げるからつてさう言ふんですもの……私はあの時は本當に何うしたら好いかと思ひましたよ』

『本當に……』

とは言つたが、自分は慰める言葉を知らない。

『定雄様も、一昨年父様や母様を一度に亡くした時には、何んなに悲しかつたでせうね』

『え、あの時は』

二人は又歩き始めた。

『定雄様の家のお墓も直きこの近くにあるんでせう?』

『え、この直ぐ下の處に』

『では行つてお詣しませうぢや有りませんか』

『え』

と言つたが、思返して、

『でも今日は廢しませう。何だか變な心地ですから……行くと、私が此度は泣かなくつちやならないから』

『あんな事を』

娘は莞爾した。

『でも本當に私は、あの時はお氣の毒で……何うか爲さりや仕ないかと思つて、大變に心配しましたのよ。定雄さんだつて少しお身體も惡いと聞いてゐたのに、俄かに父樣までお歿なすつたのですもの、そしてあの頃は貴郎の御顏色が惡くつて、元氣が無くつて、始終悲しい事ばかり言つていらしつたから』

『さうでしたね、あの頃は』

かう言ひながら自分はふと染子をしみ〴〵戀しいと思ひ始めたのは、あの頃であつたと思つた。

『それであの秋の末頃でしたね。洪水が出て船山が切れるか船越が切れるかと言つて大騷ぎをした年でしたね』と娘は愈乘氣になつて話しかけた。『貴郎はあの弱つて居る身體で東京にお出なさるといふ事を聽いて、妾は何んなに心配したか知れませんでした。けれど何うする事も出來ませんからせめて見送丈でも仕ようと思つて、私一人で家の埠頭に立つて居た事が有りました。あの日は寒い日で、日がもう暮れ懸つてゐて、何んなに心細う御座んしたか、それに貴郎と言へば淋しさうな顏を爲すつて船に乘つてお在なすつたのですもの』

『私も知つて居ますよ』

と自分は思はずかういふと、

『さう、知つて居て下すつて』

非常に嬉しさうで、何となくその聲が震へて聞えた。

『知つて居ますとも』と、自分はこんな事を言つては惡いと知りながら、それを打明けずには居られなかつた。『貴孃があの埠頭の柳の蔭に立つてゐて、私を見送つてゐて下さるのが、ふと眼に附いたから、私は實は聲を懸けようと思つたけれど、餘程遠かつたもんでしたから……つい……』

『本當に知つて居て下すつたの』と、そは〳〵した樣子で『嬉しい、私は本當に嬉しいわ……私の、私の心が屆いたのですもの』

娘の頰には何とも知れない美しい色が顯れて、眼には無限のやさしい光が籠つて居た。自分も非常に動されて染子の事も何も彼もすつかり忘れて了つて、身が其方へ引寄せられて行くやうな心地がする……

……

はつと氣が附いて、その傍を飛退くやうにして、自分は慌だしく二三歩先に進んだ。

『何うか爲すつたの』

『いゝえ』

とすぐ答へたが、その聲の中には何となく鋭い處があつたに相違ない。で娘は少し悄氣て、言はうと思つた事を止して了つたやうな樣子であつた。それからは二人共申合せたやうに、口を噤んで、猶とこ

ろ定めなく散歩したが、何一言も以前のやうな氣の乘つた話は爲なかつた。思ふに娘は折角のこの嬉しさを、何か言出して、破はしてはと懸念して居たのであらう。

間も無く歸途に就いて、町の入口に來懸つた時、いつものやうに、別れ〳〵に歸らうと思はぬでも無かつたが、しかし何うしてか別れずに共儘二人竝んで町の街道を、公然として歩いて行つた。日はもう三間程登つて、町でも誰一人起きてゐないものはない。そして自分等が通るのを誰も皆變な顏色をして、面白いものを見たと言はぬばかりに目送してゐた。

『〇〇さんが言つたのは、本當だね。その證據にはあれを御覽……』と姉樣道に入らうとした時ふと自分等を指して、無遠慮にも聲高く言つたものがある。自分は驚いて振返ると、汚い汚い茅葺屋根の軒下に、お多福の、眼細の、背低の、厭な女が、にたりと笑つて自分等を見てゐる。

自分は言ひやうのない不快な心地がした。

* * * * * * * *

あくる朝も、いつもの通り、自分は娘を連れて散歩に出た。けれどその間、何も別にこれといふ事を話さなかつた。娘は昨日の一語で、もう全然自分を信じ切つてゐるやうな樣子であつた。そして、人が來て騷しくなつたら、屹度妾の離座敷へお出なさいといふ事を、かへす〳〵も繰返して言つた。自分は思ひ變な心地が爲て、何うか爲なくつてはならないと思つて居ながら、しかも何うする事も出來なか

つた。

彼女が自分に全幅の愛を注がうとしてゐるのは、もう明かな事實であるのだと、その歸途のある處で、ふと自分は考へた。であるのに、自分は全幅の愛を注ぐことも出來ない身で、それを默つて受けて居るのは、果して罪ではなからうか。自分の感情が優しい爲め、それと思切つて打明ける事の出來ないといふのは、それは……それは好く分つてゐる。けれど只それの爲めに、そればかりの爲に默つて受けてゐるのは好いであらうか、いかん、いかん。それはいかんけれども又翻つて、けれど自分がそれを默つて受けて居るのは、決してそればかりではないやうだ。何處かに自分の心に全幅の愛をこれに注がうと思つてゐる處があるやうだ。少くとも彼女を愛して居るやうだ。現に彼女を美しいともやさしいとも思つた。

けれど……

自分の心は又烈しく亂れる。

餘りに深く考へ込んで、堤防の上をづうと町に入つたのも、全然自分は知らずにゐた。ふと心附いてはつとしたが其時はもう遲かつたので、兩側の人々は、已に好奇の眼で、頻りに自分等二人を矚目してゐた。

『御覽なさい。あれですもの、仕方が無いぢやありませんか』

といふ聲がした。

又十間程行くと、

『小島の家は、嚴格な家庭だと思つたのに、あんな事を默つて置くとは豫想外だ』

といふ者がある。

自分等は埋らなくなつたから、逃げるやうに、傍の小路に入つて、成るべく人の居ない樣な處を求めて、靜かに家の方へと歸つて來た。姉樣道の入口では昨日蔭言を言はれた覺えがあるから其處を通らずに態々廻路をして田圃の方から自分の家の裏へと出て、先是で安心と思つたのに……角の駄菓子屋の前に來ると、

『でなくつてさへ、朝は心地が好いのに……あゝやつて二人して行くんですもの、心地の惡い譯が有りませんのさ』

と又やられた。

隣の裏の門の前で、娘と別れようとした時、自分は思切つて、

『あんなに言はれるから、明日から當分散歩をやめませう』

と言つた。すると娘は顏を赤くして、

『かうなつてはもう私は……人に何んて言はれたつて……』と、低い聲で囁いた。その言葉の中に無

限の眞情が籠つて居つたので、自分は烈しく撲れた、しかも推返して、

『でも明日は私は他の方に散歩に行きますから』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

幸にも其日の午後、東京から快活な弟と親しい從兄とが遣つて來たので、自分は一緒になつて騷ぎ廻つて、成べく思ひ出さないやうにして居た。で、翌日の朝も眠がつてゐる弟と從兄とを無理に誘つて、西丘から田圃を越えて、三角渡の附近までわい〳〵言ひながら逍遙つて行つた。

八

其時はそれと確乎とは知らなかつたが、今にして思ふと、娘の自分に對する戀は隨分思ひ詰めた者であつたので、自分が染子に打明けて語らうと思つたのよりも或は一層烈しかつたか知れなかつた。已に娘は幼稚い時から自分を戀して居て、自分が年々歸省していろ〳〵な事を心置なく語るのを此上なく嬉しい事に思つて、そして……行末はといふやうな樂しい考を抱いて、一日も早く其機會の來るのを待つて居たのであつた。けれど其機會は幾年經つても容易に來ないばかりでなく、一方からは佐倉の伯母なんぞが、退引ならぬ緣談をさへ持込んで來るといふ始末なので、非常に苦んで、思煩つて、到頭今年こそはと決心して、その結果があの前の四度の朝の散歩となつたのであらうと自分は思ふ。が、娘は何

方かと言へば、氣の小さい、心の優しい、しかも押へ勝の、沈み勝の性質であつたから、他の娘が十言ふ處を、三つ切り言へないといふやうな有樣で、胸の中では燃えるやうに思つて居ても、纔かにそれをほのめかすばかりで、『私は嬉しいわ……それでは私の心が屆いたといふものだから』と言つたあの一語が殆ど關の山と言つても好い位であつたので……。

でも自分がそれに應ずる程の熱ある戀の心を持つて居て、熱心にそれに調子を合せたなら、娘も思はず知らず其本性を忘れて了つて、今少し大膽な、今少し打明けた話を爲るのであつたらうが、否娘もそれを何んなに心の底に願つてゐて、男と言ふものは、かうも情ない素振を爲るものかと、何んなに情なく思つて居たかと思ふと、自分は今でも氣の毒になつて、あの優しい弱々しい身體や、始終涙をためて居る樣な美しい眼が、むら〳〵と浮んで來て、何うもならない。

それにしても、戀程我儘なものがあらうか。そして、又、思はぬ人を思ふ程、悲しい苦しい事が、又と二つこの世にあらうか。

で、前にも言つた通り、自分は翌日の朝、眠がつて居る弟や從兄を無理やりに誘ひ出して、三角渡の附近迄散歩したが、成べく思出さないやうにして、時々浮んで來るのをも、無理に押へて、只わい〳〵と意味もなく騷いで居た。弟が剖葦の卵子を探さうぢや無いかと言出したのに贊成して、ぐちや〳〵と水溜のある蘆原の中に入つて見たり、直ぐ眼の前を通つて行く大きな白帆に石を投付けて船頭を怒せて

見たり、路傍の地藏尊を杖で叩いて頭がひよいと搖たのを脆い物だと笑つて見たり、それは〳〵惡戯の仕放題を盡して、更に何とも思はなかつた。それから彼方此方をぐる〳〵と廻つて、城趾の松原から大沼の見える邊まで行つて、もう歸らうと言ひだした時、自分はふと惡戯をする氣になつて、袂から二三枚の紙を出して、それを御幣のやうに碎いて、先にてく〳〵と歩いて行く從兄の三尺帶の上に（このてく〳〵といふ言葉は、最も好く從兄の歩き方を形容し盡してゐる。背の高い身體を、少し猫背に爲て歩いて行く樣は何うしもてく〳〵と言ひたい）そつと近寄つて挿んで遣つた。

そして後から弟と一緒にくつ〳〵笑つた。

從兄は始めは氣が附かない樣子であつたが、餘り自分等が笑ふので、何かと思つて、振返つて自分等の顏を見て、惡戯をしたのだなと感付いて、其儘後に手を伸したが、一攫みにその御幣を取つて、

『誰だい、こんな惡戯を仕たのは……』

『僕ぢやない〳〵、兄樣だ！』

『何に定雄さん』

と從兄は呆れた顏をして、

『今日は定雄樣、餘程何うかしてゐる』

本當に何うか仕てゐる！　本當に自分は何うか仕てゐるのだと自分は眞面目に思つた。すると急に氣

が何だか變に沈んで了つて、よくこんな惡戯をして笑つて居られるといふやうな氣が爲て、その事がむら〳〵と又溢れるやうに思出されて來る……あゝ本當に、自分は何うしたら好いのか。

歸つてからも猶いろ〳〵と考へたが、何うしてもその考が纏らないで、遂には苦しくなつて、何うでも構ふ事は無い、どうせ成るやうにしか成らないのだと、放擲つて了つて、又わい〳〵と騷ぎ出して、其日は碁やら水泳やらに無益に一日を費して了つた。處が其日の夕暮、又東京から自分の二人の友人が尋ねて來た。

二人とも同じ大學の學生ではあるが、學科が違ふ丈に、趣味やら感情やらが、宛で全く相違して居て、いつも二人が自分の室で逢つて、互に言葉を交すのを聞いてゐると、變挺で、とんちんかんで、一種滑稽な感が何うしても起らずには居られなかつた。一人の文科の英文學專修の方は話が詩や小說で持切つてゐて、議論の根本が靈界とか精神的とかいふ幽玄界に置いてあるのに、一人の理科の數學專攻の方は、それとは宛で反對で、人間には靈だの魂だのが有る譯の者ではない、皆な元は分子で、それが偶然のチャンスに因て、人にも、木にも、獸にも成るのに過ぎないのだと言つてゐて、戀だの詩だのといふ事を話すと、君達は又美しい夢を見て居るねと言つて、無邪氣な面白い笑方をする、それは〳〵罪の無い好い男であつた。

それが今偶然に自分の一室に出逢つたのさへ、既に一方ならぬ奇緣であるのに、酒を飲むと非常に話

が乘つて來て、誰でも罵倒の材料に爲るを憚らない自分の兄と、いつでも沈着で、思遣りが深くつて、笑ふ時眼が非常に細くなつて、一座が激して來ると、『それはさうだけれど……』といふ癖のある、これも同じく文學好の從兄と、只わい〳〵騷ぐことばかり知つてゐる自分の弟と、品格を重じて、時々激昂して思はず聲を高くする自分とが、雜然としてこの狹い六疊の一室に集つたのであるから、その面白さと言つたら、それは〳〵一通の事では無いので、從つて喧しい事も隨分烈しかつた。

日が暮れて飯が濟むか濟まないのに、もう已に文、理の二人は衝突し始めた。

『でも君、そんな馬鹿な事があるかい。まあ考へて見給へ、この我々人間がそんな意味の無い馬鹿氣てゐるものであるか無いか。直ぐ分るぢやないか、え君』

『考へる事も何も無いさ』と理科は笑つて、『だつて君、君のやうに我々の上に神が居る！　なんては、何うしても想像するに堪へんことぢやないか。でも君はよくそれを主張するから、理由はつて聞くと、君は直ぐ逃げて了つて、僕は意識で知つて言ふのぢやない。僕は信ずるのだといふが、その「信ずる」と言ふのは、想像ぢやないか。空想ぢやないか。僕の頭にはそんな空想といふものなんぞは容れられないからね』

『では君は想像を無視するのかい』

『無視するとは言はんが、少くとも蔑視するね』

『蔑視する？』と文科は少しむつとして、『だから君は駄目だと言ふのだ。だから君はこの高尚な詩や人生觀が分らないのだ。想像を蔑視してそれでも好く君は生きて居られるね』

『言ふ迄も無い。僕は想像なんぞで生きて居ようとは思はないのだ。僕は詩や宗教ほど愚にも附かない無益なものは無いと思つて居るのだからね』

『第一義で、已にもう違つて居るんだから』と從兄は傍から口を挿んで、『いくら言つたつて駄目さ。言へば言ふ程、反抗するばかりだから』

『本當だ』と文科は受けて、『けれど僕は刮目して見て居るさ。岡部君がその主義を變へずに、一生を送る事が出來るか何うか……僕は刮目して……』

『見て居給へ』と理科は笑ふ。

『人間にはヒユマニテイといふ者が有るんだからな。數學の一プラス一イクヲル二といふやうな譯には行かないからな』

『行くさ』と理科はまだ笑つて居る。

『では君』と自分も思はず知らず口を入れて、『君は僕が歌ふ詩を、宛つきり空想から出たのだと思つて居るのかい』

『さうさ、先生美しい夢を見て居るなと思つて感心するのさ』

『それぢや少しもあんな事が實際に有らうとは思つて居ないんだね』

『さうさ』

『けれど、それや君間違つて居るよ』と自分は笑つて、『現に僕は斷言する事が出來るんだものを、あの僕の詩に歌つたのは、實際と一つも違はないてふ事を』

『嘘ばかり言つて居らァ』

『嘘ぢやないよ』

『さうかな。君が現にあの詩のやうな夢のやうな戀を仕てゐる……何うも嘘らしいなァ』

『今見て居給へ。岡部君が戀つていふ事を知り始めると全然變つて了ふから』と文科は笑ひながら言つた。

『本當に岡部君に、熱い堪らないやうな戀の烙印をきうと印して遣つて見たいな』と自分が言ふと、

『きうとは好かつた』と從兄も笑ふ。

『怪しからん、怪しからん事を言つてらァ！』と言ひながら、岡部もにこ〳〵してゐる。

これを始めとして、その夜遲くまで種々な事を饒舌つて、わい〳〵騷いで、更にその止まる所を知らなかつたが、十一時過に、下婢が床を伸べに來たので、仕方が無しに割愛して、一同皆蚊帳へと入つた。自分は餘り饒舌つた故か、頭痛がして耳ががん〳〵鳴つて、何うにも直ぐ眠られるやうな心地が爲

なかつたから、少し新しい空氣でも吸つて來ようと思つて（心の底では又思出すから廢した方が好いとも思つても居た）戸外へ出た。

四邊が森として、夜の冷たい空氣が一面に行渡つて、いつもの通り蛙の聲が遠くで微かに聞える。庭の木立の中に入つて振返つて見ると、自分の室から射した燈火の光が深綠の中に青く劃然と區域を作つて、もう置初めた夜の露が、黑くぴか〳〵と光つてゐる。ふと燈火が人の影か何かになつたと思ふと、

『あれ放してお呉れよ、あれ岡部樣が……』と、弟の例のけたゝましい聲が聞えた。

あゝ今夜はよく騷いだなァと思つて、そして立留つて又其事を思出した。自分があんなに呑氣にして騷いで居たのを、隣では何と思つて聞いて居たらう。先程それとなくあの隣の弟に聞いて見ると、姉樣は氣分が惡いと言つたが、恐らく今日散歩を斷つた爲ではあるまいか、あゝそれにしても、何故こんな事に成つて仕舞つたのだらう。何故あの時自分は思切つて賢母樣に打明けて了はなかつたらう。あの時打明けて染子との間を今少し深くさへして置いたなら、自分は決してこのやうな運命の陷穽に陷れられるやうな事は無かつたであらうに……

あゝ自分の戀は全然打碎かれて了つたのだ。かう思ふと、ついこの間まで美しく胸に畫いてゐた染子さへ、自分はもう戀する資格が無くなつたやうな心地が仕た。で、三年の間いろいろ思煩つた嬉しい事やら、悲しい事やらも、皆遠い昔の記念になつて了つたやうで。

あゝもう夢に……

涙ははら〳〵と袖の上に落ちた。

ふと又飜つて、けれどそれは餘り思過した事ではないか。自分さへ始の心を堅くして、かの染子を初の如く清く美しく戀うてゐる事が出來れば、少しも疚しい事は無いのだ……

けれど、自分には果してそれが出來ようか。否今迄に已にそれが出來なかつたではないか。

『おい、宮崎、何時まで外にゐるんだ。早く來ないと、燈火を消して仕舞ふぞ』と不意に岡部の銅鑼聲が聞えたので、自分は室に歸つて、蚊帳の中に入つて、其儘燈火を吹消した。

あゝ自分は眠られようか。

九

翌日も一同と共に船山に渡るやら、押船に桃食ひに行くやらして、只わい〳〵騷いで居たが、しかも自分は絶えず心を苦めて、隙さへあれば、何う仕たら好からうと思つて居た。今でも覺えてゐるが、船山德滿寺の裏手の松林を、ずつと田圃の方に出ようとした自分はふと隣のあの娘と結婚したら、果して行末が幸福であらうかと思つて見た。こんな事を思ふのは、是が始めてで、かう思ふと變な妙な心持がして、そして又直ぐその跡から、何うして自分のやうな感情的（パッショネート）な人間がそんな間接（パッシーブ）な戀に滿足して、それ

で一生を幸福に送る事が出來ようぞと思つた。けれどもし自分があの娘の戀を受けずに、素氣なくそれを謝絶したなら、娘は果して如何になつて仕舞ふのであらう。初戀の傷痍の恐ろしさといふ事は、よく知つて居る自分ではないか。であるのに、自分は忍んでそれをかの女に嘗めさせる事が出來ようか。しかも稚い時から仲好で、長い間この不肖な自分を思つて居て呉れたあのやさしい娘に……

何うしてそれが……と思つた念が、すぐ一歩を進めて、それにしても何故そんなに前から自分を思つて呉れたなら、今少し早く、自分がまだ深く染子を思はない中に、何故打明けて呉れなかつたらうといふ烈しい悔恨の念が起つて來る……。すると染子の事やら、自分の戀の悲しさといふ事やら、運命の恐ろしさといふ事やらが、宛(まる)で巴渦のやうに暴れ出して、恐ろしい力で、自分の腦をかきまぜて了ふ……

そして、最後には『何うしりや好いだらう』といふ簡單な一語に歸着する。

あゝ自分は思遣のない友人等が、つまらない事を喧しく饒舌つてゐる中で、幾度この問題を出して、解かうとして、しかも解けずに、煩悶に煩悶を重ねて居つたらうか。否時々その喧しいのに堪兼ねて、何處か靜かな人の居ない山の蔭か林の中にでも行つて、靜かに考へたなら、と幾度も思つた。

さうしてゐる中に二日が過ぎた。

この間も、絶えず自分は迷つては居たが、しかも隣の娘の樣子は、姪や隣の弟に聞いて好く知つて居た。何でも昨日あたりから、身體が大分惡いやうで、兄は『何うしたんだらうな、隣の娘の病氣は、本

當にあんな饒定の付かぬものはない。脈搏も呼吸も變る所が無くつて、食物が拙くつてそして氣分が惡いと言ふのは』と首を傾けてゐた。そして此頃は東京から御客樣がお出なさつたものだから、定雄樣はもう遊びにお出なさらないつて、姉樣は淋しがつてゐると、隣の弟は言つた。

あまりに心に懸つたので、この三日目の午後、自分は行くとも無く、宛で引寄せられたといふやうに、その隣の裏門の柴折戸の處へ行つて見た。そして體をぐら〳〵する柱に凭せ懸けてそれとなく隣の庭を覗き込んだ。誰か長大息を吐く者があると思つて、一寸見廻すと、生憎！　その日影も洩らぬ深綠の下に、青い顏をして、娘がしよんぼりと立つてゐた。すぐ自分の姿を認めて、『おや定雄さん』と呼んだ。

自分はたうとう引寄せられた。

『東京から御客樣がお出なすつて』

『何うも騷がしくつて』

『では、何故私の離座敷にお出なさらないの。此間も彼樣に申して置きましたのに』

『でも私の友人で、一人跡に置いて來る譯にも行かないものだから』

『それもさうね』

と、娘は苦しさうに長大息を吐いた。

『何うも病氣が好くありませんか』

『え、何うも何だか胸が拘攣られるやうで、苦しくつて仕方が有りませんの』
『それはいけませんね。養生して早く治らなくては』
『否え、是は私の持病ですから、もう治る事は無いだらうと思ひますの。此頃ぢや何だかもういつそ死んで仕舞つた方が好いかと思つて』
『そんな事が』と自分は強ひて笑つて見せた。
『否え、本當……』
と又苦しさうな嘆息を吐く。
自分はいつそ是程思ひながら、それと直接に打明ける事を敢てしない、このしをらしい優しい娘を、此まゝ抱緊めて泣かうかと思つた。けれど、けれど、自分はそれを爲る事が出來ない身だ！　かう思ふと、胸は搔搖られるやうで、自分は殆そこに立つて居るに堪へられない。思切つて、
『それぢや……又』
と別れようとすると、
『もうお出なさるの』
『彼方で待つて居ますから』
『さう……では定雄さん、また綏り來て下さい。妾は淋しくつて仕方がありませんから』と少し躊躇

つて、『そして御客樣は何時お歸りなさるの』
『明後日あたりでせう』
『さう』
と娘は又嘆息を吐いた。それを聞くのが自分は此上なく苦しいから、急いで別れて、自分の庭に歸つて來たが、小屋の傍の臼に腰をかけて、久しく物を思つた。
そのあくる日の午前十時頃、自分は從兄と二人限で西丘の松林の中を歩いてゐた。これは從兄の所望に出たので、從兄は何か話す事があるから、二人で戸外に出ようといふから、何かと思ひながらも、其意に從つて、今しもこの西丘の上へと來たのであつた。(從兄とは昔から親しい間柄で、自分の染子を思うてゐる事も、この休暇に全然話して了はうといふ自分の決心もこの從兄は一つ殘らず知つてゐるので)從兄は何か言はうとして、しかもそれを言出すに苦んでゐる樣子であつたが、二人が松林の下の美しい芝生の、利根を一面に見渡した所に腰を掛けると、思切つたといふ風で、
『話と言つて、別に何でも無いけれど、何だか君の戀の事で少し變な噂を聞いたから』
其事かと自分は少し狼狽へて、
『噂つて、どんな』
『何んなつて、君が隣の娘と散歩して、もう二人は出來てるとか何とかつて人が言ふから』

『誰がそんな事を』

『誰がつて、それは誰でも好いが、兎に角それは事實かえ』と、從兄は變な顏色をして、自身を見た。曾て染子に對する自分の初戀を、非常に同情して聞いた從兄にしては、まことに意想外に思つたのも道理で、或は多情だと位は思つたかも知れぬ。

自分は默つて、少し俯向きになつてゐたが、やがて思返して、今迄あつた事件を、一伍一什殘る所なく從兄に話して聞かせた。從兄は初めは罪人の白狀でも聞くやうな顏色をして、嚴格に耳を傾けて居つたが、中頃からうん〳〵とやさしく點頭き初めて、段々と顏が優しくなつて、終尾には『成程それは』と、多少感嘆の意味を含んだ言葉を放つやうに成つた。で、自分が今のこの心の亂れる樣やら、隣の娘の大息やらを殘らず打明けて話して了ふと、從兄は例の顏を少し擡げて、『そいつぁ困つたなア』と慨嘆した。

『だから僕は』と自分は少し激して、『今は何うしようかと思つて、非常に困つて居るんで、生れてから、此樣に苦んだ事は有りやしない。考へても見て呉れ給へ。僕のやうな性質でさ。夜なんぞこの事を考へると、本當に寢ても何うしても居られや爲ないからね』

『本當に』と從兄も同感の言葉を合せた。

『君も知つてる通り、僕は平生餘り運命說や何かにそれ程心を留めない方だつたが、今度といふ今度

は、つく〳〵運命といふ者の恐ろしさを感じて了つた。誰だつて君、そんな風な者が傍からひよいと來て、圓滿な穩かなものをこんなに打碎して行かうとは思はないから』

『何うしたら好いんだらう』

『何うしたら好いんだか、僕には解らなくなつて了つたよ』

從兄は默つて、利根の白帆の方を見てゐたが、稍暫く經つてから、

『だけど、君、人間の罪なんて言ふ者は、多くそんな處から起るもんだから、何うか極めなくつちや爲らないよ。でなくつちや、君』

『それは知つてゐるけれど、何うも極められんのだもの』

『ぢや僕が聞くがね』と從兄は口調を改めて、『多少の輕重は有るだらうね』

『そりや言へないよ』

『困るねえ、靜かに考へたら、それ位の事は言へさうな者だが……ぢや君、何方と結婚したら行末は幸福だらうと思ふのかい』

『そりや染子の方が』

『ぢや初戀の方が正しいのだ』

『けれど、僕は隣の人の事を思ふと、とてもそんな無情な事は出來は仕ない。其上僕は今染子の方が

つて言つたけれど、僕はまだ染子の性質やら行爲やらを好く知つてると言ふんぢや無いから、それは只ほんの理想かも知れんもの』

『成程それも左樣だ』と言つたが、從兄は又暫く默つて居る。

『それぢや君、かう思つて、染子の方を思絕つて了ふ事あ出來ないのかい。染子は只理想で見て美しいと思つた者で、決して隣の樣に實際に觸れた譯では無いから、夢のやうな者だからつて、かう思つて』

『外の人なら――戀なんて言ふ事を、餘り考へない人なら、さう思つて、實際に近い方を選ぶかも知れないけれど、僕は出來んよ。少くとも戀の純潔といふ事を考へて居る僕にや出來んよ。ことに君客觀して見給へ。まだ自分の心を少しも打明けないから、先では少しも知らないと思つて居るけれど、もし先で、こればかりでも知つてゐて……僕を思つて居て吳れて、僕がそんな行爲をした曉、それを見て、あの美しい眼に、人知れぬ涙でも宿すやうな事でも有つて見給へ、僕は一生泣かなけりやならない』

『それぢや仕方が無いさ、源氏の君のやうに、二人とも妻に仕て仕舞ふさ』と、自分が餘り突込んだ事を言つたので、つい冷かす氣に成つたと見えて、從兄はかう言つて笑つた。自分は非常に口惜しいやうな心地がした。

『飛談かも無いよ。僕は本當に言ふんだよ』

『ぢや同じく客觀して見給へ』と、從兄は眞面目になつて、『隣の方だつてこれが初戀で、君が染子を思ふやうに、三年間も思つて、そしてそれが出來なかつたら、何んなになつて了ふか知れないよ。その曉は、君が染子と首尾よく結婚したつて、決して幸福には感じまい』

『だから』と、自分はいたく激して、『だから僕は苦しくつて仕方がないんだよ』かう言つたが、思はず知らず立上つて、

『あゝ本當に悲しいのは運命だ』と絕叫した。

『本當に、君が今一日早くか、あのをば樣が行つた日にか、思切つて打明けて了ひさへすれや、決してこんな事にや爲らなかつたのだからなア！　又隣の人にしても、前から思つて居たんだから、君が父母の死んだ前後に、少しでも好いから、打明けさへすりや、こんな悲しい事には成らなかつたんだからなア、本當にいくら考へて見ても、悲しいのは運命だよ』

自分は默つて、何とも言へない程悲しい情ない心地で、ぢつと溶々として流れて行く利根川を見た。向うの葦原の傍を、斜に孕んだ小さい帆が、ゆるゝゝと下つて行く。

『けれど』と、從兄が口を開いたのは、それから餘程經つてから後の事で、自分の見送つた小帆は、已に船下の長い堤防の起點あたりに行つて居た。『どうしてもこれは極りを付けなけりやならない事だから、君も好く靜かに考へて見給へ。僕も、僕の考へてゐる事を言はうから』

『で、君は何う考へて居るえ。君が今、僕の地位に立つたら、何うするえ』

『さうさ』と又暫く考へてゐたが、不意に『僕は後のを取る』

『その理由は？』

『例の實際論が出たと君は言ふかも知れんけれど、今も君が言つた通り、後のは少くとも、もう實際問題になつて居るのだからね。そりや前のだつて捨て難い理由は隨分ある。ことに、君の好む詩的の理由が澤山あらう。けれど詰る所、染子に對する君の戀は、丸つきり理想であつて、先では全然知らぬかも知れないのだ、又一歩讓つて、君の言ふやうに、暗に知つて居るとしても、その捨てられた悲哀は、決して隣の人が捨てられたやうな烈しい者ではあるまいと思ふ。それが已に第一の理由であるのに、それに加へて、まだ便利な事がいくらも有る。卽ち君が幼稚い頃から互に知り合つてゐたといふ事、隣の主人妻君が君に全幅の同情を持つてゐるといふ事、君の家が隣と仲が好くつて、絶えず往來してゐるといふ事、その他そのやうな事が、まだ他にいくらもあらうと思ふ……』

『そんな事は、構はないけれど』

『何、さうでない。君はまだ若いから、さう實際の事を輕蔑するけれど、實際の勢力は、隨分強いものだよ、君。現に社會の勢力を得てる者は、多く實際に重きを置く人だからね……けれど、まアそんな事は何うでも好いとして、前に言つた第一義が、已に左樣だから』

『左樣かしら、何うも僕にはさう思へたり、さう思へなかつたりして仕方が無い』

『それから兄の心でも、君に隣の人を貰つてやらうと考へて居るやうだからね』

『何うして？』

『何うしてつて。此間兄樣と一緒に酒を飲んだ時、兄樣がそんな風な口振を言つたもの、……隣の娘は溫和くつて好いから、定雄に何うだらうと思つて居るつて……そして隣でも家内殘らず呉れたがつて居るやうだから、定雄さへ好けりや、今極めて置いても好いのだが、何うだらうつて僕に相談した事が有つたから』

自分は愈その隣の娘の方に引寄せられて行くやうな心地がした。否、もう自分はすつかり引寄せられて了つて、出る事が出來なくなつて居るのかと思つた。そしてこれが自分の運命で、これに逆へば、何んな酷い目に逢ふかも知れないといふやうな心さへ起つた。

『だから』と從兄は言葉を續いで、『これがもう君の自然になつて了つたんだ、此道より外に行く處が無くなつたのかも知れないよ。どうもそれが自然だよ……』

自分は何といふ事も出來なかつた。

『で君は何う思ふえ？』

『何うもまだ考へて見なくつては』

『それは左様だらうさ。そして今言つた事は、全く僕の考なんだから、僕は左様しろと言ふのぢや無い。只これは極めなくつちやならない事だから……何時までも、人の感情を弄んで、どちら付かずにして置くのは、隨分少なからぬ罪だから、よく考へて、一刻も早くどつちになりと極めて了はなけりやならないのだ』

『それは左様だとも』

と言つたが、自分の胸は非常に苦しい。

『こんな處に居らァ』と、不意に後から聲を懸けたものがあるので、二人は驚いて振返ると、岡部の丸い黑い顏が、ひよいと樹の間から顯れて、遠くには文科の戸山や弟の顏も見える。

『人を置いてけ堀は、隨分酷いね』と、にこ〳〵と無邪氣に笑つて、『何んなに探がしたか知れや仕ないぜ。大沼の方だと思つて、態々御苦勞樣にも彼方まで出懸けて行つて』

と言つて、自分等の傍に來たが、自分等の驚いた樣子を見て、少し變だと思つたか、

『何か御密談の席でしたかね』

『何に今向うから來る帆を見てゐた處さ』と從兄はしらばくれた。

で、これからは議論を爲たり、戯談を言つたり、只他愛もなく騷ぎ散して、堤防傳ひに、昔の城が有つたといふ松林に行つて、百合や撫子の花などを探つて、十二時近い頃に疲れ果てゝ汗みどろに成つ

て、裏の離座敷へと歸つて來た。此間も自分は始終從兄の言葉を考へて、『何うしたら好からう』といふ常套語を繰返してゐたが、從兄と其話を爲てからは、今迄茫としてゐた者が俄かに分明と映つて來たやうで、自分の弱點やら、自分の罪やら、自分の長い間エルテル、ハイネなどの話をかの人に話して聞かせた事が、思はぬ媒妁と爲つた事やらが、今更のやうに着々と思當つて、無限の悔恨の情に堪へなかつた。ことに、兄がそのやうな事を思つて居るばかりではなく、隣の主人始め一家内殘らず、それを渴望してゐて、しかももう出來るものか何ぞのやうに思つて居るといふ事は、太く自分の心を苦めて、何うしても、もう自分は初戀を棄てゝ仕舞はなければならない事かと思つた。するとその隣の主人が、自分に平生人一倍目をかけたのも、さういふ目的が有つた爲では無かつたかと言ふやうな邪推も出で、自分の美しい樂しい初戀を、こんな風に仕て仕舞つた娘が、此上もなく怨めしいといふやうな心も起り、それと共に、染子の事が常一倍思出されて、何故其方はこれ程この身が苦んで居るのに、それを救つて呉れようとも仕ないのかと叫んでも見た。けれどもう晩い、もう駄目だ！　汝の運命は、もうとうに極つて了つて居るんだ。何んなに藻掻いたつて、何んなに暴れたつて、もう〳〵駄目だと、誰か遠くで自分の耳に囁くやうな心地が爲て、かう思つて居る一瞬間にすら、自分は一歩〳〵その陷穽に引入られて行きつゝあるやうに思はれる。で『本當に何うしたら好いのか』と自分は又絶望して了ふ。

けれども時には、そんな情實も何も彼も打破つて、超然として其上に立つ事もあるので、其時は自分

は非常に意志の力が强くつて、何んな難關でも切破つて、一意自分の思ふ所へ行かうとする。隣の主人が何と言はうが、隣の娘が何んな傷痍を負はうが、兄が何んな障礙を擴げようが、そんな事は自分と染子との神聖な戀の上に、更に關係を及ぼすものではないと、かう斷定して、自分は自ら今迄の自分が、非常に迷つてゐたといふ事を、今更のやうに悟る……。そしてこれを男らしく、直接にかの娘に打明けて語らうとまで決心する。さてそれを實行しようとすると……

『あゝ何うしても自分は意氣地が無い！』

一〇

その翌日の午後、東京の客は皆暇を告げて歸つて行つた。戸山はこれから日光に避暑に行く積りだから、君ももし都合が出來たら、後から遣つて來給へと、出發間際に一言言殘した。で、自分はふと旅行を思出した……。さうだ、旅行に行きさへすれば、この苦しい熱はすつかり覺めて了ふに相違ないのだと思つた。けれど自分はかう思つたばかりで、何うも此儘此處を去つて、この熱を醒して了はうと迄はまだ思つて居らなかつたと見えて、一時間後にはもう其事は忘れて居た。

皆が歸つた跡は、丸で大風の吹いた跡の樣に感ぜられた。從兄はまだ居るけれど、これは大方兄と起臥を共にして居るので、裏の縁座敷は、その日から又元のやうに、自分一人のものと爲つた。散ばつて

ゐるものを片附け、机や書籍を整頓して其處に坐つて、夕日のきら〳〵と向うの白壁に反映するのを見たが、もう直ぐ其事が思出されて來て、何うも苦しさに堪へられない。皆が歸つたら、靜かに考へられて好からうと思つたのは間違ひで。

其夜は非常に煩悶して、十二時、一時が鳴つても、自分はまだ眠らずにもぢ〳〵して居た。すると、二十二三日の月が遲く昇つて、その微な銀の樣な光が、庭の深綠の上に覺束なく照りわたる……。あゝ自分はこの淋しい薄白い月光を見て、何んなに枕を濡したか、何んなに自分の身が憐れに思はれたか。そして漸く眠り就いたと思ふと、色々な苦しい夢が、幾つとなく襲つて來て、翌朝眠覺めた時は、何だか自分が自分で無いやうな心地がして、唯茫然として、感覺も何も無くなつた樣であつた。

午前十時頃。娘は裏からこつそりと自分の室に來た。

『お客樣は皆お歸りなすつたつて』

と、多少元氣附いたやうな口振で、顏色も何となく晴々しい。

『え、漸く』

と狼狽てゝ迎へると、

『隨分元氣な方ばかりでしたね』

『え、喧しやばかりで、本當に騷々しくつて』

『貴郎のやうに靜な處をお好きになる方には……』と言つて、其儘庭の木戸を入つて、書齋の緣側に腰を掛けようとするから、

『お上んなさい』

『上つても好う御座んすの』

『好いですとも』

娘は嬉々として、その儘自分の机の傍に靜かに坐つた。今日は髪も結直して、衣服も好みの薩摩がすりを着た故か、いつもより何處となく美しい。

机の水入に挿してあつた一枝の撫子を直ぐ目に付けて、

『何う爲すつたの、これは』

それは一昨日從兄と松原の中で話した時に、それとなく折つて來たものであるので、自分は少し變な心地が仕たから、默つて居ると、

『え……何處から取つて來て』

『あの丘の上の松原から』

『ではあの私とこの間話を仕ましたあたり？』

『あの少し右の方です』

『さう……』と又この撫子に見入つて、『大變に色が好いのね……私も行つて取つて來たいけれど』と一人言のやうに言つて、『もう毎朝散歩をなさらないの』

『する事も有ますけれど』と口籠ると、

『有つたら、又妾を連れて行つて下さいな、朝散歩をすると、大變氣分が好いやうですもの』

でも、人が何とか言ふからと言はうとしたが、自分は何だか引込まれるやうな心地が仕たから止した。處が、不意に其處に隣の弟が駈けて來て、『姉樣一寸母樣がお出なさいつて』と言つたので、娘は立上つて、

『では是から一寸〳〵來て下さいな。妾は一人で、淋しくつて仕方がありませんから』と言つて歸つて行つた。

自分は逢ふ度毎に、その娘の美を發見して、益々その巴渦の中に落ちて行く樣な心地が仕た。あゝ其娘は次第に自分に近寄つて來て、もう自分は何うしてもそれを離れる事は出來ないやうに爲たのではあるまいか。

やがて午後になる、薄暮になる、夜になる、あゝ又苦しい一夜を過さねばならないのだ。かう思ふと、自分はすぐ堪らなく苦しくなつて、果てはこんなに苦しくつては、とても生活してゐる事が出來ないから、誰でも好いから、今この自分の運命を決めて呉れゝば好い。自分は後になつて、決して不足や

何かは言はないからとまで思つた。

自分が東京のあの親しい青年詩人に、詳しい長い手紙を書いたのは、その夜の事で、その手紙の中には、何んなに自分の今の苦しさと、自分の今の境遇とが、よく詳しく書いてあつたか、自分は今でも思出す。其手紙を書終つて、赤い大きい封筒に入れて、もう夜の更けたにも拘らず、四五丁もある辻の角の郵便箱に持つて行つて、それを抛り込んで、淋しい町をてく〳〵と歸つて來ると、時々人家の途切れた處から、利根川の溶々とした流が、今上つたばかりの弦月に照されて、閃々と美しい金色の浪を湧してゐる。何處か遠くで犬の吠える聲がして、泊つてゐる船の燈火なども、彼方此方に長く水に映つてゐる。自分はふと立留つて、友と別れる時、友が熱心に『君の幸福なる戀の圓滿ならん事を神に祈るから』と言つた言葉を思出した。そしてあの手紙を見たら何と思ふだらうと思つた。すると、非常に悲しくなつて、涙が意味もなく溢れ出て何うにも斯うにも仕方が無かつた。

その手紙は好く覺えて居らぬが、その境遇の發路を書いた後の意味は、大方かうで……。

『自分はこんなことに成らうとは夢にも思はなかつた。運命といふものがこんな風に襲つて來て、まだ咲かぬ蕾を吹散して行かうとは知らなかつた。それにしても、人間の弱點といふ者は、こんなに勢力のあるものであらうか。君は僕の唯一の友だ。だから君は僕の此度の行爲を見て、唯一言の下に、多情だの無節操だのと罵つて了ふやうな事はあるまいと思ふ。實際自分の煩悶も、それは〳〵非常なもので、決して想像や何かで思ひやられるものではない。現に今夜など、僕はもう死ぬかと思ふ程である。で、君にお願がある。それは外でもない、僕は自分で自分の運命が分らなくなつて了つたから、君が代つて――君は僕の唯一の友だ、僕の爲に、この憐れな友の爲めに眞面目な運命の手になつて、この二筋の道の何方を取つて好いかを指揮して呉れ給へ。僕は君の命令を、神の命令と思つてゐる』

それから後の方に、こんな意味もあつた……

『だが、明日になれば、屹度あの隣の娘に逢ふに相違ないから、又何んな美しい處を見せられて、それが俄に自分の運命を支配して、君の命令の來ない中に、全く其手に落ちて了ふやも料られない――あゝ人間は何處まで弱點に支配されてゐるのであらうと、自分は悲しい……』こんな事を書いたやうに自分は思ふ。で、この夜もおち〳〵眠られなかつた。

朝になると、果して心が變つて、何となく隣の娘に逢ひたいやうな氣が仕たので、我を忘れて隣に行つて、その離座敷の人の居ない處で、一時間ばかり、いつものやうに、どつち付かずの物語を仕た。娘は絶えず嬉々して、心の中ではもうこの戀が全然成就したもの〻やうに思つて居るらしい。

考へると、苦くなつたので、急いで歸つて來ると、室には、從兄が横になつて、新刊物を讀んでゐたが、すぐ起上つて、

『隣に行つたのかい』

『うむ』

と隱す譯にも行かないから、かう答へると、

『で、君はもう全然決めて了つたのかい』

『さういふ譯ぢや無いけれど』

と自分はまご〳〵した。

『では困るなァ！』と、從兄は少し堅くなつて、『隣ぢや何だかもう全然決めてゐる樣子があるつて言ふから』

自分は返事を仕ない。

『もう斯う成つちや、本當に極めなくつちや仕方が無いよ。兩方の爲によく無いのだからな』と少し途切れて、『で、君はあの後何う考へたんだえ』

『何うつて僕は言へないよ』

『ぢや、まだあの時と、同じやうに考へて居るのかい』

『まァ左樣だ』

と言つたが、非常に苦しかつた。

『困るなァ』と從兄は言つて、そして少し考へて、『で、君はあれかい、それを强ひても極めようとは仕ないのかい』

不圖昨夜友に書いた手紙を思出したから、『否、それは無い事はないのだ……。現に僕は、昨夜苦しくつて堪らなくなつたから、何方か一つに判斷して呉れろつて、君の命令なら決して不平などは言はないからつて……さう布川の處へ書いて遣つた位だからね……。僕だつて世間の遊冶郎のやうに、多情でかう逡巡してゐるのぢやない』

『それは左樣さ。僕だつてそんな事は思ひや爲ないがね』と、從兄は少し顏を和げて、『ぢや君ァ今此處に一人の友人が有つて、君の行末の幸福を思つて、その判斷を下して呉れる人が有つたなら、何とも言はずに、それに從つて行く事が出來るつて言ふんだね』

『まァ左樣さ』とは言つたが、思返して、『だがね君、それを言葉や理窟で言つて呉れたんでは、僕はどうも滿足が出來ないやうだ』

『では何うすれば好いと言ふんだらう』

『左樣だね、今の僕の心持を隱す所なく言つて見ると、僕の行末を思つて居て呉れる人が、僕には知らせずに、それを何方かの一方に實行して呉れゝば好いと思つてゐるね』

『ぢや極つてさへ了へば、何方でも好いので、只自分でそれを極めるには何うしても忍びんから神でも來て、それを分明と極めて呉れゝば好いと言ふんだね』

『まア左樣だね』

『では分つた』

これで二人の會話は絶えた。

從兄は平生自分とは大に議論の基礎を異にしてゐて、全く正反對の處も二三箇處はあるのではあるが、昔から親しい間柄で、よく自分の事を何の彼のと心配して、幼稚い時から、教師や兄の地位に立つて呉れたばかりではなく、大人くなつてからも、好く自分の弱點を見拔いて、是は善いとか、惡いとか、忠告して呉れる事は度々有つた。そして性質が極優しい方で、極めて同情の涙に富んで居るから、自分も心置なく、いろんな事を話して、幾らかは賴りにして居た。で、今『では分つた』と言つた限で、跡は言はずに默つて了つたが、自分は此時何となく物足りないやうな心地がして、從兄が何んな風に思つて居るのだらうと思つた。もしや……從兄が……

今一言それを遮つて置きたいと、自分は幾度も思つた。けれど從兄が默つて居るので、自分はそれを敢てする事は出來なかつた。

其夜は空が曇つて、近頃にない蒸暑い夜であつた。樹の梢や竹の葉末などは動いて居ながら、どうしたのか、室には風が入つて來ない。自分は蚊を拂ひながら、それでも机に向つて、ハイゼか誰かの小說に眼を注いでゐた。けれど胸は非常に騷いで、何が書いてあるのやら、一切そんな事は解らないので……

……

ふと駒下駄を引摺る音が仕たと思ふと、やがて自分の室に入つて來たものがある——誰かと思つたら、それは從兄で、しかも烈しく醉つて居た。

『何處に行つて來たの？』

『隣さ……君の事で、僕は隣に行つて、非常に御馳走になつて來た』

自分は驚いた。

『僕は……』と從兄は熟柿のやうな息を吹いて、『僕は君の爲めに、もう運命の手に成つたよ。もう動かないやうに仕て來て了つた！』

一

其夜の煩悶は今更言ふまい。

翌朝、從兄は眞面目で色々な事を自分に話した。もうかう成つたからは、仕方が無いといふ事やら、隣の娘はそれを聞いて何んなに喜んだか知れぬといふ事やら、これが君の自然であるといふ事やら、今になつて君がそれを破るやうな事があれば、もうそれは罪だといふ事やら、何やら彼やらを、殘る所なく自分に話した。實際從兄は眞面目にさう思つて居たので、兄のやうな心で自分の行末を思料つて、一

擧の下に、その迷を打破つて遣らうと爲たのであつた。けれど自分は決してこれを嬉しいとも、忝ないとも思はないばかりではなく、却つて何故そんな事を仕て呉れたらうと、無限の悔恨の情に堪へなかつた。

すると、其日の午前、從兄の勤めて居る東京の病院から電報が來て、至急歸つて來て呉れとの事であつた。で、從兄は直ぐ發足つ事になつて、忙しく荷物などを整へたが、別れ際に、自分の室に來て、縷々其事を說勸めて、それが君の一身一生の爲めだからと、かへす〴〵も言置いた。けれど自分はそれが何うもまだ全然決つて居ないやうに思はれて……どうもさう思はれて仕方が無かつた。

二時頃、隣の主人の聲が母屋で聞えたと思つたが、三時少し前に、自分はその肥つた後姿が隣の庭の方へと歸つて行くのを見た。

もしや……と思ふと、胸が又烈しく亂れ出す……

雨になりかゝつた空が夕暮から晴れて、しかも何處かゞ降つたと見えて、涼しい風があたりに滿わたつて、心地よい美しい夏の夜になつた。自分は夕飯に呼ばれて、いつもの通り、臺所の次の間に坐つて、姪や甥などゝ一緒にそれを濟したが、嫂が『兄樣の方に行つて、少し話をして遣つて下さいな、一人では酒も飲めないて言つて淋しがつて居りますから』つて言ふから、自分は承知して奥の六疊に行つた。

今迄自分は兄の事をいふ機會が無かつたが、兄といふ人は、失敗的經家で、しかも母から負けぬ氣をすつかり遺傳されて居るから、隨分この町にも聞えた喧ましやで、味方も多い代りに敵も隨分多く持つて居た。でも自分や弟などに對しては、至極寬大で、慈悲深くつて、勉めてその圭角を顯はさないやうにして居て呉れるので、自分は非常に感謝して、いつも難有いといふ念を抱いて居らぬ事は無い。

兄は少し赧くなつた顏を自分に向けて、『まゞ一杯』と杯をさして呉れた。自分は酒は極くいかぬ性質であるから、それを一口飲んで、下に置いて話し始めた。兄は政治の事も知つてゐて、內閣動搖の事やら、總選擧運動の事やらを得意になつて話し出したが、不意に思出したやうに話の腰を折つて、

『それから、お前に話すがな。娘を貰つて呉れろつて隣から申込んで來たんだが』

餘り突如なので、自分は驚いた。

『私も至極好いと思ふし、お前も好からうと思ふから、決めたとまでは無いが、そんな口振を言つて遣つたがお前は何うだえ？　別段異存は』

自分は返答が出來ようか。

『何うだい』と又促されて、

『まだ妻の事などは考へて居りませんから、猶好く考へて見て……』

自分は仕方が無いから、かう言ふと、

『それもさうだ、よく考へて見るが好い』

これで其話は絶えた。けれど愈々かう爲つたかと思ふと、胸が搔拐られるやうで、苦しくて、悲しくつて、情なくつて、とても話などをして居られないから、其儘立つて、自分の離座敷へと戻つて來た。

中に入らうとすると、もう染子の事が烈しい力で自分の胸に上つて來る……。が、はげしい力といふこの一語ばかりでは、決して十分に其時の心を示すに足りないと自分は思ふ。何故かといふに、此時の染子の思ひ出し方は、それは一通ではないので、今迄染子を思つて居ても、これ程戀しい懷しい悲しいと思つたのは、これが始めで、何うしても、自分は染子より外に自分の此純潔な戀を與へる少女は無いのであるのを思ひ知つた。

であるのに、自分は今それを棄てゝ、この樂しい戀を犧牲にして、無理やら、情實やら、實際問題やらの爲めに、他の戀も無い（其時は自分はかう斷言することが出來るやうであつた）一少女と結約の約束を結ばなけりやならない樣に成つて居るのだ。自分の信じてゐる從兄でさへ、それが自分の運命であつて、もし今になつてそれを實行しなければ、自分は罪人であるとまで斷言したのだ。

そしてもし自分がその少女に結婚した曉に、あの染子が同じやうにこの自分を戀してゐたといふ事が知れて、あの美しい眼に涙をためて、一生不幸に泣いてゐるといふ事でも聞かせられたら自分は何う成るのであらう。仕方が無い、これも自分の運命だなどゝ、冷かな言葉を放つ事が出來るであらうか。

その位なら、自分は死ぬ……

染子、染子！　と烈しく心中に叫んだ。すると顏やら、眼やら、姿やら、やさしい聲やらが眼の前に浮んで來て、自分を見てにつこと笑つて……。染子！　染子！

自分は何うして其方を忘れる事が出來ようか。

けれど……いくら忘れる事が出來なくつても、自分はもう陷穽に引込れるばかりに成つて居るのだ。自分は何うしてもあの娘を謝絶する事が出來ないやうに、義理やら、情實やらで、固く縛り附けられてゐるのだ。それにしても染子、其方は何故自分がこんなに成らない中に、自分をこの陷穽から救つて吳れようとは仕なかつたのだ。

かう思ふと、熱い涙が袖にあふれて來る……。ばかりか、かういふ風に烈しく煩悶してゐると、感覺が次第に鈍つて、頭腦が次第に勞れて、果ては茫然となつて了ふ。

自分は幾度も人の心の不思議といふ事に驚いたが、此時になつてこんなに烈しく染子を思ひ出さうとは知らなかつたので、否自分はもうとても隣の娘の手を免れる事は出來ないと思つてゐた……。けれど、それは自分の一時の感情で、まことの戀は、矢張染子にあつたのであると言ふ事が今分つた。

それから幾時間經つたか知らぬが、ふと心附いて見ると、自分は人家の途切れた、堤防の闇の中に影のやうになつて立つて居た。前には利根川が白く流れてゐて、直ぐ下の岸の川柳の生えてゐるあたりには、たぶ〳〵たぶ〳〵と、をり〳〵水の打寄する音がする。夜は餘程更けたと見えて、船越町の前も後

も、皆森として深い熟眠の中に沈んでゐる。ふと自分は氣が附いて、何うしてこんな處に來て居ゐだらうと思つて、それとなく思返すと、自分は微かながらにも、裏門から自分の家を出て、闇い裏道を通つて、をば樣の家の傍からずつと此處に來た事を覺えてゐる。『そして自分は何の爲にこんな遲くこんな所に來たのかしらん』

『左樣だ』と、自から答へて、『さうだ、自分はせめてあの子の家の前にでも行つたなら、いくらかは慰められるだらうと思つて來たのだ』

その染子の家の方を見ると、闇の中に高い半鐘臺がぬつと微かに顯れてゐて、その上から一文字に、銀河が右の方に美しく流れてゐた。星は降るやうで……あ、今一つ飛んだ。

右の沼は、全然闇の中に隱れて、前の日かの染子の車を見送つた松原も、茫として少しも見えない。が、自分は今染子の消息を聞かうなどゝは思つて居らなかつたので……。只その家の前にでも行つたら……と思つたのみである。

半鐘臺を通越して、一歩々々歩いて行くと、右側にゐびす屋と書いた玻璃燈をかけた家が有つて、その一軒置いて隣の黑塀造の家屋が、則ち染子の家であつた。自分は久しくその前を通つた事が無いと思ふと、もうすぐ自分の胸は騷ぎ出した。

自分はそつとその黑塀に近寄つて、玻璃燈の光の到らぬ陰に身を隱して、耳をもなく耳を欹て

た。けれど何の物音も無い。無い筈だ。今向うの家の時計が一時を打つて居ゐものを。それにしてもと又思出して、染子は何も知らないで、こんなに自分が苦しんでゐる事などは少しも知らずに、穩かに靜かに眠つてゐるのであらう。

染子！　染子！　と、自分は口の中で呼んで見た。そして優しい返答を待つやうに、ぢつと耳を傾けて居た。けれど何の物音も無い、何の答も無い。

せめてこれが、あの人のやさしい夢にでも入れば好いけれど、あゝ自分はそれをさへ望む事が出來ない情ない身だ。否そればかりではない、明日にも成つて、戀も何も無い一少女と結約をして了へば、自分はもうこの胸の中から、この染子の優しい影をさへすつかり取除いて了はなけりやならないのだ。さうなれば、自分は唯思ふ事さへ……。

何うして、それが自分に出來ようと暴風のやうな烈しい力で、一直線に思返した時、ふとある考が怒濤の中から眞珠の跳上つたやうに浮び出た。それは戀と結婚とは丸で別であるといふ事で、假令自分が染子を妻にする事が出來ないでも、それを一生變らずに胸に畫いてゐる事が出來れば卽ちそれが戀の成就で……。まことの戀は、それ以上望む事が出來ないといふ事であつた。それを自分が今他の少女と結婚して了へば、染子に對する自分の戀も結婚も、つまり兩つながら失つて了つたので、其時からは自分は一生もう染子を思ふ事が出來ないのである。それに引替へて自分が今この結婚を思切つて了へば、昔

のやうに染子を思ふ事も出來、假令絲なくて、染子が他に嫁して了ふとしても、自分は一生その純潔な戀を思つて居る事が出來るのである。けれど自分はあの隣の娘を謝絶る事が出來ようか。

それは此處に居ては出來ないであらう。けれど當分この處を去つて、少し心が落着いたならば隨分それを斷行する事が出來ない事はあるまい。さうだ旅行……。

染子が自分に智慧を借して呉れたかと思ふ程、自分は嬉しく、

『旅行、旅行だ！』

と絶叫した。

けれど、この事が元となつて、自分の染子に對する戀も、全然破られて了ふ樣な事はあるまいか。それは何とも知れないと自分は思つた。自分が今隣の事を謝絶すれば、當分自分はこの船越に歸つて來る事は出來ないのだ。今迄の交情やら、今迄の恩義に對しても、自分は歸つて來て、あの隣の主人に顏を合す事は出來ないのだ。その中には……その中には、染子も何うなつて了ふやも料られない。（自分は非常に悲しい）けれど左樣すれば染子は他に嫁いで了つても、前に言つた通り、少くとも自分は染子を一生思つてゐる事が出來るから好い。何んなに悲しくつてもそれは戀の成就だ。

『旅行！』

と自分は斷乎として叫んだ。

かち〳〵と鳴らして來る擊柝の音が近づいて來たので、自分は驚いて、急いで其處を立去つたが、猶久しい間、この堤防の闇の中を、彼方此方に歩いて、頻りに心を惱してゐた。すると、夏の夜の明易く、やがて鷄が鳴き出して、段々東方が白んで來る。

利根の流、ぎーと艫の鳴る音、白帆の影、曉の霧、あゝ一度去つては、自分はもう久しくこの美しい懷しい景色を見る事が出來なくなるのだ。

一二

裏門からこつそりと離座敷に入つて、いろ〳〵と旅行の準備を仕た。そして、それも大方整つたから、今一度あの松の處まで散歩しようと思つて、再び自分は戸外に出た。霧の深い朝で、いつものやうに振返つて見ても、半鐘臺などが茫として分明とは好く分らない程であつた。でも、松の下に行つて、その朝日の光が前の沼にかゞやき渡る頃には、もう餘程晴れて、その戀しい人の家の屋根を絶々ながら認める事が出來た。

『これももう久しく見る事が』

と思つたが、直ぐ打消して、それから又歩き出して、田畝の間を、てく〳〵と西丘の方へと行つた。

愈々旅行と決心してからは、自分は唯々それを行はうといふ一方に、思想を集めて了つたので、もう以

前のやうに烈しい煩悶を仕なかつた。只深い沈んだ大きな悲哀が、自分の心を占領してゐるばかりで。

ふと松並木の連つてゐる、こんもりとした鎭守の社の前に來て、詣でゝ行かうといふ氣が出たから、その路を奥へ入つて、石の華表を一つくゞると、前に高い石階が、深い綠色の中に連つてゐるのが見える。こゝには神田明神と同じ神體が祭つてあつて、小兒の時、九月十五日の祭禮に隣の娘とよく伴立つて遊びに來たものであつた。自分はその處々碎けてゐる危い石階を漸く登つて、石の獅子などの置かれてある處を向うに行かうとした……すると、前に白いものが、俄然として顯れ出た。

自分は驚いた。

それは……人……少女……染子であるといふ事を知つた時は、自分は愈々驚いた。

少女は白地の涼しさうな單衣を着て、髪は桃割に可愛らしく結んでゐる。樹の蔭になつた故か少し顏は青白いと自分は思つた。少女は自分を見て、やさしく辭儀した。

『こんなに早く何うして此處へお出なすつたの』

自分は思はず聲を懸けた。すると少女は恥しさうに、低頭いたが、しかも絕々に、

『父が病氣なものですから』

あゝ少女は、このやさしい少女は、父の病氣の爲めに、この朝詣を爲たのであると思ふと、自分は非常に懷しく戀しくなつて、其儘別れて行く後姿を見送りながら、いつそこの機會を外さずに、全然打明

けて了はうかと思つた。けれど此時ふと隣の娘のやつれた顏が眼前に浮んだので、今は自分はそんな事は出來ない身と思返して止した。

見てゐると、染子は靜かに石階を下りて、華表を潛つて、その松並木の中に見えて隱れて、次第に田畝の道を向うにとたどつて行く……。それも、あの家屋の蔭に隱れて、もう見えなくなつた。

自分は堪らなく悲しくなつて、胸は又亂れ始めた。が……自分は今自分の理想を行はうとしてゐる身であるのに、こんなに感情に動かされては何が出來ようと、自から戒めて、其の儘明神の前に行つて、長い間祈念を凝した。その祈念の言葉は、『どうかあの優しい少女を、自分が再びこの故鄕に歸る事が出來る迄、暴い浮世の風に當てぬやうに護つてゐて下され』といふ樣な意味であつた。そして自分は立上つて、堂の高緣に腰を掛けたまゝ、久しくなる迄自分の幼稚かつた事や染子を戀した時の事や、この間迄は自分の初戀がこんな儚い微なものにならうとは思も懸けなかつた事や、是から先の自分の運命は果して如何なるのであらうといふ事や、隣の娘も自分の事などは思切つて、好い養子を貰つて、圓滿にこの世を送つて呉れるやうにといふ事や、何や彼やを、つくゞゝと獨り悲しく思耽つた、すると涙が胸の中に溢れて來て、自分は不思不知低頭になつて、忍び音を立てゝ泣いた。けれどこの涙は、前に滴したやうな熱い烈しいものでは無くつて、寧ろ沈んだ冷きつた性質のものであつた。

何時迄もかうして居られないと立上つて、今一度前と同じ意味の祈念を神の前に凝したが、その時は

身も無いやうに、あぢきなくなつて、是から自分の行く先は、沙漠か何ぞのやうに思はれた。そしてその戀しい染子は、沙漠の荒涼とした中に咲き出でゝ、今にも吹散されようとしてゐる一枝の花のやうで……。

父母の墓に詣でゝ、自分の室に歸つて來ると、机の上に二通の手紙が置いてある――一通は東京の布川から、一通は日光の戸山からで。

先、布川のを開いて見ると、自分の今の境遇を、その優しい心でいろ〳〵と慰めて呉れて、讀んで行くと、坐に涙も滴れるばかりであつた。そしてその最後に……『僕が運命の手に爲らうなどとは思も寄らぬ事である。けれどもし君が後の戀を取つたとして考へて見ると、君の初戀の少女の涙は、必ず烈しく僕の心を動して、僕はそのやさしい少女の爲に、一篇の詩を歌はずに居られまいと思ふ』……と書いてあつた。

あゝあの友は優しい心を持つてゐると、自分は染々と心に感じた。そして染子の事やら、隣の娘のそれと知つたら嘸悲むであらうといふ事やらを考へた。戀といふ者は絶對のものであるから、隣の娘の傷痕も決して一生癒える事は無いであらう。自分はよくそれを知つて居る、知つて居りながら、かういふ行爲を爲るのは……

あゝ自分は苦しい。

戸山の手紙を封を切つて讀下して見ると、これは又、日光の景色の好い事やら、氣候の好い事やら、いろ〳〵面白く書聯ねて、萬障差繰つて遣つて來給へ……、首を長くして待つてゐるからとの事である。『さうだ、行かう……日光に行かう』と自分は叫んだ。

一三

それを話すと、兄は餘りの不意に驚いて、『そして昨日の返答は何うするのだ』と言つた。『大切な事ですから、猶よく考へて……歸つて來てからでも、遲くはあるまいと思つて……』と切拔けると、『さうか、そして幾日位滯在する積だ』『まア一週間か、十日位は何うしても』

強ひて止むる譯にも行かないので、兄は好いとも惡いとも言はずに默許して了つた。自分はすつかり準備を整へたが、あまり早くその事を隣へ話すと、留められる恐が有ると思つたから、午後六時過ぎ、もう汽船が下汐に來たといふ頃になつて、一寸行つて、其由を話して暇を告げた。幸ひ娘は大崎の友達の處に行つたとかで、その時家に居らなかつたので、『娘が聞いたら嘸吃驚するでせう』と言つた母の言葉を聞いた位で、別れる事が出來た。

あゝ自分は好く覺えてゐる。否何うしてあの時の心地を忘れる事が出來よう。自分は汽船に乘る。水夫は竿を入れて、汽笛が川に響き渡つて、船はごとん〳〵さあつさあと水を切つて動き出す……。見る

と、もう夕日がすつかり落ちて、天末が火事のやうに赤く染つて、そこに三階や半鐘臺の聳えてゐる船越の町は、丁度浮出たやうに黑くなつて顯れて見える。あゝ自分はかうして、此處を別れて行かうとはおもはなかつた。自分はこの夏期休暇に來る時に、あの三角渡の上に立つて、あれ程いろ〳〵な事を思つて來たのであるのに、それがこのやうに成らうとは、夢にも思つて居らなかつた。しかもそれは此の間で、まだ十五日と經たないのではないか。かう思ふと、運命の烈しさといふ事が、又盛に胸を衝いて來て、自分は涙を滴さずには居られなかつた。けれどさうは思つて居るものゝ、心の底の何處かでは、これが存外むづかしい事も無く落着して自分は又元のやうにあの染子を思ふ事が出來て、首尾よくこの戀が成就するかも知れぬとも思つて居たので、全然絶望の有樣では無かつた。する中にも船は行く、岸は移る、あゝあれが西丘、あれが松原、あれが三角渡……、もう戀しい故郷は見えなくなつて了つた。

あゝ夢！

と、自分は思はず知らず心中に叫んだが、この時の心は、まア何んなに悲しく情なく、心細かつたであらう。やがて夜になる、と汽船は水を切つて轟々として進んで行つた。

一四

日光で五日程遊んで、それから東京に歸つて、自分は男らしく思切つて、此決心を（無論染子の事は

除いて）詳しく兄の許に書いて遣つたが、何ういふ積か、兄は返事を呉れなかつた。けれど、其他の事に關しては、矢張以前の通りで、少しも機嫌を損じたやうな處を見せなかつた。自分は自分の戀は、もう是で終を告げたやうに思つたから、勉めてそれを思はずに、一意學科に熱中して居た。時にはもう戀などは無くとも、書籍ばかりでも、隨分生きて居られると思つた事も有つて。それでも時々思出して秋の靜な月になど向ふと、こんな夜に、こつそりと故郷に行つてそれとなく其處等を歩いたならばと、詩的に考へた事も度々有つた。をば樣は自分の發足つた翌日とかに歸つて來たさうであつたが、其後自分の遣つた長い手紙を讀んで、非常に殘念であるといふ事を言つてよこしたが、その末に染子は私が好く護つて居るから、安心して時の來るのを待つてお出なさいと細々其事が書いてあつた。自分は非常に嬉しく思つて、一層學事に勉強して、その翌年の試驗には前より數等儕輩の上に擢でる事が出來た。だが、自分の運命はもうその故郷を別れる時に定つて居つたので……、その翌年をば樣は死ぬ。染子も肺病を病つて死んで了ふといふ有樣で、自分はこの荒涼たる沙漠の中に只一人ぽつねんと取殘されて了つた。實際染子は自分を烈しく思つて居つたので、その肺病は矢張自分が原因であつた。それを自分は後年染子の親しい女友達から詳しく聞いたが、それを聞いた時は殆ど腸が搔拐られる樣で、それ丈でも十分一冊の小說になると思ふ……。染女の墓はあの隣の娘と散歩した街道に添うた共同墓地の利根川の方に向いた處にあるので、ある月の夜、自分はその墓前にしみ〴〵運命の儚いのを泣いた。けれど從兄の言に從

つて隣の娘に結婚しなかつたのが、せめてもの心遣りで、自分があの闇の夜に旅行と決心したのも染子の神聖な戀の力であらうと自分は信ずる。それにしてもそれほどの清いはげしい（少女の一生を犧牲にする程の）戀を自分が十分に受ける事が出來なかつたのは、假令隣の娘の戀が障礙を爲たとは言へ、餘りに節操のない心ではないか。けれど、自分は今でも染子を思ふ事が出來る身だ。否一生清く思つて居る事が出來る身だ。實際に成就しなかつたのを何で悔いよう。これが若し反對の結果で隣の娘でも娶つて居ようものなら、それこそ今の自分の後悔は何んなであつたらう。娘は何うしたと聞くのか。娘は二年ばかり經つて婿を取つたさうだが、何うも思はしくなくつて、子供などは一人も出來ないといふ事だ。實際あれも不幸福の娘で、それを思ふと何時も氣の毒になるのが例だ。何故かといふに、エルテルの書やハイネの詩などを讀んで聞かせたのは確かに自分も惡かつたに相違ないから……。それにしてもかへすがへすも悲しいのは運命ではないか。もしあの娘の心が今少し早く自分に通じたならば、せめてあの自分を見送つたといふ時に通じたならば、其頃はまだ深く染子を思つて居らなかつたから、無論幸福に隣の娘を戀する事が出來て、それこそ互に圓滿な一生を送る事が出來たであらうし、又隣の娘が横からあのやうな烈しい戀を爲懸けなかつたならば、自分は染子の神聖な戀を十分に受ける事が出來たであらうに、二人から戀せられた爲に自分は二人のどちらの戀をも得る事が出來なかつた、悲しいのは運命！

（明治三十四年四月）

重右衛門の最期

重右衛門の最期

一

五六人集つたある席上で、何ういふ拍子か、ふと露西亞の小説家イ、エス、ツルゲネーフの作品に話が移つて、ルウヂンの末路や、バザロフの性格などに、いろ〳〵興味の多い批評が出た事があつたが、其時、なにがしといふ男が、急に席を進めて『ツルゲネーフで思ひ出したが、僕は一度獵夫手記の中にでもありさうな人物に田舍で邂逅して、非常に心を動かした事があつた。それは本當に我々がツルゲネーフの作品に見る露西亞の農夫そのまゝで、自然の力と自然の姿とをあの位明かに見たことは、僕の貧しい經驗には殆ど絶無と言つて好い。よく觀察すれば、日本にも隨分アントニイ、コルソフや、ニチルトツフ、ハーノブのやうな人間はあるのだ』と言つて話し出した。

二

まアずつと初めから話さう。自分が十六の時始めて東京に遊學に來た頃の事だから、もう餘程古い話だが、其頃麴町の中六番町に速成學館といふ小さな私立學校があつた。英學、獨逸學、數學、漢學、國學、何でも御座れの荒物屋で、重に陸軍士官學校、幼年學校の試驗應募者の爲めに必須の課目を授けるといふ、今でも好く神田、本郷邊の中通に見るまことにつまらぬ學校で、自分等が知つてから二年ばかり經つて、其學校は潰れて了ひ、跡には大審院の判事か何かゞ、その家を修繕して、裕かに生活して居るのを見た。けれど其古風な門は依然たる昔の儘で、自分は小倉の古袴の短いのを着、肩を怒して、得々として其門に入つて行つたと思ふと、言ふに言はれぬ懷かしい心地がして、其時分の事が簇々と思ひ出されるのが例だ。で、何うして自分が其學校に通ふ事に成つたかと言ふと、夫は自分が陸軍志願であつたからで、自分の兄は非常な不平家の處から規則正い學校などに入つて、二年三年も懸つて修業するのなら誰にでも出來る、貴樣は少くともそんな意氣地の無い眞似を爲てはならぬ。何でも早く勉強して、來年にも幼年學校に入るやうにしなければ、一體男兒の本分が立たぬではないか。と言つた風に油を懸けられたので、それで當時規則正しい、陸軍志願の學生には唯一の良校と言はれた市谷の成城學校にも入らずに、從々速成といふ名に惚れて、そのつまらぬ學校の生徒となつたのであつた。今から思ふと、

隨分愚かな話ではあるが、自分はいくらか兄の東洋豪傑流の不平に感化されて居つたから、それを好い事と深く信じ、來年は必ず幼年學校に入らなければならぬと頻りに學問を勵んで居た。

忘れもせぬ、自分の其學校に行つて、頗に痣のある數學の教師に代數の初步を學び始めて、まだ幾日も經ぬ頃に、新に入學して來た二人の學生があつた。一人は髮毛の長い、色の白い薄痘痕のある、脊の高い男で風采は何處となく田舍臭いところがあるが、其の柔和な眼色の中には何處となく人を引付ける不思議の力が籠つて居て、一見して、僕は少なからず氣に入つた。一人はそれとは正反對に、脊の低い、色の淺黑い痩こけた體格で、其顏には極く單純な思想が顯はれて居るばかり、低頭勝なる眼には如何なる空想の影をも宿して居るやうには受取れなかつた。二人とも綿の交つた黑の毛絲の無意氣な襟卷を首に卷付けて、舊い舊い流行後れの黑の中高帽を冠つて（學生で中高帽などを冠つて居るものは今でも少い）それで、傍で聞いては何とも了解らぬやうな太甚しい田舍訛で、互に何事をか聲高く語り合ふのだ、他の學生等はいづれも腹を抱へて笑はぬものは無い。

『イツト、エズ、エ、デツク、』

とナショナルの讀本の發音が何うしても滿足に出來ぬので、二人はしたゝか苦しんで居たが、ある日、教師から指名されて、『ズー、ケツト、ラン』と讀方を初めると……、

生徒は一同どつと笑つた。

漢學の素讀の仕方がまた非常に可笑しかつた。文章軌範の韓退之の宰相に上るの書を其時分我々は讀んで居つたが、それを一種可笑しい、調子を附けずには何うしても讀めぬので、それが始まるといつも教場を賑はすの種とならぬ事は無かつたのである。

ある日、自分が課業を終つて、あたふたとその學校の門を出て行くと、自分より先にその田舍の二人が丸で兄弟でもあるかの様に、肩と肩とを摩合せて、頻りに何事をか話しながら歩いて行く。

聲を懸けようと思つたけれど、默つて自分は先へ行つて了つた。

次の日も二人睦しさうに竝んで行く。

矢張り聲を懸けなかつた。

次の日も……

又其次の日も矢張同じやうに肩を摩り合せて、同じやうにさも睦しさうに話し合つて行くので彼等は一體何處に行くのか知らん、自分等の歸る方角に歸つて行くのか知らんと思ひながら、ふと、

『君達は何處です』

と突然尋ねた。

急に答は爲ずに丁寧に會釋してから、

『弘學ですか、弘學は四谷の鹽町に居るでがすァ』

と脊の高い方がおづ〳〵答へた。

『僕も四谷の方に行くんだ！』

と自分も言つた。其頃自分は牛込の富久町に住んで居たので、其處に歸るには是非四谷の鹽町を通らなければならぬ。否、四谷の大通には夜などよく散歩に出掛る事がある身の、鹽町附近の光景には一方ならず熟して居る。玩具屋の隣に可愛い娘の居る砂糖屋、その向うに松風亭といふ菓子屋、鍛冶屋、酒屋、其前に新築の立派な郵便電信局……。

二三歩いてから、

『鹽町つて、……僕はよく知つてるが、鹽町の何處です、君達の居る家は……』

『鹽町の……湯屋の二階に來て居るんでさァ』

『湯屋つて言へば、あの角に柳のある？』

『左様でがさァ』

『それぢや僕も入つた事がある湯屋だ。彼處には脊の低い、にこ〳〵した妻君が居る筈だ』

『好く知つて居やすナァ』

と驚いた様子。

『それぢや、いつでも僕が歸る道だから、これから一緒に歸らうぢやありませんか』

『さう願へりや、はア、結構です……』

と脊の低い方が答へた。

又二三歩默つて歩いた。

『それで君達の國は一體何處です?』

『私等の國ですか、私等の國は信州でがすが……』

『信州の何處?』

『信州は長野の在でがすア』

『何時東京に來たのです』

『去年の十二月、來たんですが、山中から、はア出て來たもんだで、爲體が分らないでえら困りやした』

『鹽町の湯屋は親類ですか』

『親類ぢやありやしねえが、村の者で、昔村で貧乏した時分、私等の親が大層世話をした事がある男でさア。十年前に國許ア夜逃げする樣にして逃げて來たゞが、今ぢやえら身代のう拵へて、彼地處でア、まア好い方だつて言うたが、人の運て言ふものは解らねえものだす』

自分はこの時からこの二人に親しく成つたので、段々話を爲て見ると、言ふに言はれぬ性質の好い處があつて、脊の高い方が田舍者に似合はぬ才をも有つて居るし、又脊の低い方が自分と同じく漢詩を作る事を知つて居るので、一月もその同じ道を伴立つて歸る中には、十年も交つた親友のやうに親しくなつて、互に將來の思想も語り合へば、互の將來の目的も語り合つて、時間の都合で一緒に歸られぬ時は非常に寂しく感ずるといふ程の交情になつて了つた。自分は四谷御門の塵埃の間を歩きながら、幾度二人に向つて、陸軍志願を勸めたであらうか。幾度二人に漢學の修養の必要を說いたであらうか。自分は其頃兄に敎はつて居た白文の八家文の難解の處を讀み下し、又は卽席に七絕を賦して、大いに二人を驚かした。ことに脊の低い山縣行三郎といふのは、自分の漢詩に巧であることを知つて、喜んでその自作の漢詩を示し、好くその故鄕の雪の景色を說明して自分に聞かせた。自分の若い空想に富んだ心は何んなにその二人の故鄕の雪景色なるものを想像したであらうか。二人は言ふのである。自分の故鄕は長野から五里、山又山の奧で其の景色の美しさは、とても都會の人の想像などでは解りこは無えだアと。否、そればかりではない、脊の低い山縣は學問の時間の間に、その古い手帳をひろげて、其處に描かれたる拙い一枚の寫生圖を示し、これが私の家、これが杉山君の家、こゝにこんもりと茂つて居るのは村の鎭守、それから少し右に寄つて同じ木立のあるのは安養寺といふ村の寺、私等の逃げて來たのは（かれ等は親の許さぬのに、靑雲の志に堪へかねて脫走して來たのである）十二月の十三日の夜で、地上には雪が四五尺も積つて、それの堅く氷つてる上に、月が寒く美しく照り渡つて、何とも言へない光景だつ

た。私は杉山君と此間約束して置いたから、鎭守の向うに行つて待つて居ると、やがて杉山君は遣つて來る。二人連れ立つて歩み出す。追手のかからぬやうに爲るには何でも夜の中に長野に行つて明日の一番の汽車に乘らなければならぬ。と言ふので、一生懸命に歩いたが、村が見えなくなつた時は流石に胸が少し迫つて、親達は嘸驚く事であらう。こんな無理な事を爲ないでも、打明て賴んだなら、公然東京に出して呉れるであらうと思つた……など丶いふ事を自分に話した。自分はいよ〳〵空想を逞うして、其村、その靜かな山の中の村に一度は是非行つて見度いと、其頃から自分の胸はその山中の一村落に向つて波打つ丶あつたので……。猶詳しく聞くと、その村には尾谷川といふ清い溪流もあるといふ。その岸には水車が幾個となく懸つて居て、春は躑躅、夏は卯の花、秋は薄とその風情に富んで居ることは畫にも見ぬところである相な。又その村の山の畠には一面雪ならぬ蕎麥の花が咲き揃つて、秋風のさびしく其上を吹き渡る工合など君でも行つたなら、何んなに立派な詩が出來るかも知れぬとの事。あゝ本當にその仙境は何んな處であらうか。山と山とが重り合つて、其處に清い水が流れて、朴訥な人間が鋤を荷つて夕日の影にてく〳〵と家路をさして歸つて行く光景。それを想像すると、空想は空想に枝葉を添へて何だか自分の眼の前には西洋の讀本（リーダー）の中の仙女の故郷がちらついて何うもならぬ。

三

二人の寄寓して居る鹽町の湯屋の二階、其處に間もなく自分は行くやうになつた。二階は十二疊敷二間で階段を上つたところの一間の右の一隅には、欅の眩々（くら〳〵）した長火鉢が据ゑられてあつて鐵の五德に南部の錆びた鐵瓶が二箇懸つて、その後にしつかりした錠前の附いた總桐の簞笥がさも物々しく置かれてある。總じて室の一體の裝飾が、極く野暮な商人らしい好みで、その火鉢の前にはいつもでつぷりと肥つた、大きい頭の、痘痕面の、大縞の溫袍を着た五十ばかりの中老漢（ちゅうおやじ）が趺坐（あぐら）をかいて坐つて居るので、それが又自分が訪ねると、いつも笑ひながら丁寧に會釋を爲るのが常であつた。この主人公が卽ち二人の山の中から出身した昔の無賴漢なるもので、二十年前には村の中には其五尺の身を置く事が出來なかつたのであるが、人間の運といふものは解らぬ者で、二十九歲の時に夜逃を爲て、この東京に遣つて來て、蕎麥屋の擔夫、質屋の手傳、湯屋の三助とそれからそれへと辛抱して、今では兎に角一軒の湯屋の主人と成り濟して、財產の二三千も出來たといふ、まア感心すべき部類に入れても差支ない人間であつた。であるから自分の村の者と言へば、隨分一肌拔いで、力にもなつて遣るので、その山の中から來た失意の人間は、多くはこれを便つて來て、三助から段々湯屋の主人に立身しようとして居る人間も隨分あるといふ事だ。全體信濃のその二人の故郷といふのは、越後の方に其境を接して居るから、出稼といふ一種の冒險心には此上もなく富んで居るので、また現在その冒險に成功して、錦を故郷に飾つた例はいくらも眼の前に轉つて居るから、志を故郷に得ぬ者や、貧窶の境に沈淪して何うにも彼うにもならぬ

者や、自暴自棄に陷つた者や、乃至は青雲の志の烈しいものなどは、恰も溪流の大海に向つて流れ出づるが如く、日夜都會に向つて身を投ずるのを躊躇しないのであつた。あゝこの山中の民の冒險心。

で、自分は愈その山中の二人の青年と親しくなつて、果ては殆ど毎日のやうに、その二階を訪問した。春はやゝ過ぎて、夕の散歩の好時節になると、自分はよく四谷の大通を散歩して、歸りには必ずその柳のある湯屋に寄つて見る。すると、二階の上から田舍の太神樂に合せる横笛の音がれろ〳〵、ひーひやらりと面白く聞えて、月がその物干臺の上に水の如く照り渡つて、その脊の低い山縣の姿が明かな夜の色の中に黑くくつきりと際立つて見える。

『おい、山縣君！』

と下から聲を懸ける。

と……笛の音がぱつたり止む。

『誰だか』

と續いて田舍訛の聲。

『僕、僕、富山！』

『富山君か、上んなはれ』

その物干臺！　その月の照り渡つた物干臺の上で、自分等は何んなにその美しい夜を語り合つたであ

ちうか。今頃は私等の故鄕でもあの月が三峰の上に出て、鎭守の社の廣場には、若い男や若い女がその光を浴びながら何の彼のと言つて遊び戯れて居るであらう。斑尾山の影が黑くなつて、村の家々より漏るゝ微かな燈火の光！　あゝ歸りたい、歸りたいと山縣は懷鄕の情に堪へないやうに幾度もいふ。自分も何んなにその靜かな山中の村を想像したであらうか。

半年程立つた頃、自分は又その同じ村の青年の脫走者を二人から紹介された。顏の丸い、髮の前額を蔽つた二十一二の青年で、これは村でも有數の富豪の息子であるといふ事であつた。けれど自分は杉山からその新脫走者の家の經歷を聞いたばかり、別段二人ほど懇意にはならなかつた。杉山の言ふ所によると、その根本（青年の名は根本行輔と言ふので）の家柄は村では左程重きを置かれて居ないので、今でこそ村第一の富豪などゝ威張つて居るが、親父の代までは人が碌々交際も爲ない程の貧しい身分で、その親父は現に村の鎭守の賽錢を盜んだ事があつて、その二十七八の頃には三之助（親父の名）は村の爲めに不利な事ばかり企らんでならぬ故いつそ筵に卷いて千曲川に流して了はうではないかと故老の間に相談されたほどの惡漢であつたといふ事である。それがある時其頃の村の俄分限の山田といふ老人に、貴樣も好い年をして、いつまで村の衆に厄介を懸けて居るといふ事もあるまい。もう貴樣も到底村では一族擧げる事は難しい身分だから、一つ奮發して、江戸へ行つて皆の衆を見返つて遣らうといふ氣は無いか。私などを見なされ、一度は隨分村の衆に馬鹿にされて、口惜しい〳〵と思つたが、今では何うや

らかういふ身になつて、人にも立てられる樣になつた。三之助、貴樣は本當に一つ奮發して見る氣は無いか。と懇々說諭されて、鬼の眼に涙を拭き〳〵、餞別に貰つた金を路銀にして、それで江戸へ出て來たが、二十年の間に、何う轉んで、何う起きたか、五千といふ金を攫んで歸つて來て、田地を買ふ、養蠶を爲る、金貸を始める、瞬く間に一萬の富豪！　だから村では根本の家をあまり好くは言はぬので、その賽錢箱の切取つた處には今でも根本三之助竊盜と小さく書いてあつて、金を二百圓出すから、何うかそれを造り更へて呉れろと賴んでも、村の故老は斷乎としてそれに應じようともせぬとの事である。その長男がまた新しい青雲を望んで、ひそかに國を脫走するといふのは……

何と面白い話では無いか。

けれど自分がこの三人と交際したのは纔か二年に過ぎなかつた。山縣は家が餘り富んで居ない爲め、學資が續かないで失望して歸つて了ふし、根本は家から迎ひの者が來て無理往生に連れて行つて了ふし、唯一人杉山ばかり自分と一緒に其志を固く執つて、翌年の四月陸軍幼年學校の試驗に應じたが自分は體格で不合格、杉山は又學科で失敗して、それからといふものは自分等の間にもいつか交通が疎くなり、遂には全く手紙の交際になつて了つた。杉山は猶暫く東京に滯つて居た樣子であつたが、耳にするその近狀はいづれも面白からぬ事ばかりで、やれ吉原通を始めたの、筆屋の娘を何うかしたの、日本授產館の山師に騙されて財產を半分程失くしたのと、全く自暴自棄に陷つたやうな話であつた。それから

一年程經つて失敗を重ねて、茫然田舍に歸つて行つた相だが、間もなく徵兵の闕が當つて高崎の兵營に入つたといふ噂を聞いた。

九

五年は夢の如く過ぎ去つた。

其の五年目の夏のある靜かな日の事であつた。自分は小山から小山の間へと縫ふやうに通じて居る路を喘ぎ〳〵傳つて行くので、前には僧侶の趺坐したやうな山が藍を溶したやうな空に巍然として聳えて居て、小山を開墾した畑には蕎麥の花がもうそろ〳〵その白い美しい光景を呈し始めようとして居た。空氣は此上も無く澄んで、四面の山の涼しい風が何處から吹いて來るとも無く自分の汗になつた肌を折々襲つて行くその心地好さ！　これは山でなければ得られぬ賜と、自分はそれを眞袖に受けて、思ふさま山の清い瀨氣を吸つた。十年都會の塵にまみれて、些の清い空氣をだに得ることの出來なかつた自分は、長野の先の牟禮の停車場で下りた時、その下を流るゝ鳥居川の清溪と四邊を圍む青山の姿とに、既に一方ならず心を奪はれて、世にもかゝる自然の風景もあることかと座ろに心を動かしたのであるが、溪橋を渡り、山嶺をめぐり、進めば進むほど行けば行くだけ、自然の大景は丁度盡きざる繪卷物を廣げるが如く、自分の眼前に現れて來るので、自分は益々興を感じて、成程これでは友が誇つたのも無理で

はないと心から思つた。

小山と小山との間に一道の谿流、それを渡り終つて、猶其前に聳えて居る小さい峰を登つて行くと、段々四面の眺望がひろくなつて、今迄越えて來た山と山との間の路が地圖でも見るやうに分明指點せらるゝと共に、この小嶺に塞がれて見得なかつた前面の風景も俄かにパノラマにでも向つたやうにぱつと自分の眼前に廣げられた。

上州境の連山が丁度屏風を立廻したやうに一帶に連り渡つて、それが藍でも無ければ紫でも無い一種の色に彩られて、ふは〳〵として羊の毛のやうな白い雲が其絶巓からいくらも離れぬあたりに極めて美しく靡いて居る工合、何とも言へぬ。そして自分はすぐ前の山の、又その向うの山を越えて、遙かに帶を曳いたやうな銀の色のきらめき、あれは恐らく千曲の流れで、その又向うに續々と黑い人家の見えるのは、大方中野の町であらう。と思つて、ふと少し右に眼を移すと、千曲川の沿岸とも覺しきあたりに、絶大なる奇山の姿！

何と言ふ山か知らん……と自分は少時その好景に見惚れて居た。

ふと背負籠を負つた中老漢が向うから上つて來たので、

『あの山は？』

と指して尋ねた。

『あれでがすか、あれははァ、飯山の向うの高社山と申しやすだァ』

あれが高社山！　よく友の口から聞いたと思ふと、其時の事が簇々と思ひ出されて今更其頃が懷かしい。其仙境を何時尋ねて行かれるであらうか、或は一生尋ねて行く事が出來ぬかも知れぬなどゝ思つて居たが、五年後の今日かうして尋ねて行くとは、如何に緣の深い事であらう。

『鹽山村へはまだ餘程あるかね』

『鹽山へかね』と背負籠を傍の石の上に下して、腰を伸しながら、『鹽山へは此處からまだ二里と言ひやすだ。あの向うの大い山の下に小い山が幾個となく御座らつせう。その山中だァに……』

『鹽山に根本といふ家はあるかね』

と自分は更に尋ねた。

『根本……御座らしやるとも、根本ていのァ、鹽山では、一等の丸持大盡でごわすァ、』と答へて、更に、『あ、貴郎ァ、根本さァ處の御客樣かね』

『其處に行輔といふ子息が有るだらう？』

『御座らつしやる』と言つて、吸ひ懸けた烟草の烟を不細工な獅子鼻からすうと出し、『大盡どこの子息に似合ねえ堅い子息でごわすァ、何でも東京へ行かしつた時にァ、それあも四五百も遣つたといふ噂だが、それから堅くなつて、今ぢや村でも評判ものでごわす』

『一體汝は何處だね？　鹽山かね』

『いんにや、鹽山ではごへん、その一つ前の村の倉澤でごわす』

『もう根本は女房を持つたらう』

『嚊さまでごわすか、持ちましたとも、……えいと……あれは確か三年前で、芋子村の大盡の娘さァだ』

『子供は？』

『まだごわしねえ、もう出來さうな者だつて此間も父樣えらく心配なう爲て御座らしやつたけ』

『それでは山縣といふのも知つてるだらう』

『山縣――はァ學校の先生樣だァ、俺等の餓鬼も先生樣の御蔭にはえらくなつてるだァ。好い優しい人で、はァ』

『それでは杉山は何うしてるね』

『えらく、貴郎ァ、鹽山の人の名前知つて御座らつしやるだァ。貴郎ァ、若い者等が東京に出た時懇意に爲すつて居た先生だかね……』

言懸けてじろ〳〵と自分の顏を見て、

『……杉山の子息、ありや、今は徵集されて戰爭（日清戰爭）に行つてるだ。あの山師にや、村では

もう懲々して居るだァ、長野に興業館といふ東京の山師の出店見ていなものを押立てゝ、藥材で染物なう御始めるつて言つて、何も知らねえ村の者を騙くらかして、何でもはァ五六千圓も集めたゞァ。それを皆な姿を置いたり、藝妓を家に引摺込んだり、遊廓に毎晩のやうに行つたり、二月ばかりの中に滅茶滅茶にして仕舞つたゞァ。……恐ろしい虛言家でァ、俺等も旣の事欺騙かされる處でごわした』

『家は今何うしてるね』

『家でごすか、餘程あれの爲めに金のう打遣つたでがすが、爺樣まだ確乎して御座らつしやるし、廿年前までは村一番の大盡だつたで、まだえらく落魄ねえで暮して御座るだ』

と言つたが、ふと思出した樣に、

『鹽山つていふ村は、昔からえらく變り者を出す所でナァ、それが爲めに身代を拵へる者は無えではねいだが、困つた人間も隨分出るだァ』

『今でも困つた人間が居るかね』

中老漢は岩の上に卸した背負籠を擔つて、其儘歩き出さうとして居たが、自分に尋ねられて、

『つい、今もそれで大騷ぎをして居るだァ』

と言つた。

そして、その大騷ぎの何を意味して居るかを語らずに、其儘急いで向うへと下りて行つて了つた。自

分は猶少時其處に立つて、六年前の友が何んな生活を爲て居るであらうかといふ事、其妻は如何なる人で、其家は如何なる家柄で、その家庭は何んな工合であるかといふ事などを思ふと、種々なる感想が自分の胸に潮のやうに集つて來て、其山中の村が何だか自分と深い宿緣を有つて居るやうな氣が爲て、何うも成らぬ。

一時間後には、自分はもう其懷かしい村近く歩いて居た。成程山又山と友の言つたのも理と思はるゝばかりで、溪流はその重り合つた山の根を根氣よく曲り曲つて流れて居るが、或ところには風情ある柴の組橋、或るところには龍の住みさうな深い青淵、或は激湍沫を吹いて盛夏猶寒しといふ白玉の溪、或は白籬虹を掛けて全山皆動くがごとき飛瀑の響、自分は幾度足を留めて、幾度激賞の聲を揚げたか知れぬ。で、その曲り曲つた溪流に添つて、涼しい水の調に耳を洗ひながら、猶三十分程も進んで行くと、前面が思ひも懸けず俄かに開けて、小山の丘陵のごとく起伏して居る間に、黃稻の實れる田、蕎麥の花の白き畑、鬱蒼と茂れる鎭守の森、ところ〴〵に碁石を竝べたやうに散在して居る茅葺の人家。

手帳の畫がすぐ思出された。

「あゝこの靜かな村！　この村に向つて、自分の空想勝なる胸は何んなに烈しく波打つたであらうか。六年間思ひに思つて、さて今のこの一瞥。」

殊に、自分は世の塵の深きに塗れ、久しく自然の美しさに焦れた身、それが今思ふさまその自然の美

を占める事が出來る身となつたではないか。この靜かな村には世に疲れた自分をやさしく慰めて呉れる友二人まであるではないか。

顧ると、夕日は既に低くなつて、後の山の蔭は遠くその鎭守の森に及んで居る。空はいよいよ深碧の色を加へて、野中の大杉の影はくつきりと線を引いたやうに、その午後の晴やかな空に聳えて居る。山縣の家は何でもその大杉の蔭と聞いて居たので、自分は眼を放つてぢつと其方を打見やつた。

靜かな村！

五

と思つた途端、ふと自分の眼に入つたものがある。大杉の蔭に簇々と十軒ばかりの人家が黑く連つて居て、その向うの一段高い處に小學校らしい大きな建物があるが、その廣場とも覺しきあたりから、二道の白い水が、碧なる大空に向つて、丁度大きな噴水器を仕掛たごとく、盛に眞直に迸出して居る。

そしてその末が美しく夕日の光にかゞやき渡つて見える。

『あれは何だね』

折から子供を背負つた十歳ばかりの洟垂しの頑童（わんぱく）が傍に來たので、怪んで自分は尋ねた。

『あれア、喞筒だい』

と言つたが、見知らぬ自分の姿に、其儘走つて行つて了つた。

成程喞筒に相違ない。けれどこの靜かな山中の村にあのやうな喞筒！　火事などは何十年有らうとも思はれぬこの山中に、あのやうな喞筒の練習！　自分は何だか不思議なやうな氣が爲て仕方が無かつたが、これは只何の意味も無い練習に止まるのであらうと解釋して、其儘其村へと入つて行つた。先最初に小さい風情ある溪橋、その畔に終日動いて居る水車、婆樣の繰車を回しながら片手間に商賣をして居る駄菓子屋、養蠶の板籠を山のごとく積み重ねた間口の廣い家、娘の唄を歌ひながら一心に機を織つて居る小屋など、一つ〳〵顯れるのを段々先へ先へと歩いて行くと、高低定らざる石の多い路の凹處には、水が丸で洪水の退いた跡でもあるかのやうに滿ち渡つて、家々の屋根は雨あがりの後のごとく全く濕ひ盡して居る。否、そればかりではない、それから大凡十間ばかり離れたところには、新しい一箇の赤塗の大きな喞筒が据ゑられてあつて、それから出て居る一箇のズツクの管は後の尾谷の溪流に通じ、二箇の徑五寸ばかりの管は大空に向つて烈しい音をたてながら、盛んに迸出して居るのを認めた。

其周圍には村の若者が頰かぶりに尻はしをりといふ體で、その數大凡三十人許り、全く一群に成つて、頻りにそれを練習して居る樣子である。喞筒の水を汲上げるもの、ズツクの管を荷ふもの、管の尖を持つて頻りに度合を計つて居るもの、やれ今少し力を入れろの、やれ管が少し横に曲るの、やれ漏るの、やれ冷いのと、それは一方ならぬ大騷ぎで、世話人らしい印半纏を着た五十恰好の中老漢が頻りに

それを差圖して居るにも拘はらず、一同はまだ喞筒の遣ひ方に慣れぬと覺しく、管から迸出する水を思ふ所に遣らうとするには、まだ餘程困難らしい有樣が明かに見える。一同は今水を學校の屋根に濺がうとして居るので、頻りに二箇の管を其方向に向けつゝあるが、一度はそれが屋根の上を越えて、遠く向うに落ち、一度は見當違ひに一軒先の茅葺屋根を荒し、三度目には學校の中の雨戸へしたゝかに打ち付けた。

『やあ！』

と後で喝采した。

見ると、路の傍、家の窓、屋根の上、樹の梢などに老若男女、殆ど全村の人を盡したかと思はるゝばかりの人數が、この山中に珍らしい喞筒の練習を見物する爲めに鶩くばかり集つて居るので、旨く行つたとては、喝采し、拙く行つたとては、喝采し、やれ管が何うしたの、やれ誰さんがずぶ濡れになつたのと頻りに批評を加へるのであつた。

餘り面白いので、自分は思はず立留つてそれを見た。この多い若者の中に自分の友が交つて居はせぬかとも思はぬではなかつたが、さりとて別段それを氣にも留めずに、只餘念なく見惚れて居た。自分の前には川に浸けてある方の管が蛇ののたくつたやうに蟠つて其中を今しも水が烈しい力で通つて行くと覺しく、針のやうな隙間から、しう〳〵と音して烈しく餘流が迸出して居る。で、一同はやつとの思ひ

で、其目的の學校の屋根に涼しい一雨を降らせたが、ふと其群の一人――古い手拭を被つて縞の單衣を裾短かに端折つた――が、何か用が出來たと見えて、急いで自分の方へ下りて來た……と……思ふと、二人は顔見合せた。

『おや君ぢや無いか』

と自分は言つた。

『ヤア、富山……さん！』

と根本行輔が驚いて叫んだ。

丸きり六年逢はぬのだが、その風貌といひ、その態度といひ、更に昔に變らぬので、これを見ても、山中の平和が、直ぐ自分の腦に浮んだ。

渠は限りなき喜悅の色を其穩かな顔に呈して、頻りに自分の顔を見て居たが、不圖傍に立つて居る其家の家童らしい十四五の少年を呼び近づけて、それに、この御客樣を丁寧に家に案內せよといふ事を命じ、さて自分に向つては、

『失禮だすが、村の若い者でこんな事を遣り懸けて居ますだで……一足先に行つて休んで居て下され、もうすぐ濟むだで、跡から直きに參じますだに』

自分は小童に導かれて、共儘根本行輔の家へと行つた。一方稻の穗の豐年らしく垂れて居る田、一方

甜瓜の旨さうに熟して居る畠の間の細い路を爪先上りにだら〳〵とのぼつて行くと、丘と丘との重り合つた處の、やゝ低く凹んだ一帶の地に、一棟の茅葺屋根と一つの小さい白壁造の土藏とがあつて、其後には欅の十年ほど經つた疎らな林、その周圍には、蕎麥や、胡瓜や冬瓜や、玉蜀黍などを植ゑた畠、猶近づくと路の傍に田舍には何處にも見懸ける不潔な肥料溜があつて、それから薪を積み重ねた小屋、雜草が井桁の間に萬遍なく生えて居る古い井、高く夕日の影に懸つて見える桔槔、猶その前に、鍬や鋤を洗ふ爲めに一間四方ばかり水溜が穿たれてあるが、これはこの地方に特有で、この地方ではこれを田池と稱へて、その深さは殆ど人の肩を沒するばかり、鯉、鮒の魚類をも其中に養つて、時には四五寸の大きさまで育てる事もあるといふ話。周圍には萱やら、薄やらの雜草が次第もなく生ひ茂つて、水際には河骨、撫子などが、やゝ濁つた水にあたらその美しい影をうつして居るといふ光景であつた。山縣の話に、自分が十五六の惡戲盛りは相棒の杉山とよくこの田池の鯉を荒して、一夜に何十尾といふ數を盜んで、殆ど始末に困つた事があつたとの事を聞いて居つたが、その所謂田池がこんな小さな汚穢い者とは夢にも思つて居らなかつた。否、其友の家――村一番の大盡の家でもこんな低い小さいものとは？

ふと見ると、その田池に臨んで、白い手拭を被つた一人の女が、頻りに草刈鎌を磨いで居る。

『神さまア、旦那樣に吩咐かつて、東京の御客樣ァ伴れて來たゞァ』

と小童は突如に怒鳴つた。

女は驚いて顔を上げた。何處と言つて非難すべきところは無いが、色の黑い、感覺の乏しい、黑々と鐵漿を附けた、割合に老けた顏で、これが友の妻とすぐ感附いた自分は、友の姿の小さく若々しいのに比べて、いかにこの妻の丈高く、體格の大きいかといふ事に思ひ及んだ。これは大方東京で餘り『老たる夫と若い妻』との一行を見馴れた故であらう。

自分はその妻の手に由つて、直ちに友の父なる人に紹介された。父なる人は折しも鋸や、鎌や、唐瓜と絲屑などの無茶苦茶に散ばつて居る緣側に後向に坐つて、頻りに野菜の種を選分けて居たが、自分を見るや、兼ねて息子から噂に聞いて居つた身の、さも馴々しく、

『これは〳〵東京の先生――好う、まア、この山中に』

といふ調子で挨拶された。

流石は若い頃江戸に出て苦勞したといふ程あつて、その人を外さぬ話し振、その莞爾と滿面に笑を含んだ顏色など、一見して自分はその尋常ならざる性質を知つた。輪廓の丸い、眼の鋭い、鼻の尖つた顏のつくりで、體格は丸で相撲取でもあるかのやうに、でつぷりと肥つた、體量は二十貫目以上もあらうかと思はれるばかりであつた。これが、當年の無賴漢、當年の空想家、當年の冒險家で、一度はこの平和な村の人々に持餘されて、孤に包んで千曲川に投込まれようとまで相談された人かと思ふと、自分は悠遠なる人生の不思議を胸に覺えずには居られぬのである。

此時、奴僕らしい三十前後の顏の汚い男が駈けて遣つて來て、

『大旦那さア、がいに暑いんで、馬が疲れて、寢そべつて、起きねえが、はア、何う爲べい』

と叫んだ。

『また寢そべつたか、困るだなア、汝、餘り劇く虐使ふでねえか』

『虐使ふどころか、此間も寢反つたさから、四俵つけるところを三俵にして來たさアが』

『何處へ寢反つてるだ』

『孫右衞門どん垣の處の坂で、寢反つたまゝ何うしても起きねえだ。己あ何うかして起すべい思つて、孫右衞門さん許へ頼みに行つたさが、小い娘つ子ばかりで、何うする事も爲ねえだ』

『仕方の無い奴等だ』

と罵倒したが、傍に立つて居る子息の妻に向つて、

『ぢや御客樣にはえらい失禮だが、私あ馬を起しに行つて來るだあから、御前は御客を奥に通して、行輔が歸つて來る迄、緩り御休ませ申して置け』

自分に向つては、

『それぢや、先生失禮しやす！』

自分の挨拶をも聞かず、

『一緒に歩べ、……おい作公、何を愚圖〳〵してやがるんだ？』

と怒鳴りながら走つて行つた。

同時に自分は奥の一室へと案内される。奥の一室――成程此處は少しは整頓して居る。床の間には何んな素人が見ても贋と解り切つた文晁の山水が懸つて居て、長押には孰れ飯山あたりの零落士族から買つたと思はれる槍が二本、さも不遇を嘆じたやうに黑く燻つて懸つて居る。けれど都とは違つて、造作は確乎として居るし、天井は高く造られてあるから、風の流通もおのづから好く、只、馬小屋の蠅さへ此處まで押寄せて來なければ、中々居心の好い靜な室であるのだが……

やがて細君は茶器を運んで來たが、おづ〳〵と自分の前に坐つて、そして古くなつた九谷燒の急須から、三十目くらゐの茶を汲んで出した。

『田舍は靜かで好いですナア』

と自分はそれとなく言ふと、

『いゝえ、靜かどころでは、……此頃は、はア、えらく物騷で……』

『何うしてです？』

『何うしてといふ譯も無えだすが……』

と躊躇ふのを、

『放火なのですか』

『はア』

『誰か惡い者でもあるんですか』

『はア惡い者があつて、どうも困り切りますだア』

暫時沈默。

『はア』と自分は緩い茶を一杯啜つてから、『それでゝすナア、今喞筒を稽古して居るのは？』

『貴郎さアも見て御座らしやつたゞか。火事が、はア、毎晩のやうにあつて、物騷で、仕方が無えものだで、村で割前で金のう集めて、漸く東京から昨日喞筒が出來て來たゞア』

『東京から喞筒？』

『はア、昨日出來て來たばかしで……村にやもう何十年と火事なんぞは無いだで、喞筒なんぞはありませんだつたが、今度は、はア仕方が無えのでごわす。そして、今夜にも火事が打始らねえ者でも無えといふので、若い者が午から學校へ寄り集つて、喞筒の稽古を爲て居るんでごわす。……』と少時途絶

えて、『でも、……大方水は撒いたやうだで、もう、直き歸つて來るでごわせう』

と言つたが、更に氣を更へて、

『まア、御疲れだせうに、綏くり横にでも成つて休まつしやれ。牟禮には三里には遠いだすから』

と古い黑塗の枕を出してそして、挨拶して次の室へ下つた。

見ると中々好い眺望である。地位が高いので、村の全景がすつかり手に取るやうに見えて、尾谷川の閃々と夕日にかゞやく激湍や、三ッ峯の牛の臥たやうに低く長く連つて居る翠微や、猶少し遠く上州境の山が深紫の色になつて連り互つて居る有樣や、ことに、高社山の卓れた姿が、此處から見ると、一層魁偉の趣を呈して居るので、その雲烟の變化が少なからず、自分の心を動かしたのであつた。あゝこの平和な村！　あゝこの美しい自然！　と思ふとすると、今言つた妻君の言葉がゆくりなく簇々と自分の胸に思ひ出された。この平和な村に喞筒！　この美しい村に放火！　殊に何十年とそんな例が無かつたといふこの村に！　これは何か意味が無くてはならぬ。これは必ず何か不自然な事があつたに相違ないと自分は思つた。空想勝なる自分の胸は今しもこの山中にも猶絶えない人生の巴渦の烈しきを想像して、轉た一種の感に撲れたのであつた。

『放火が流行るッて言ふが、一體何うしたんです？』

かう言つて自分は友に訊ねた。これは一時間程前、友はその喞筒の稽古から歸つて來て、いろ〳〵昔の事や、よくこんな山中に來て吳れたといふ事や、餘り突然なので吃驚したといふ事や、六年ぶりの何や彼やを殆ど語り盡した後で、自分の前には地酒の不味のながら、二三本の德利が既に全く倒されてあつて、名物の蕎麥が、椀に山盛に盛られてある。細君は、田舍流儀の馳走振に、日光塗の盆を控へて、隙が有つたなら、切込まうと立構へて居るので、既に、數回の太刀打に一方ならず參つて居る自分は、太くそれを恐れて居るのであつた。友も稍醉つた樣子で、漸く戸外の闇くなつて行くのを見送つて居たが、不意に、かう訊ねられて、われに返つたといふ風で、

『本當に困つて了ふですア、夜も碌々寢られないのですから』

『それで、一體、犯罪者が解らんのかね？』

『そりやア、もう彼奴と極つて居るんだが……』

『何故捕縛しないのだね？』

『それが田舍ですア……』と友は言葉を意味あり氣に長く曳いて、『駐在所に巡査ア、一人來て居る事は居るんだすが、田舍の巡査なんていふ者は、暢氣な者だで、嫌疑が懸つたばかりでは、捕縛する事ア出來ん。現行犯でなければ……とかう言つて濟まして居りやすだア。一體、巡査先生の方がびく〳〵し

て居るんで御座すァ、だもんだで、彼奴ァ、好い氣に成つて、始めからでは、もう十五六軒ッン燃やしましたぜ』

『十五六軒！』

『この小さい村、皆な合せても百戸位しか無いこの小さい村に、十五六軒ですだで、村開闢以來の珍事として、大騒ぎを遣つて居りますだァ』

『それは左樣だらう』

少時經つてから、

『で、一體その惡者は何者だね、村の者かね』

『はァ、村の者でさァ』

『村の者で、そんな大膽な事を爲るといふのは、其處に何か理由が有る事だらうが……』

『何ァに、はァ、御話にも何にもなりやしやせん。放蕩者で性質が惡くつて、五六年も前から、もう村の者ァ、相手に仕なかつたんですから』

『まだ若いのかね』

『いや、もう四十二三……』

『それぢゃ分別盛だのに……』

と自分は深く考へた。

『御口にァ、合ひますめいけど、何にもがァせんだに、せめて、蕎麥なと上つてお呉れんし』

と細君は盆を出した。

自分はもう十分であるといふ事を述べて、そして蕎麥の椀を保護すべく後に遣つた。それでは御酒でもと細君は德利を取上げたので、それをも辭儀してはと、前のを飲干して一杯受けた。

『それにしても……』と自分は口を開いて、

『十何回も放火を爲るのに、一度位實行して居るところを見付けさうなものですがナァ』

『それが、彼奴が實行んのなら、無論見付けない事は無いだすが、彼奴の手下に娘つ子が一人居やして、そいつが馬鹿に敏捷くつて、宛で電光か何ぞのやうで、とても村の者の手には乘らねえだ』

『それは奴の本當の娘なんですか』

『否、今年の春頃から、嚊代りに連れて來たんだといふ話で、何でも、はァ、芋澤あたりの者だつて言ふ事だす。此奴が始末におへねえ娘つ子で、稚い頃から、親も兄弟もなく、野原で育つた丸で獸といくらも變らねえと云ふ話で、何でも重右衛門（嫌疑者の名）が飯綱原で始めて春情を敎へたとか言ふんで、それからは、村へ來て、嚊の代りを勤めて居るが、これが實に手にをへねえだ。重右衛門が自身手を下すのでなく、この獸のやうな娘つ子に吩咐けて火を放けさせるのだから、重右衛門と言ふ事が解つ

て居ても、それを捕縛するといふ事は出來ず、されば と言つて、娘つ子は敏捷つて、捕へる事は猶々出來ず、殆ど困つて仕舞つたでがすァ』

『年齡は何歲位？』

『まだ漸つと十七位のもんだせう』

『それが捕へる事が出來ないとは！　高が娘の子一人』

『知らない人はさう思ふのは無理は無いだす。高が娘つ子一人、それを捕へる事が出來ぬとは、餘り馬鹿々々しくて、話にも何にも成らない樣だが、それを知つて御覽なされ、それは實に驚いたもので、今其處に居たかと思ふと、もう一里も前に行つて居るといふ有樣、若い者などがよく村の中央で邂逅して、石などを拋りつけて遣る事が幾度もある相だすが、中々一人や二人では敵はない。反對に眉間に石を叩き付けられて、傷を負つた者は幾人もある。それで此方が五人六人、十人と數が多くなると、屋根でも、樹でもする〳〵と攀上つて、丸で猫でゞもあるかのやうに森と言はず、田と言はず、川と言はず、直ちに遁げて身を隱して了ふ。それは實に驚くべき者ですァ』

此時、ふと、

『やあ！』

と言つて窓から入つて來た者があつた。見ると、それは微しい山縣行三郎君で、自分が來たといふ事

を今少し前に知らせて遣つたものだから、萬事を差措いて急いで遣つて來たのであつた。夏の夕は既に暮れて、夕暮の海の樣に晴れ渡つた大空には、星が降るやうに閃めいて居るが、十六日の月は稍遲く、今しも高社山の眞黑な姿の間から、其の最初の光を放たうとして、その先鋒とも稱すべき一帶の餘光を既に夜露の深い野に山に漲らして居た。四邊はしんとして、しつとりとして折々何とも形容の出來ない涼しい好い風が、がさ〳〵と前の玉蜀黍の大きな葉を動かすばかり、いつも聞えるといふ蟲の聲さへ今宵は何うしてか音を絕つた。でも、默つて、靜かに耳を欹てると、遠くでさら〳〵と流れて居る尾谷川の溪流の響が、何だか他界から來るある微妙な音樂でも聞くかのやうに、極めて微かに聞えて居る。

疎らな鎭守の森を透して、閃々する燈火の影が二つ三つ見え出した頃には、月が已にその美しい姿を高社山の黑い偉大なる姿の上に顯して居て、その流るゝやうな涼しい光は先づ第一に三峯の絕巓とも覺しきあたりの樹立の上を掠めて、それから山の陰に偏つて流るゝ尾谷の溪流には及ばず直ちに丘の麓の村を照し、それから鎭守の森の一端を明かに染めて、漸く自分等の前の蕎麥の畑に及んで居る。洋燈をさへ點けなければ、其光は我等の淸宴の座に充ちて居るに相違ないのである。

山縣が來たので、一座の話に花が咲いて、東京の話、學校の話、英語の話、詩の話、文學の話、それからそれへと更にその興は盡きようともせぬ。果ては、自分は興に堪へかねて、常々暗誦……してる長恨歌を極めて聲低く吟じ始めた。

『この良夜を如何んですナア』

と山縣はしみ〴〵感じたやうに言つた。

此時鎭守の森の陰あたりから、夜を戒める柝木の音がかち〳〵と聞えて、それが段々向うへ向うへと遠ざかつて行く。

『今夜の柝木番は誰だえ、君ぢや無かつたか』

と根本は山縣に訊ねた。

『私だつたけれど、……富山君が來たと謂ふから、松本君に賴んで、代つて貰つたんだす。その代り今夜十時から二時間ばかり忍びの方を勤めさせられるのだ』

『僕も二時から起される譯になつて居るんだが』と言つて、急に言葉を變へて、『それから、先程聞くと、晝間あの娘が喞筒の稽古を見て居たと言ふが、それア、本當かね』

『本當とも……總左衞門どんの家の角で、莞爾笑ひながら見てけつかるだ。餘り小癪に觸るつて言ふんで、何でも五六人許で、撲りに懸つた、風なもんだが、巧にその下を潛つて、狐のやうにひよん〳〵遁げて行つて了つたさうだ。……それから重右衞門も來て見物して居たぢやないか』

『重右衞門も』

『あの野郎、何處まで太いんだか、見物しながら、駐在所の山岡に喧嘩見たやうな事を吹掛けて居た

つけ。何んだ、この藤田重右衞門が駐在所の巡査なんか恐れやしねえ。何んだ村の奴等ア、喞筒なんて、騷ぎやがつて、それよりア、この重右衞門に、お酒でも上げた方が餘程效能があるんだ、ツて、大きな聲で威嚇して居やがつたつけ。何でも酒を餘程飲んで居た風だつた』

『誰が酒を飲ましたのか知らん』

『誰がツて……野郎、又威嚇文句で、又兵衞（酒屋の主人）の許へ行つて、酒の五合も喰らつて來たんだ』

『困り者だナア』

と根本は心から獨語いた。

『それから、言ふのを忘れたが……先程此處に來る時、あの森の傍で、がさ〳〵音が爲るから何かと思つて、よく見ると、あの娘つ子め、何かまご〳〵搜して居る。此奴怪しいと思つたから何を爲てるんだ！　と態と大い聲を懸けて遣つた。すると、猫のやうな眼で、ぎよろツと僕を見て、そしてがさ〳〵と奥の方に身を隱して了つた。宛で獸に些とも違はない！……それから、私は會議所に行つて、これこれだから、注意して呉れろと言つて來た』

自分は二人の會話を聞きながら、山中の平和といふ事と、人生の巴渦といふ事を取留もなく考へて居た。月は漸次高くなつて、水の如き光は旣に夜の空に名殘なく充ち渡つて、地上に置き餘つた露は煌々

とさも美しく閃めいて居る。さらぬだに寂寞たる山中の村はいよ〳〵しんとして了つて、蟲の音と、風の聲と、水の流るゝ調べの外には更に何の物音も爲ぬ。

一時間程經つた。

すると不意に、この音も無くしんとした天地を破つて、銅鑼を叩いたなら、かういふ厭な音が爲るであらうと思はれる間の抜けた、しかも急な鐘の亂打の響！

二人は愕然とした。

『又遣付けた！』

と忌々しさうに叫んで、根本の父は一散に駈けて行つた。

『粂さんの家だァ、粂さんの家だァ』

と、誰か向うの畔を走りながら叫ぶ者がある。山縣はちらと見たが、『あ、僕の家らしい！』と叫んで、そして跳足の儘、慌てゝ飛出した。

根本も續いて飛出した。

見ると、月の光に黑く出て居る鎭守の森の隱から、やゝ白けた一道の烟が蜃氣樓のやうに勢よく立のぼつて、其中から紅い火が長い舌を吐いて、家の燃える音がぱち〳〵と凄じく聞える。山際の寺の鐘も激いて烈しく鳴り始めた。

一散に自分も駈出した。

七

田の畔を越えて、丘の上を拔けて、谷川の流を横切つて、前から、後から、右から左から、其方向に向つて走り行く人の群、それが丁度大海に集るごとく、鎭守の森の隱の路へと進んで來るので、平生ならば人も滅多に來ない鎭守の森の裏山は全く人の影を以て塡められて了つた。自分は駈出す事は駈出したが、今日來たばかりで道の案內も好く知らぬ身の、餘り飛出し過て思ひも懸けぬ災難に逢つてはならぬと思つたから、其儘少し離れた、小高いところに身を寄せて、無念ながら、手を束ねて、友の家の燒けるのをぢつと見て居た。

眼前に廣げられた一場の光景！　今燃えて居るのは丁度鎭守の森の東表に向つた、大きな家で、火は旣にその屋根に及んでゐるけれど、まだすつかり燃え出したといふ程では無く、半分燃え懸けた窓からは、燻つた黑い色の烟がもく〳〵と凄じく迸り出でゝ、それがすつかり火に成つたならば下の二軒の家屋は勿論、前の白壁の土藏も危くはありはせぬかと思はれるばかりであつた。けれど消防組はまだ一向見えぬ樣子で、晝間盛んに稽古して居たその新調の喞筒も、未だ其現場に駈け付けては居らなかつた。暫時すると、燻つて居た火は恐ろしく凄じい勢で、ぱつと屋根の上に燃え上る……と……四邊が急に眞

晝のやうに、明くなつて、其處等に立つて居る人の影、辛うじて運び出した二三の家具、其他いろ〳〵の悲慘な光景が、極めて明かに顯はれて見える。火は既に全屋に及んで、その火の子の高く騰るさまの凄じさと言つたら無い。幸ひに風が無いので、火勢は左程四方には蔓延せぬけれど、下の家の危さは、見て居ても、殆ど冷汗が出るばかりである。

『喞筒！』

と叫ぶ聲。

『おい、喞筒は何を爲て居るだァーい』

と長く曳いて叫ぶ聲。

けれど、本當に何うしたのか、喞筒はまだ遣つて來るやうな樣子も見えぬ。屋根の燒落つる度に、美しく火花を散した火の子が高く上つて、やゝ風を得た火勢は、今度は、今迄と違つて土藏の方へと片靡きがして來た。土藏の上には五六人ばかり人が上つて頻りに拒いで居た樣子だつたが、これに面喰つてか、一人〳〵下りて、今は一つの黑い影を止めなくなつて了つた。

『熱くて堪らねえ』

『まご〳〵して居ると、燒死んで了ふァ』

『何うしやがつたんだ。一體、喞筒は？　氣が利かねえ奴等でねえか』

と土藏から下りて來た人の會話らしい聲がすぐ自分の脚下に聞える。

と、思ふと、向うの低い窪地に簇々と十五六人許の人數が顯はれて、其處に辛うじて運んで來たらしいのは、晝間見たその新調の喞筒である。

やがて、火光に向つて一道の水が烈しく迸出したのを自分は認めた。

『喞筒確かり頼むぞい！』

『確かり遣れ』

『喞筒！』

と彼方此方から聲が懸る。

で、その喞筒の水の方向は或は右に、或は左に、多くは正鵠を得なかつたにも拘らず、兎に角多量の水がその方面に向つて灑がれたのと、幸ひ風があまり無かつたのとで、下なる低い家屋にも、前なる高い土藏にもその火を移す事なしに、首尾よく鎭火したのである。

それが丁度十時二十分。

疲れたから、歸つて、寢ようかとも思つたが、火事の後の空はいよ〳〵澄んで、山中の月の光の美しさは、此世のものとは思はれぬばかりであるから、少し溪流の畔でも歩いて見ようと、其儘燒跡をくるりと廻つて、柴の垣の續いて居る細い道を靜かに村の方へと出た。

村へ出て見ると、一軒として大騒を遣つて居らぬ家は無く、鎭火と聞いて孰れも胸を安めたやうなものゝ、かう毎晩の樣に火事があつては、とても安閑として生活して居れぬといふそはそはした不安の情が村一體に滿ち渡つて、家々の角には、婦(をんな)やら、老人やらが、寄つて、集つて、いろ〳〵姦しく談り合つて居る。

『本當にかう毎晩のやうに火事があつては、緩くり寢ても居られねえだ。本當に早く何うかして貰はねえでは……』

『駐在所ぢや、一體何を爲て居るんだか、はァ困つた事だ』

前の老人らしい聲で、

『駐在所で、始末が出來ねえだら、長野へつゝ走つて、何うかして貰ふが好いし、長野でも何うも出來ねえけりや、仕方が無えから、村の顏役が集つて、千曲川へでも投込んで了ふが好いだ』

『本當に左樣でも爲て貰はねいぢや……』

猶少し行くと、

『まご〳〵してると、己が家もつん燃されて了ふかも知れねえだ。本當にまァ、何うしたら好い事だか』

『困つた事だ』

とさも困つたといふやうな調子。

聞流して又少し歩いた。

『重右衞門がこんな騒動を打始めようとは夢にも思ひ懸けなかつたゞ。あれの幼い頃はお互にまだ記憶えて居るだが、そんなに惡い餓鬼でも無かつたゞが……』

かう言つたのは年の頃大凡六十五六の皺くちやの老婆であつた。それに向つて立つて居るのもこれも同じく其年輩らしい老婆の姿で、今しも月の光にさも感に堪へぬといふ顏色を爲たが、前の老婆の言葉を受けて、『本當でけすよ。重右衞門は、妾の遠い親類筋だで、それでかう言ふのではごんせぬが、何アに、あれでも旨くさへ育てれや、こんな惡黨にや成りや仕ないんだす。一體祖父樣が惡かつたゞす。餘り可愛がり過ぎたもんだで……』

『だから、子供を育てるのも、容易には出來ねえだ』

と他の老婆は言葉を合せた。

自分は其前をも行過ぎた。

すると、道の角に居酒屋らしいものがあつて、其處には洋燈が明るく點いて居るが、中には七八人の村の若者が酒を飲んで、頻りに大きい聲を立てゝ居る。

立留つて聞くと、

『重右衛門は火事の中何處に行つて居たッて？』

『奴か、奴ァ、直き山縣さんの下の家に行つて、火事見舞に來たとか、何とか言つて、酒の馳走になつてけつかつた。あの位圖太い奴ァ無いだ』

『さういふ時、思ふさま、酒食はしてぐつと遣つて仕舞へば好いんだ』

『本當にそれが一番早道だァ、と我ァ、いつでも言ふんだけんど、まさか、それも出來ねえと見えてそれを遣つて呉れる人が無えだ』

『忌々しい奴だナァ』

と其中の一人が叫んだ。

自分は歩き出した。路が其處から川の方に曲つて居るので、それについて左に曲り、猶半町ほど辿つて行くと、もう其處は尾谷川の崖で、石に激する水聲が、今迄種々な惡聲を聞いた自分の耳に、殆んど天上の音樂の如く聞える。月はもう高くなつたので、溪流の半面はその美しい光に明かに輝いて居るが、向うに偏つた半面には、まだ容易に其光が到着しさうにも見えぬ。自分は崖に凭つて、そして今夜の出來事を考へた。友の言葉やら、村の評判やらから綜合して見ると、この事件の中心に爲つて居る重右衛門といふ男は確かに自暴自棄に陷つて居るに相違ないと自分は思つた。けれど何うして渠はその自暴自棄の暗い境に陷つたのであらうか。先程の老婆の言ふ所によれば、祖父様が悪いのだ、あまり可愛がり

過ぎたから、それで彼樣な風に成つたのだと言ふけれど、單に愛情の過度といふのみで、それで人間が己の故郷の家屋を燒くといふ程の烈しい暗黑の境に陷るであらうか。殊に此村には一種の冒險の思想が滿ち渡つて居て、もし單に故郷に容れられぬといふばかりならば、根本の父のやうに、又は鹽町の湯屋の主のやうに、憤を發して他郷に出て、それで名譽を恢復した例は幾許もある。であるのに、それを敢て爲ようとも爲ず、かうして、故郷の人に反抗して居るといふのは、其處に何か理由が無くてはならぬ。その理由は先天的性質か、それとも境遇から起つた事か。

種々に空想を逞うしたが、未だ其人をさへ見た事の無い身の、完全にそれを斷定することが何うして出來よう、遂に思切つて、そして歸宅すべく家路に就いた。路は晝間小僮に案内して貰つて知つて居るから、別段甚しく迷ひもせずに、やがて綠樹の鬱蒼と生ひ茂つた、月の光の滿足にさし透らぬ、少しく小暗い坂道へとかゝつて來た。村の方ではまだ騷いで居ると見えて、折々人聲は聞えるけれど、此の四邊はひつそりと沈まり返つて、木の葉の戰ぐ音すら聞えぬ。自分は月の光の地上に織り出した樹の影を踏みながら、坂の中段に構へられてある一軒の農家の方へと只無意味に近づいて行つた。

すると、その家の垣根の前に小さな人の影があつて、低頭になつて、頻りに何か爲て居るではないか。勿論家の蔭であるから、それとは分明は解らぬが、その影によつて判斷すると、それは確かに大人で無いといふ事がよく解る。自分は立留つた。そして樹の蔭に身を潛めて、暫しその爲樣を見て居た。

ぱッとマッチを擦る音！

同時に、

『誰だ！』

と叫んで自分は走り寄つた。けれどその敏捷なる、とても人間業とも思はれぬばかりに、走寄る自分の袖の下をすり抜けて、雷光の如く傍の森の中に身を沒して了つた。跡には石油を灑いだ材料に火が移つて盛に燃え出した。

『火事だ、火事だァ』

と自分は聲を限りに叫んだ。

八

藤田重右衛門と言ふのは、昔は村でも却々の家柄で祖父の代までは田の十町も所有して、小作人の七八人も遣つた事のある身分だといふことである。家は丁度尾谷川に臨んだ一帶の平地にあつて、樫の疎らな竝樹がぐるりと其の周圍を圍んで居る奥に、一棟の母屋、土藏、物置と、普請も尋常よりは堅く出來て居て、村に何か事のある時には、その祖父といふ人は必ず總代か世話人に選ばれるといふ程の名望家であつた。現に根本三之助の亂暴を勸いた頃にも、その村の相談役で、千曲川に投込んで了へと決議した人の一人であつたといふ。性質の穩かな言葉數の少ない、慈愛心の深い人で、殊に學問――と謂ふ程でも無いが、御家流の字が村にも匹敵するものが無い程上手で他村への交渉、飯山藩の武士への文通などは皆この人に頼んで書いて貰ふのが殆ど例になつて居たといふ事である。この人は千曲川の對岸の大俠といふ處から、妻を娶つたが、この妻といふ人も至極好人物で、貧乏者にはよく米を遣つたり、金錢を施したりして、年が老つてからは、寺參りをのみ課業として、全く後生を願ふといふ念より外に他は無かつた。であるのに、僅か一代を隔てゝ、何うして、こんな不幸がその藤田一家を襲つたであらうか。何うしてその祖父祖母の孫に今の重右衛門のやうな、亂暴無慚の人間が出たであらうか。

その優しい正しい祖父祖母の間に、假令女でも好いから、まことの血統を帶びた子といふ者が有つたなら、決してこんな事は無かつたらうとは、村でも心ある者の常に口に言ふ所であるが、不幸にもその祖父祖母の間には一人の子供も無かつたので、藤田の系統を繼がしむる爲めに、二人は他の家から養子を爲なければならなかつた。今の重右衛門の父と言ふのは、芋澤のさる大盡の次男で、母は村の杉坂正五郎といふものゝ三女である。何方も左程惡い人間と言ふではないが、否、現に今も子息の事を苦にして、村の者に顏を合せるのも恥しいと山の中に隱れて出て來ぬといふやうな寧ろ正直な人間ではあるが、さりとて又、祖父祖母のやうな卓れて美しい性質は夫婦とも露ばかりも持つて居らなかつたのだ。母方の伯父といふ人は人殺をして斬罪に處せられたといふ惡い歷史も持つて居るのであつた。で、この夫婦養

子の間に間もなく出來たのが、今の重右衛門。子の無い處の孫であるから、祖父祖母の寵愛は一方ではなく、一にも孫、二にも孫と疊にも置かぬほどにちやほやして、その寵愛する樣は、餘所目にも可笑しい程であつたといふ。處が、この最愛の孫に一つ悲むべき事がある。それは生れながらにして、腸の一部が睾丸に下りて居る事で、何うかしてこの大睾丸を治して遣る方法は無いかと、長野まで態々出掛けていろ〳〵の醫師にも掛けて見たけれど、まだ其頃は醫術も開けて居らぬ時代の事とて、一時は腸に收まつて居ても、又何かの拍子で、忽地元に復して了ふので、いくら可愛相に思つても、何う爲る事も出來なかつた。

これが又一層不便を增すの料となつて、孫や孫やと、その祖父祖母の寵愛は益太甚しく、四歲五歲六歲は、夢のやうに掌の中に過ぎて、段々その性質があらはれて來た。けれど、子供の時分には、只非常に意地の强いといふばかりで、別段これと言つて他の童に異つたところも無かつたといふ事だが、それでも今の老人の中には、重右衛門の子供にも似合ぬ、茫然したやうな、しつかりしたやうな、要領を得ない處があるのを記憶して居て、何うもあの子は昔から變つて居ると思つたと言ふ者もある。が、概して他の童にさしたる相違が無かつたといふのが、一般の評であつた。山縣の總領の兄などはその幼ない頃の遊び夥伴で、よく一緒に蜻蛉を交ませに行つたり、山葡萄を採りに行つたり爲た事があるといふが、今でも、一番記憶に殘つて居らるのは、鎭守の境內で鳥事を爲る時、重右衛門は睾丸

が大いものだから、いつも十分に駈る事が出來ず、始終中鬼にばかりなつて居たといふ事と、山茱萸を採りに三峯に行つた時、その大睾丸を蜂に食はれて、家に歸るまで泣き續けて居たといふ事と、今一つよく大睾丸を材料にして、いろ〳〵混名を付けたり、惡口を言つたり爲るものだから、終にはそれを言ひ始めると、厭な顏をして、折角樂しけに遊んで居たのも直ぐに止めて歸つて了ふやうになつたといふ事位のものであるさうな。けれど其の先天的不具がかれの一生の上、非常に悲劇の材料と爲つたのは事實で、人間と生れて、これほど不幸福なものはあるまい。それから愛情の過度、これも確かにかれの今日の境遇に陷つた一つの大なる原因で、大きくなる迄、孫や、孫やとやさしい祖父にちやほやされて、一時村の遊び夥伴の中に、重右衛門と名を呼ぶ者はなく、孫や孫やで通つたなども、かれの悲劇を思ふ人の有力なる材料になるに相違ない。

月日は流るゝ如く過ぎて、早くも渠は十七の若者となつた。其年の春、祖母は老病で死んで了つたが、此年ほど藤田家に取つて運の惡い年は無かつたので、其初夏には父親が今年こそはと見當を付けて、連年の養蠶の失敗を恢復しようと、非常に手を擴げて養つた蠶が、氣候の工合ですつかり外れて、一時に田地の半分ほども人手に渡して了ふといふ始末。かてゝ加へて、妻の持病の子宮が再發して、枕も上らず臥せつて居ると、父親は又父親で、失敗の自暴を醫さん爲め、長野の遊廓にありもせぬ金を工面して、五日も六日も流連して歸らぬので、年を老つた、人の好い七十近い祖父が、獨りでそれを心配

して、孫や、孫やと頻りに重右衛門ばかりを力にして、何うか貴樣は、父親のやうに意氣地無しには成つて呉れるな、祖父の代の田地を何うか元のやうに恢復してくれと、殆ど口癖のやうに言つて居た。

御存じでは御座るまいが、村には若者の遊び場所と言ふやうなものがあつて（自分は根本行輔の口からこの物語を聞いて居るので）晝間の職業を終つて夕飯を濟すと、いつも其處に行つて、娘の子の話やら、喧嘩の話やら、賭博の話やら、いろ〳〵くだらぬ話を爲て、傍ら物を食つたり、酒を飲んだりする處がある。今では學校が出來て、教育の大切な事が誰の頭腦にも入つて來たから、さういふ下らぬ遊を爲るものも少く成つたけれど、まだ私等の頃までは、隨分それが盛んで、やれ平右衛門の二番娘は容色が好いの、やれ總助の處の末の娘が段々色氣が付いて來たのと下らぬ噂を爲るばかりならまだ好いが、若者と若者との間にその娘に就いての鞘當が始まる、口論が始まる、喧嘩が始まる、皿が飛ぶ、德利が破れるといふ大活劇を演ずることも度度で、それは隨分弊が多かつた。殊に其遊び場所の最も惡い弊と言ふのは、その若者の群の中にも自から勢力の有るものと、無いものとの區別があつて、其勢力のある者が、まだ十六七の若い青年を面白半分に惡いところに誘つて行く、これが第一の弊だと思ふ。

「私なども經驗があるが、散々村の遊び場所で騷ぎ散して、さてそれから其處に集つて居る若者の總ての懷中を改めて、これなれば澤山となると、もう大分夜が更け渡つて居るにも拘らず、其處から三里もある湯田中の遊廓へと押懸けて行く。其一群の中には、他處今夜が始めて……といふ初陣の者が一人は

居るので、それを煽てたり、それを戲つたり、散々翻弄しながら歩いて行くのが何よりも樂みに其頃は思つて居る。そして又、村の若者の親なども、これはもう公然止むを得ざる事と默許して居る、『家の悴もはァ、色氣が附いて來ただで、近い中に湯田中に遣らずばなるめい、お前方附いて居て、間違の無いやうに遊ばして呉らつしやれ』とその兄分の若い衆に頼むものさへある。兎に角、村の若い者で、湯田中に遊びに行かぬ者は一人も無く、又初めての翌朝、兄分の者に昨夜の一伍一什を無理に話させられて、顏を赤く爲ないものは一人も無い。

重右衛門を始めて湯田中に連れて行つたのは、勝五郎といふ其頃有名な兄分で、今では失敗して行方知れずになつて居るが、それがよく重右衛門の初陣の夜の事を得意になつて人に話した。

『重右め、不具だもんだで、姫つ子が何うしても承知しねえ、二夜、三夜、五夜ほど續けて行つて、姫つ子を幾人も變へて見たが、何奴も、此奴も、厭だァつてぬかして、言ふ事を聞かねえだ。朝になつて、あの田中の堤の上を茫然歸つて來ると、重右め、いつも浮かぬ顏をして待つて居る。昨夜は何うだつたつて……聞くと、頭ァ振つて駄目だァと言ふ。それが餘り幾度も續くので、私も、はァ、終には氣の毒になつて、重右だッて、人間だァ。不具に生れたのは、自分が惡いのぢやねえ。それだのに、その不具の爲めに、女を知る事が出來ねえとあつては、これァ氣の毒だァ。一つ肌を拔いで世話をして遣らうと思つて、それから私の知つて居る女郎屋の嚊樣に行つてこれ〳〵だッて話して遣つたゞ。すると、流

石は商賣人だで、譯なく承知して吳れて、重右め、其處に行つて泊る事に爲つたゞ。明日の朝、何んな顏をして居るかと思つたら、奴め、莞爾(にこ)と笑つて居やがる。背中を一つ喰はせて遣ると、いひ〳〵〳〵と笑やがつたが、其笑ひ樣つて言つたら、そりや形容にも話にも出來ねえだ。本當に、私も、隨分人を湯田中に連れて行つたが、重右の奴ぐらゐ、手數の懸つたのは無え』

と高く笑つた。

『それにしても、考へると、可笑くつてならねえだよ。あの大きい睾丸を抱へてよ、それで姫ッ子を自由に爲ようつて言ふんだから、こいつは却々骨が折れるあ！』

と言ふのが例だ。

で、其からといふものは、重右衞門は好く湯田中に出懸けて行つたが、金を費ふ割に餘りちやほやされないので、つねに悒々として樂しまなかつたといふ事である。其中には段々家は失敗に失敗を重ねて、祖父が一人眞面目に心配して居るけれど、さてそれを何うする事も出來ず、田地は益々人手に渡つて、祖父の死んだ時（それは丁度重右衞門が二十二の時であつた）にはもう田畑合せて一町歩位しか無かつたとの話だ。ことに、その祖父の死ぬ時に一つの悲しい話がある。それは、其頃重右衞門は湯田中に深く陷つて居る女があつたとかで、家の衰へて行くのにも頓着せず、米を賣つた代價とか、蠶を賣つた金とかありさへすれば、五兩なり十兩なりそれを殘らず引攫つて飛出して、四日、五日、その金の有

らん限り、流連して更に家に歸らうとも爲なかつた。父親と母親とは重右衞門とは始から仲が惡いので、商賣を爲るとか言つて、其頃長野へ出て居つたから、家には只死に瀕した祖父一人。その祖父は曾て孫を此上なく寵愛して、凡そ祖父の孫に對する愛は、遺憾なく盡して居つたにも拘らず、その死の床には侍つて居るものが一人も無いとは！

二日程前から病に罹つて、老人はその腰の曲つた姿を家の外に顯はさなかつたが、其三日目の晩に、あまり家の中がしんとして居ると言ふので、隣の者が行つて見ると、老人は行火に凭り懸つたまゝ、圓くなつて打伏して居る。

『爺樣？　何うだね』

と聲を懸けても、返事が無い。

『爺樣！』

と再び呼んでも、猶返事を爲ようとも爲ない。これは不思議だと怪んで、急いで傍に行つて見ると、體がぐたりとして水洟を出したまゝ、早既に締(しめ)が切れて居る。驚いて、これを村の世話役に報告する、湯田中の重右衞門に使を出す、と、重右衞門は遊廓の二階で、大睾丸を抱へて大騷を遣つて居る最中だつたさうで。祖父が死んだといふ悲むべき報知を聞いても、更に涙一つ滴さうでもなく、『死んで了つたものは仕方が無え、明日歸つて、緩り葬禮を出して遣るから、もう歸つて吳れても好い』との無情な言

草には、使の者も殆ど呆れ返つたとの事だ。

兎に角重右衞門は此頃からそろ〳〵評判が惡くなつたので、その祖父の孫に對する愛を知つて居る人は、他村の者までも、重右衞門の最期の必ず好くないといふ事を私語き合つたのである。

祖父が死んだので、父親母親は一先村へ歸つて、少時其家に住んで居た。が、この親子の間柄といふものは、祖父が餘り過度に愛した故でもあらうが、それは驚くばかり冷かで、何かと言つては、直き親子で衝突して、撲り合ひを始める。中裁に入ると、その中裁に入つた者まで撲り飛ばして、傷を負はせるといふ有樣なので、後には誰も相手に爲る者が無くなつて了つた。で、この親と子の間に少なからざる活鬪が演じられたが、重右衞門は體格が大きく、馬鹿力があつて、其上意地が非常に强く、酒を飲むと、殆ど親子の見さかひも無くなつて了ふものだから、流石の親達も終には呆れ返つて、こんな子息の傍には居られぬと、一年許して又長野へ出て行つた。

これからが重右衞門の罪惡史である。祖父は歿くなる、親は追出す、もう誰一人その我儘を抑へるものが無くなつたので、初めの中は自分の家の財産を抵當に、彼方此方から金を工面して、猶その放蕩を續けて居つた。けれど重右衞門とて、宛きり意識を失つた馬鹿者でも無いから、滿更その自分の一生に就いて思慮を費やさぬ事も無いので、時にはいろ〳〵その將來の事を苦にして、自分の家の沒落をも何うかして恢復したいと思つた事もあつたらしい。其證據には、それから大凡一年ばかり經つと、兎で人

間が變つたかと思はれるやうに、もうふつゝりと女郎買をやめて小作人まかせに荒れて居た田地を耕し、人の爲めに馬を曳いて賃銀を取り、養蠶の手傳をして日當を稼ぐなど、それは村の人が一時眼を欹てる程の勤勉なる勞働者と成つた。

其頃である。稍その信用が恢復しようとした頃である。村に世話好の男があつて、重右衞門も此頃では餘程身持も修まつて來たやうだし、あゝ勤勉に勞働する處を見ると、將來にも左程希望が無いとも云へぬ。一つ相應な嫁を周旋して、一層身が堅まる樣に爲て遣らうではないかといふ者があつたが、それに贊成する者も隨分あつて、彼れかこれかといよ〳〵相應の嫁を探して遣る事と爲つた。

其候補者には誰が成つたらう。

その頃、村の盡頭に老婆と一緒に駄菓子の見世を出して、子供等を相手に、龜の子燒などを商つて、辛うじて其日の生活を立てゝ行く女があつた。生れは何でも越後の者だといふ事だが、其處に住んだのは、七八年前の事で、始めはその父親らしい腰の曲つた顏の燻つた汚らしい爺樣も居つた相だが、それは間もなく死んで、今では母の老婆と二人暮し。村の若い者などが時々遊びに行く事があつても、不器量で、無愛想で、おまけに口が少し訥ると來て居るから、誰も物好に手を出すものもなく、二十五歲の今日まで、男といふものは猫より外に抱いた事も無かつた。けれど其性質は惡くはない相で、子供などには却々優しくする樣子であるから、何うだ重右衞門、姿色よりも心と言ふ譬もある、あれを貰ふ氣は

無いかと勸めた。

重右衞門も流石は二の足を踏んだに相違ないが、餘りに人から執念く勸めらるゝので、それでは何うか好いやうにして下され、私等は、はア、どうせ不具者でごすでと言つて承知して、それより一月ならざるに、重右衞門の寂しい家宅にはをり〳〵女の笑ふ聲が聞える樣になつた。

「村の人はこれで重右衞門の身が堅まつたと思つて喜んだのである。けれどそれは少くとも重右衞門のやうな性格と重右衞門のやうな先天的不備なところがある人間には間違つた皮相な觀察であつた。一體重右衞門といふ男は負け嫌ひの、横着の、圖々しいところがあつて、そして其上に烈しい烈しい熱情を有つて居る。この熱情が旨く用ひられると、却々大した事業をも爲るし、人の眼を驚かす程の偉功をも建てる事が出來るのだけれど、惜しい事には、この男にはこれを行ふ力が缺けて居る。先天的に缺けて居る。この男には『自分は不具者、自分は普通の人間と肩を竝べることが出來ぬ不具もの』といふ考が、小兒の中からその頭腦に沁み込んで居て、何かすぐれた事でも爲ようと思ふと、直ぐその悲しむべき考が腦を衝いて上つて來る。そしてこの不具者といふ消極的思想が言ふべからざる不快の念をその熱情の唯中に、丁度氷でもあるかのやうに、極て烈しく打込んで行く。この不快の念、これが起るほど、かれには辛いことはなく、又これが起るほど、かれには忌々しい事はない。何故自分は不具に生れたか、何故自分は他人と同じ天分を受ける事が出來なかつたか。

親が憎い、己を不具に生み付けた親が憎い。となると、自分の全身には殆ど火焔を帶びた不動尊も啻ならざる、憎惡、怨恨、嫉妬などの徹骨の苦しい情が、寸時もぢつとして居られぬほどに簇つて來る、口惜くつて〳〵、忌々しくつて〳〵、出來るものならば、この天地を引裂いて、この世の中を闇にして、それで、自分も眞逆樣にその暗い深い穴の中に落ちて行つたなら、何んなに心地が快いだらうといふやうな淺ましい心が起る。

かういふ時には、譬へ一錢の銅貨を持つて居らないでも、酒を飲まなければ、何うしても腹の中の蟲が承知しない。仕方が無いから、居酒屋に飛んで行つて一杯飲む、二杯飲む。あとは一升二升。

重右衞門の爲めには、女房が出來たのは餘り好い事では無かつたが、もし二人の間に早く子供が生れたら、或は重右衞門のこの腹の蟲を全く癒し得たかも知れぬ。けれど不幸にも一年の間に子をつくることが出來なかつた二人の仲は、次第に殺伐に成り、亂暴に成り無遠慮になつて、そして、その擧句には、泣聲、尖聲を出しての大立廻。それも度重なつては、犬の喧嘩と振向いて見るものなく、女房の顏には殆ど生傷が絶えぬといふやうな寧ろ淺ましい境遇に陷つて行つた。

その結果として、折角身持が治り懸けた重右衞門が再び遊廓に足を踏み入れるやうに成り、少しく手を下し始めた荒廢した田地の開墾が全く委棄せられて了つたのも、これも餘儀ない次第であらう。

倘し、この危機に處して、一家の女房たるものが、少しく悧怜であつたならば、狂瀾を既に倒るゝに

飜し、危難を未だ來らざるに拒ぐは、さして難い事では無いのである。が、天は不幸なるこの重右衛門にこの纔かなる恩惠をすら惜んで與へなかつたので、尋常よりも尙數等愚劣なるかれの妻は、この危機に際して、あらう事か、不貞腐にも、夫の留守を幸ひに、山に住む獵師のあらくれ男と密通した。

そして、それの露顯した時、

『だつて、その位は當り前だァ。お前さァばか、勝手な眞似して、己ら咎められる積はねえだ』

とほざいた。

重右衛門は怒つたの、怒らないのッて、

『何だ、この女！』

と一喝して、いきなり、その髪を執つて、引摺倒し、拳の痛くなるほど、滅茶苦茶に撲つた。そして、半死半生になつた女房を尻目に掛けて、其儘湯田中へと飛んで行つた。

そして、酒……酒……酒。

で、これからと言ふものは、重右衛門は全く身を持崩して了つたので、女郎買を爲るばかりではない、惡い山の獵師と懇意に成つて、賭博を打つ、喧嘩を爲る、茶屋女を買ふ、瞬く間にその殘つて居る田地をも悉く人手に渡して、猶其上に田地と家屋敷を抵當に、放蕩費を借りようとして居るのだが、誰もあんな無法者に金を貸して、抵當として家屋敷を押へた處が、餘で何んな苦情を持出さぬものでもな

いと、恐毛振つて相手に爲ぬので、そればかりは猶其後少時。かれの所有權ある不動產として殘つて居た。

ある時かういふ奇談がある。

かれはその三日前ばかりから、湯田中に流連して、いつもの馴染を買つて居たが、さて歸らうとして、それに拂ふべき金が無い。仕方が無いから、苦情やら忌味やらを言はれ〳〵、三里の山道を妓夫を引張つて遣つて來て見ると、家の道具はもう大方持出して叩き賣つて仕舞つたので、これと言つて金目なものは一つも無い。妓夫は怒るし、仕末に困つて、何うしようと思つて居ると、裏の馬小屋で、主人が居ないので、三日間食はずに、腹を減して居つた、栗毛の二歲が、物音を聞き付けて、一聲高く嘶いた。

『ヤァ、まだ馬が居るァ』

と、言つて平氣でそれを曳出して、飯をも與へずに、妓夫に渡した。そして、彼はその馬を賣つた殘りの金を費ふべく、再び湯田中へと飛び出して行つたのである。

其事が誰言ふとなく村の者に傳つて、孫（祖父の口癖に言つた）が馬を引張つて來て、又馬を引張つて行かれたよと大評判の種となつた。

それから、三年。かれが到頭家屋敷を抵當に取られて、忌々しさの餘に、その家に火を放ち、露顯し

て長野の監獄に捕へらるゝ迄、其間の行爲は、多くは暗黑と罪惡とばかりで、少しも改善の面影を顯はさなかつたが、只一度……只一度次のやうな事があつた。

それは何でも其家屋の抵當に入つてから後の事だが、ある日かれは金を借ようと思つて、上鹽山の上尾貞七の家を訪ねた事があつた。この上尾貞七と謂ふのは、根本三之助などゝ同じく、一時は非常に逆境に沈淪して、村には殆ど身を措く事が出來ぬ程に成つた事のある男で、それから憤を發して、江戸へ出て、二十年の間に、何う世の荒波を泳いだか、一萬圓近くの資産を作つて歸つて來て、今では上鹽山第一の富豪と立てられる身分である。重右衞門が訪ねると、快く面會して、その用向の程を聞き、言ふがまゝに十五圓ばかりの金を貸し、さて眞面目な聲で、貞七が、

『實はお前さんの事は、兼ねて噂に聞いて知つて居つたが、生れた村といふものは、まことに狹いもので、とても其處に居ては、思ふやうな事は出來ない。私なども……覺えが有るが、村の人々に一度信用せられぬとなると、もう何んなに藻掻いても、とても其村では何うする事も出來なくなる。お前さんも隨分村では惡い者のやうに言はれるが、何うだね、一奮發する氣は無いか』

重右衞門は默つて居る。

『私なども……そりやア、隨分酷い眼に逢つた。親には見放される、兄弟には唾を吐き懸けられる、村の人にはてんから相手にされぬといふ始末で、夜逃の樣にして村を出て行つたが、其時の悲しかつた

事は今でも忘れない。あの倉澤の先の吹上の水の出て居る處があるが、あそこで、石に腰を懸けて、もうこれで村に歸つて來るか何うだかと思つた時は、情なくなつて涙が出て、いつそこゝで死んで了はうかとすら思つた程であつた。けれど……思返して、何うせ死ぬ位なら江戸に行つて死ぬのも同じだ、死んだ積りで、料簡を入れかへて働いて見よう……とてく〳〵と歩き出したが、それが私の運の開け始めで、それでまア、兎に角今の身分に爲つた……』

『私なんざア駄目でごす……』

と重右衞門は言つたが、其顏はおのづから垂れて、眼からは大きな涙がほろ〳〵と膝の上に落ちた。

『駄目な事があるものか。私などもお前さんの樣に、其時は駄目だと思つた。けれどその駄目が今日のやうな身分になる始となつたぢやがアせんか。何でも人間は氣を大きくしなければ好けない』

答の無いのに再び言葉を續いで、

『村の奴などは何とでも勝手に言はせて置くが好い。世の中は廣いものだから、何も村に居なければならねえと言ふのでもねえ、男と生れたからにや、東京にでも出て一旗擧げて來る樣で無けりや、話にも何にも爲らねえと言ふ者だ……』

重右衞門は殆ど情に堪へないといふ風で、潮の如く漲つて來る涙を辛うじて下唇を咬みつゝ押へて居た。

『本當でごいすよ、私は決して自分に覺えの無え事を言ふんぢやねえんだから、……本當に一つ奮發さつしやれ、屹度それや立身するに極つてるから』

『私は駄目でごす……』と涙の込み上げて來るのを押へて、『私ァ、とても貴郎の眞似は出來ねえでごす。一體、もうこんな體格でごすだで』

『そんな事はあるものか』と貞七は口では言つたが、成程それで十分に奮發する事も出來ないのかと思ふと、一層同情の念が加はつて、愈慰藉して遣らずに居られなくなつた。

『本當にそんな事は無い。世の中にはお前さんなどよりも數等利かぬ體で、立派な事業を爲た人はいくらもある。盲目で學者になつた塙檢校と言ふ人も居るし、跛足で大金持に爲つた大俣の惣七といふ男もある。お前さんの體位で、そんな弱い事を言つて居ては仕方がない。本當に一つ……遣つて見さつしやる氣は無えかね。私ァ、東京にも隨分知つてる人も居るだで、一生懸命に爲る積なら、いくらも世話は爲て遣るだが』

『難有い、さう仰有つて下さる人は貴郎ばかり。決して……決して』と重右衛門は言葉を涙につかへさせながら、『決して忘れない、この御厚恩は！　けれど私ァ、駄目でごす。體格さへかうでなければ、今までこんなにして村にまご〳〵して居るんぢや御座せんが……。私は、駄目でごす……』

と双涙をぼろ〳〵と落した。

これは貞七の後での話だが、實際その時は氣の毒に成つて、あんな弱い憐れむべき者を村では何故あのやうに虐待するであらう。元はと言へば氣ばかり有つて、體が自由にならぬから、それで彼樣な自暴自棄な眞似を爲るのであるのに……と心から同情を表さずには居られなかつたといふ事だ。實際、重右衛門だとて、人間だから、今の如な亂暴を働いても、元はその位のやさしい處があつたかも知れない。けれどその體の先天的不備がその根本の惡の幾分を形造つたと共にその性質も亦その罪惡の上に大なる影響を與へたに相違ないと、自分は友の話を聞きながら、つく〴〵心の中に思つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「此後の重右衛門の歴史は只々驚くべき罪惡ばかり、抵當に取られた自分の家が殘念だとて、火を放けて、獄に投ぜられ、六年經つて出て來たが、村の人の幾らか好くなつたらうと望を囑して居たのにも拘らず、相變らず無賴で、放蕩で、後悔を爲るどころか一層大膽に惡事を行つて、殆ど傍若無人といふ有樣であつた。其翌年、賭博現行犯で長野へ引かれ、一年ほどまた臭い飯を食ふ事になつたが、二度目に歸つて來た時は、もう村でも何うする事も出來ない程の惡漢に成り濟して、家も無いものだから今の堤下に乞食の住むやうな小屋を造つて、其處に氣の合つた惡黨ばかり寄せ集め、米が無くなると、何處の家にでもお構ひなしに、一升米を借して呉れ、二升米を借して呉れと、平氣な面して貰ひに行く。そして、少しでも厭な素振を見せると、それなら考へがあるから呉れなくても好いと威嚇すのが習。村方で

は又火でも放けられては……と思ふから、仕方なしに、言ふまゝに呉れて遣る。すると好い氣に爲つて、幅で、大風呂敷を携へて貰つて歩くといふ始末、殆ど村でも持餘した。それがまだ其中は好かつたが、ある時ふと其の感情を損ねてからと言ふものは、重右衞門大童になつて怒つて、『何だ、この重右衞門一人、村で養つて行けぬと謂ふのか。そんな吝くさい村なら、片端から燒拂つて了へ』

と醉客の如く大聲で怒鳴つて歩いた。

で、今回の放火騒動！

九

山縣の家の全燒したあくる日は、益々警戒に警戒を加へて、重右衞門の行爲は勿論、その娘ッ子の一擧一動、何處に行つた、彼處に行つたといふ事まで少しも注意を怠らなかつた。否、消防の人數を加へ、夜番の若者を增して、十五分毎に柝木と忍びとが代る〴〵必ず廻つて歩くといふ、これならば、何んな天魔でも容易に手を下す事が出來まいと思はれる許の警戒を加へて居てそれは中々一通の警戒ではないのであつた。であるのに、その嚴しい防禦線の間を何ふ巧に潛つてか、其夜の十時少し過ぎと云ふに、何か變な臭ひがすると思ふ間もなく、ふす〳〵と怪しい音がするので、まだ今燒たばかりの雨戸を繰つて見ると、『それはそも驚くまじき事か、火の雨が降るやうに滿面に吹き掛けて、すぐ下の家屋の窓から

は、黑く黃い烟と赤い長い火の影とが……

『火事だァ、火事だァ』

とこの世の終りと云はぬばかりの絶望の叫喚が凄じく聞えた。

自分は慌てゝ、跣足で庭に飛び出した。下の家とは僅か十間位しか離れて居らぬので、母屋では既に大騒を遣つて居る樣子で、やれ水を運べの、桶を持つて來いのと老主人が聲を限りに指揮する氣配が分明と手に取る如に聞える。自分もこの危急の場合に際して、何か手助になる事もと思つて兎に角母屋の方に廻つて見たが、元より不知案内の身の、何う爲る事も出來ぬので、寧ろ手足纏ひにならぬ方が得策と、其儘土藏の前の明地に引返して、只々その成行を傍觀して居た。

昨夜と均しく、月は水の如く大空に漂つて、山の影はくつきりと黑く、五六歩前の叢にはまだ蟲の鳴く音が我は顏に聞えて居る。その靜かな村落にもく〳〵と黑く黃い烟が立昇つて、ばら〳〵と木材の燃え出す音！　續いて、寺の鐘、半鐘の亂打、人の叫ぶ聲、人の走る跫音！

村はやがて鼎の沸くやうに騒ぎ出した。

一〇

母屋の大廣間で恐しく鋭い尖聲が爲たと思ふと、

『何だと……何と吐かした？　この藤田重右衛門に……』

と叫んだ者がある。

自分の傍に來て居た友は、

『重右衛門が來て居る！　自分で火を點けて置いて、それで知らん顏で、手傳酒を食つてるとは圖太いにも程がある』

と言つた。

火は幸にも根本の母屋には移らずに、下の小い家屋一軒で、兎に角首尾よく鎭火したので、手傳ひに來て呉れた村の人々、喞筒の水にずぶ濡れになつた村の若者、それから遠くから聞き付けて見舞に來て呉れた緣者などを引留めて、村の慣例の手傳酒を振舞つて居るところであるが、その十五疊の大廣間には順序次第もなく、荒くれた男がずらりと竝んで、親椀で酒を呷つて居るものもあれば、茶碗でぐびぐび遣つて居る者もある。さうかと思ふと、さも〳〵腹が空いて仕方が無いと言はぬばかりに一生懸命に飯を茶漬にして掻込んで居るもの、胡坐を掻いて烟草をすぱりすぱり遣つて御座るもの、自分は今少し前、一寸其席を覗いて見たが、それは〳〵何とも形容する事の出來ぬばかりの殺風景で、何だか鬼共の集り合つた席では無いかと疑はれるのであつた。いづれも火の母屋に移らぬ事を祝しては居るが、連夜の騷動に、夜は大分眠らぬ疲勞と、烈しく激昂した一種の殺氣とが加はつて、何の顏を見ても、不穩な

落著かぬ凄い色を帶びて居らぬものは一人も無かつた。

それが、自分が覗いてから、大方一時間にもなるのであるから、酒も次第にその一座に廻つたと覺しく、恐ろしく騷ぐ氣勢が其次の間に滿ち渡つた。

『來てるのかね？』

と自分は友の言葉を聞いて、すぐ訊ねた。

『來てるですとも……、奴ァ、これが樂みで、この手傳酒を飲むのが半分目的で火をつけるですァ』

暫くすると、

『何だと、この重右衛門が何うしたと……この重右衛門……が』

といふ恐ろしく尖つた叫聲が、その次の大廣間から聞える。

『先生……また醉つたナ』

と友は言つた。

次の間で爭ふ聲！

『何に、貴樣が火を放けると言つたんぢやねえ。貴樣が火を放けようと放けまいと、それにやちやんと、政府（おかみ）といふものがある。貴樣も一度は、これで、政府の厄介に爲つた事が有るぢやねえか』

かう言つたのは錆びのある太い聲である。

『何んだと、……己が政府の厄介に成らうが成るまいが、何も奴等の知つた事つちや無えだ。何が……この村の奴等……（少時途絶えて）この藤田重右衛門に手向ひするものは一人もあるめい。かう見えても、この藤田重右衛門は……』

と腕でも捲つたらしい。

『何も貴様が豪くねえと言ひやしねえだア、貴様のやうな豪い奴が、この村に居るから困るつて言ふんだ』

『何が困る……困るのは當り前だ。己がナ、この藤田重右衛門がナ、態々困るやうにして遣るんだ』

非常に醉つて居るものと見える。

『醉客（よつぱらひ）を相手にしたつて、仕方が無えから、よさつせい』

と留める聲がする。

暫時沈默。

『だが、重右衛門ナア、貴様も此村で生れた人間ぢや無えか、それだアに、此様に皆々に爪彈されて……惡い事べい爲て居て、それで寐覺が好いだか』

と言つたのは、前のとは違つて、稍老人らしい口吻。

『勝手に爪彈しやアがれ、この重右衛門様はア奴等（うな）のやうなものに相手に爲れねえでも……ねつから

困らねえだア……べら棒め、根本三之助などゝ威張りやアがつて元ア、賽錢箱から一文二文盗みやがつたぢやねえだか』

『撲つて了へ』

と傍から憤怒に堪へぬといふやうな血氣の若者の叫喚が聞えた。

『撲れ！　撲れ！』

『取占めて了へ』

と彼方此方から聲が懸る。

『何だ撲れ？　と。こいつは面白れえだ。この重右衛門を撲るものがあるなら、撲つて見ろ！』

と言ふと、ばら〳〵と人が撲ちに蒐つた樣な氣勢が爲たので、自分は友の留めるのを振り解いて、急いで次の間の、少し戸の明いて居る處へ行つて、そッと覗いた。いづれも其方にのみ氣を取られて居るから、自分の其處に行つたのに誰も氣の付く者は無い。自分の眼には先烟の籠つた、厭に蒸熱い空氣を透して、薄暗い古風な大洋燈の下に、一場の凄じい光景が幻影の如く映つたので、中央の柱の傍に座を占めて居る一人の中老爺に、今しも三人の若者が眼を瞋らし、拳を固めて勢猛に打つて蒐らうとして居るのを、傍の老人が頻りにこれを遮つて居るところであつた。この中老漢、身には殆ど斷々になつた白地の浴衣を着、髪を蓬のやうに振亂し、恐しい毛脛を頓着せずに露はして居るが、これが卽ち自分の始め

て見た藤田重右衛門で、その眼を瞋らした赤い顏には、まことに凄じい罪惡と自暴自棄との影が宿つて、其の半生の悲慘なる歷史の跡が一々その陰險な皺の中に織り込まれて居るやうに思はれる。自分は平生誰でも顏の中に其人の生涯が顯れて見えると信じて居る一人で、悲慘な歷史の織り込まれた顏を見る程、心を動かす事は無いのであるが、自分はこの重右衛門の顏ほど悲慘極まる顏を見た事は無いとすぐ思つた。稍老いた顏の、肉は太く落ちて、鋭い眼の光の中に無限の悲しい影を宿しながら、ぢつと今打ちに蒐らうとした若者の顏を睨んだ形狀は、丸で餓ゑた獸の人に飛蒐らうと氣構へて居るのと少しも變つた所は無い。

『醉客を相手にしたつて仕方が無えだ！　廢さつせい、廢さつせい！』

と老人は若者を抑へた。

『撲るとは、面白いだ、この藤田重右衛門を撲れるなら、撲つて見ろ、奴等の如な靑二才とは』

と果して腕を捲つた體を、くるりと其方へ廻した。

『構はんで置くと、好い氣に成るだア。此奴の爲めに、村中大騷を遣つて、夜も碌々寢られねえに、酒を食はせて、勝手な事を言はせて置くつて言ふ法は無えだ。駐在所で、意氣地が無くつて何うする事も出來ねえけりや、村で成敗するより仕方が無えだ。爺さん退かつせい、放さつせい』

と二十一二の體の肥つた、血氣の若者は、取られた袂を振放つて、いきなり、重右衛門の横面を烈し

く撲つた。

『此奴！』

と言つて、重右衛門は立上つたが、其儘その若者に武者振り付いた。若者は何のと金剛力を出したが、流石は若者の元氣に忽ち重右衛門は組伏せられ、火のごとき鐵拳は霰とばかりその面上頭上に落下するのであつた。

見兼ねて、老人が五六人寄つて來て、兎に角この組討は引分けられたが、重右衛門は鐵拳を食ひし身の、いつかなこの中裁を承知せず、よろ〳〵と身體をよろめかしながら、猶其相手に喰つて蒐らうとするので、相手の若者は一先其儘次の間へと追遣られた。

『おい、人を撲らせて、相手を引込ませるつて言ふ法は何處にあるだ。おい、こら相手を出せ、出さねえだか』

と重右衛門は烈しく咆哮した。

今出すから、まア一先坐んなさいと和められて、兎に角再び席に就いたが、前の酒を一息に呷つて、

『おい、出さねいだか』

と又叫んだ。

相手に爲るものが無いので、少時頭を低れて默つて居たが、ふと思出したやうに、

『おい出さんか。根本三之助！　三之助は居ないか』

と云つて、更に又、

『酒だ！　酒だ！　酒を出せ』

と大聲で怒鳴つた。

云ふが儘に、酒が運んで來られたので、今撲ぐられた憤怒は殆ど全く忘れたやうに、餘念なく酒を湯呑茶碗で呷り始めた。かうなつて、轉はずに置いては、始末にいけぬと誰も知つて居るので、世話役の一人が立上つて、

『重右衞門！　もう澤山だから、歸らうではねえか、餘り飲んでは體に毒だァで……』

と其傍に行つて。

『體に毒だと……』首をぐたりとして、『體に毒だァでも、あんでも好いだ。歸るなら、奴等歸れ。この藤田重右衞門は、これから、根本三之助と』

舌ももう廻らぬ樣子。

『まァ、話ァ、話で、後で澤山云ふが好いだ。こんなに意氣地なく醉つて居ながら、歸らねえとは、餘り押が强過ぎるぢやねえだか』

と世話役は、其儘兩手を引張つて、强ひてこの醉漢を立上らせようとした。けれど大磐石の如く腰を

据ゑた儘、更に體を動かさうとも爲ないので、仕方なく、傍の二三人に助勢させて、無理遣りに其席から引摺上げた。

『何爲やがる！』

と重右衞門は引摺られながら、後の男を蹴らうとした。が、夥しく醉つて居るので、足の力に緊りが無く、却つて自分が膳や椀の上に地響して撞と倒れた。

『おい、確りしろ』

と世話役は叫んで倒れたまゝ愈起きまじとする重右衞門を殆ど五人掛りにて辛くも抱上げ、猶ぐづぐづに理窟を云ひ懸くるにも頓着せずに、Xの字にその大廣間をよろめきながら、遂に戸外へ伴れ出した。

一室は俄かに水を打つたやうに、靜かになつた。今しも其一座の人の頭腦には、云ひ合はねど、いづれも同じ念が往來して居るので、あの重右衞門、あの亂暴な重右衞門さへ居なければ、村はとこしへに、平和に、財產、家屋も安全であるのに、あの重右衞門が居るばかりで、この村始まつて無いほどの今度の騷動。

いつそ……

と誰も皆思つたと覺しく、一座の人々は皆意味有り氣に眼を見合せた。

あゝこの一瞬！

自分はこの沈默の一座の中に明かに恐るべく忌むべく悲しむべき一種の暗潮の極めて急速に走りつゝあるのを感じたのである。

一座は再び眼を見合せた。

『それ！』

と大黑柱の後に坐つて居た世話役の一人が、急に顎で命令したと思ふと、大戸に近く座を占めた四五人の若者が、何事か非常なる事件でも起つたやうに、ばら〳〵と表へ一散に飛び出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

二十分後の光景。

自分は殆ど想像するに堪へぬのである。

諸君は御存じであらう。自分が始めてこの根本家を尋ねた時、細君が頻りに、鋤、鍬等を洗つて居た田池――其周圍には河骨、撫子などが美しくその婉らしい影を涵して居た纔か三尺四方に過ぎぬ田池の有つた事を。然るに其の田池の前には、今一群の人が黑く影をあつめて居て、その傍には根本家と記した高張提燈が、月に冴々しく滿面に照り渡つてるにも拘はらず、極めて朧げに立てられてあるが、自分はそれと聞いて、驚いて、其傍に駈付けて、その悲慘なる光景を見た時は、果して何んな感に撲たれたであらうか、諸君、其三尺四方の溝のやうな田池の中には、先刻大酔して人に抉けられて戸外へ出たか

の藤田重右衛門が、殆ど池の廣さ一杯に、髪を亂だし、顏を打伏して、丸で犬でも死んだやうになつて溺れて居るではないか。

『一體何うしたんです』

自分は激して訊ねた。

『何ァに、先生、えら醉泥たもんだで、遂、陷り込んだゝァ』

と其中の一人が答へた。

『何故揚げて遣らなかつた！』

と再び自分は問うた。

誰も答へるものがない。

けれどこれは訊ねる必要があるか。と自分は直ぐ思つたので、其儘押默つて、そつとその憐れな死骸に見入つた。月は明かに其田池を照して、溺れた人の髪の散亂せるあたりには、微かな漣が、きら〳〵と美しく其光に燦めいて居る。一間と離れぬ後の草叢には、鈴蟲やら、松蟲やらがこの良夜に、言ひ知らず樂しげなる好音を奏でゝ居る。人の世にはこんな悲慘な事があるとは、夢にも知らぬらしい山の黑い影！

『あゝ、これが、この重右衛門の最期か』

と再び思つた自分の胸には、何故か形容せられぬ悲しい同情の涙が鎧に立つ矢の蝟毛の如く簇々と烈

しく強く集つて來た。

で、自分は猶少時其池の畔を去らなかつた。

一一

『人間は完全に自然を發展すれば、必ずその最後は悲劇に終る。卽ち自然その者は到底現世の義理人情に觸着せずには終らぬ。されば自然その物は、遂にこの世に於て不自然と化したのか』

と自分は獨語した。

『六千年以來の歷史習慣。これが第二の自然を作るに於て、非常に有力である。社會はこの歷史を有するが爲めに、時によく自然を屈服し、よく自然を潤色する。けれど自然は果して六千年の歷史の前に永久に降伏し終るであらうか』

『或は謂ふかも知れぬ。これ自然の屈服にあらず、これ自然の改良であると。けれど人間は淺薄なる知識、薄弱なる意思とを以て、如何なるところにまで自然を改良し得たりとするか』

『神あり、理想あり、然れどもこれ皆自然より小なり。主義あり、空想あり、然れども皆自然より大ならず。何を以てかくいふと問ふ者には、自分は個人の先天的解剖をすゝめようと思ふ』

少時考へて後、

『重右衛門の最期ちつまりこれに歸するのではあるまいか。かれは自分の思ふ儘、自分の欲する儘、則ち性能の命令通りに一生を渡つて來た。もしかれが、先天的に自我一方の性質を持つて生れて來ず、又先天的にその不具の體格を持つて生れて來なかつたならば、それこそ好く長い間の人生の歷史と習慣とを守り得て、放恣なる自分の發展を人に示さなくても濟むだのであらうが、悲む可し、かれはこの世に生れながら、この世の歷史習慣と相容るゝ能はざる性格と體とを有つて居た』

『殊に、かれは自然の發展の最も多かるべき筈にして、しかも歷史習慣を太甚しく重んずる山中の村！　この故鄕を離るゝ事が出來ぬ運命を有して居た』

と思ふと、自分が東京に居て、山中の村の平和を思ひ、山中の境の自然を慕つたその愚かさが分明自分の腦裏に顯はれて來て、山は依然として太古水は依然として不朽、それに對して、人間は僅か六千年の短き間にいかにその自然の面影を失ひつゝあるかをつく〴〵嘆ぜずには居られなかつた。

『けれど……』

と少時して、

『けれど重右衛門に對する村人の最後の手段、これとて人間の所謂不正、不德、進んでは罪惡と稱すべきものゝ中に加へられぬ心地するは、果して何故であらう。自然……これも村人の心底から露骨にあらはれた自然の發展だからではあるまいか』

此時ゆくりなく自分の眼前に、その沈默した意味深い一座の光景が電光の如く顯れて消えた。續いて夜の光景、曉の光景、ことに、それと聞いて飛んで來た娘つ子の驚愕。

『父樣、嘸ぞ無念だつたべい。この仇ァ、己ァ、屹度取つて遣るだァから』

と怪しげなる聲を放つて、其死骸に取附いて泣いた一場の悲劇！

其鋭い聲が今も猶耳に聞える。

午後になつて、漸く長野から判事、檢事などが、警察官と一緒に遣つて來て臨檢したが、その溺死した田沼がいかにも狹く小さいので、いかに醉つたからて、こんな所で獨りで溺れるといふ譯は無い。これには何か原因があるであらうと、却々事情が難かしくなつて、其時、傍に居た二三人は、事に寄ると、長野まで出なければならぬかも知れぬといふ有樣。それにも拘らず溺死者の死體は外に怪しい箇處も無いので、其儘受取人として名告つて出たかの娘つ子に下渡された。

半日水中に浸けてあつたので、顏は水膨れに氣味惡くふくれ、眼は凄じく一處を見つめ、鼻洟は半開いた口に垂込み、だらりと大なる睾丸をぶら下げたるその容體、自分は思はず兩手に顏を掩つたのであつた。

『それにしても娘つ子はあの死骸を何うしたであらう。村では、あの娘つ子の手に其死骸のある中は、寺には決して葬らせぬと言つて居りたが……』

かう思つて自分は戸外を見た。昨夜の月にも似もやらぬ、今日は朝より曇り勝にて、今降り出すか、降り出すかと、危んで居たが、見ると、既に雨になつて、打渡す深綠は悉く濕ひ、灰色の雲は低く向ひの山の半腹までかゝつて、夏の雨には似つかぬ、しよぼしよぼと煙るがごとき糠雨の侘しさは譬へやうが無い。

其處へ根本が不意に入つて來た。

檢死事件で一寸手放されず、彼方此方へと駈走つて居たが、漸く何うにかなりさうになつたので、一先體を休めに歸つて來たとの事であつた。

『何うだね？』

と聞くと、

『何ァに、其樣に心配した程の事は無えでごす、警官も奴の惡黨の事は知つて居るだァで、內々は道理だと承知してるでごすが、其處は職掌で、さう手輕く濟ませる譯にも行かぬと見えて、それで彼樣な事を言つたんですァ』

『それで死骸は何うしたね』

『重右衞門のかね。あの娘つ子が引取つて行つたけれど、村では誰も構ひ手が無し、遠い親類筋のものは少しはあるが、皆な村を憚つて、世話を爲ようと言ふものが無えので、娘つ子非常に困つて居たと

いふ事です……。けれど、今途中で聞くと、娘つ子奴、一人で、その死骸を背負つて、小屋の裏山にのぼつて、小屋の根太やら、扉やらを打破して、火葬にしてるといふ事だが……此處から烟位見えるかも知れねえ』

と言つて向うを見渡した。

注意されて見ると、成程三峯の下の小高い丘の深綠の上には、糠雨のおぼつかなき髣髴の中に一道の薄い烟が極めて絶えぐ〳〵に靡いて居て、それが東から吹く風に西へ〳〵と吹寄せられて、忽地雲に交つて了ふ。

『あれが、左樣です』

と平氣で友は敎へた。

それが村で持餘された重右衞門の亡骸を燒く烟かと思ふと、自分は無限の悲感に打たれて、殆ど涙も零つるばかりに同情を濺がずには居られなかつた。『死はいかなる敵をも和睦させると言ふではないか。であるのに、死んだ後までも猶その死骸を葬るのを拒むとは、何たる情ない心であらう、そのあはれなる自然兒をして、小屋の扉を破り、小屋の根太を壞して、その夫の死骸を燒くの材料を作らせるとは、何たる悲しい何たる情ない事であらう』

自分の眼の前には、その獸の如き自然兒が涙を揮つて、その死骸を燒いて居る光景が分明見える。下

には村、かれ等二人が敵として戰つた村が横つて居るが、かの娘は果して何んな感を抱いてこの村を見下して居るであらうか。

『けれど重右衞門の身に取つては、寧ろこの少女の手——宇宙に唯一人の同情者なるこの自然兒の手に親しく火葬せらるゝのが何んなに本意であるか知れぬ。否、これに優る導師は恐らく求めても他に在るまい』

『村の人々、無情なる村の人々、死しても猶和睦する事を敢てせぬ程の冷かなる村の人々の心！　この冷かなる心に向つて、重右衞門の靈は何うして和睦せられよう。さればその永久に和睦せられざる村人の寺に穩かに葬られて眠らんよりは、寧ろそのやさしき自然の儘なる少女の手に！』

暗涙が胸も狹しと集つて來た。

『自然兒は到底この濁つた世には容られぬのである。生れながらにして自然の形を完全に備へ、自然の心を完全に有せる者は禍なるかな、けれど、この自然兒は人間界に生れて、果して何の善もなく、何の業もなく、徒らに敗績して死んで了ふであらうか』

『否、否、否、——』

『敗績して死ぬ！　これは自然兒の悲しい運命であるかも知れぬ。けれどこの敗績は恰も武士の戰場に死するが如く、無限の生命を有しては居るまいか、無限の悲壯を顯はしては居るまいか、この人生に